

KDA-26

Z32-B88

金の星

第一號

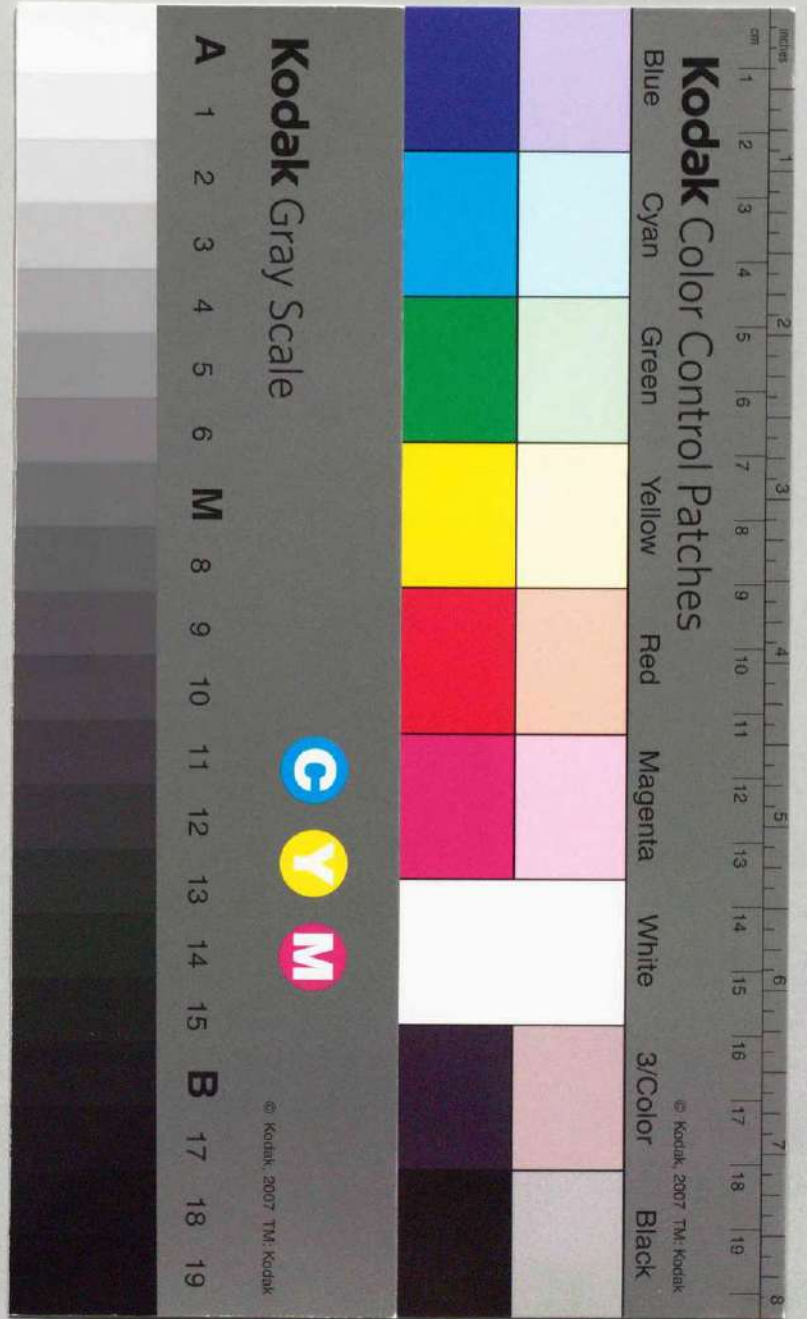
一月號

第六卷



大正二十二年五月五日發行

大正二十二年五月五日發行





□あなたの天分を
満足させるものは□

王様水彩繪具
王様クレイヨン
キングクレイヨン

右三品とも全國師範學校小學
校の先生方が御試験の結果、
御選定に成つた優良品ですか
ら御安心して御使用下さい

りあに店籍書業*店具文名著國全
會商ンヨイレク京東 會社名 印様王 元造製
番九三九七五京東座口金貯替振 地番五内之堀町鴨巢西外市京東



目次 (第六卷第一號)

かど (表紙・オフセット) 寺内萬治郎
 王妃の呪い (口絵・三色版) 中山晋平
 鼠の小母さん (作曲) 野口雨情
 少年劍客鬼歡 (童話) 菊池 寛
 牢破 (長篇) 西條 八十
 十二人の兄弟 (童話) 中島 孤島
 赤い竹笛 (童話) 鈴木善太郎
 細い竹笛 (童話) 水谷まさる
 漁夫と悪魔 (長篇) 秋庭 俊彦
 少年筆工 (童話) 西川 勉
 幽霊船 (ラビヤ奇談) 森川 一郎
 お寒小寒 (童話) 若山 牧水



赤龍 (傳説童話) (七) 沖野岩三郎
 萬勇田 (傳説童話) (七) 小島政二郎
 赤牛 (傳説童話) (八) 藤澤 衛彦
 弟戀 (傳説童話) (八) 中村 信郎
 赤栗 (傳説童話) (九) 久米 絃一
 大吹 (傳説童話) (九) 土 橋 力
 長笛 (傳説童話) (一〇) 伊藤 はなよ
 長者 (傳説童話) (一〇) 池 谷 青水
 猫の池 (佳作) (一一) 本 間 一 郎
 鯉になつた坊さんの話 (傳説童話) (一二) 鈴木 重正
 鼠の小母さん (童話) (一三) 野口 雨情
 ロビンソン漂流記梗概 (一四) 寺内萬治郎
 幼年時自由畫 (一五) 若山牧水、山本 朋選
 童話、童謡、綴方 (一六) 野口雨情、齊藤佐次郎選
 (新年大附録)



ロビンソン漂流記梗概 寺内萬治郎畫



王妃の呪まじない (日繪解説)

王妃は顔色もかへずに、さも嘲あざわらるやうな笑あはをう
かべながら、

『まあ、さう怒おこるのはおよしなさい。』と言いつたか
と思ふと、何なにやら私わたしにわからない呪文まじないを唱となへて、
『わたしの魔法まじないの力で、あなたの身み體たいが、半はん分ぶん大
理石りせきになるように。』と、云いひました。

(『漁夫と悪魔』の第五十五頁より)

雨情選作叢書

各大家の作曲入。定價各册五十錢。送料各册二錢

本居長世先生作曲

◇帝都復興の歌(童謡)

(帝都復興の歌・アンデルセン)

中山晋平先生作曲

◇ちよいと出たお月(民謡)

(ちよいと出たお月・かなしい海)

大和田愛羅先生作曲

◇雀遊(遊技唄)

(雀遊び・南風北風)

佐藤千夜子女史作曲

◇野の唄・海の唄(子守唄)

(野の唄・海の唄)

藤井清水先生作曲

◇矢車草の咲く村(民謡)

(矢車草の咲く村・機織り虫)

雨情選作叢書は野口雨情先生作の童謡民謡中より素朴、優麗の作品を選び、作曲大家の作曲を付して連続出版いたします。童謡と民謡の新しいパンフレットです。

帝都復興の歌

本譜略譜入。定價五錢。送料二錢

東京女子高等師範學校
教諭金子彦二郎先生作曲
東京青山師範學校
教諭福井直秋先生作曲
東京府教育會編纂

日本の帝都東京は、
武蔵野の昔のすが
たとなつてしまひ
ました。

これを更に、よい大
きな東京に復興さ
せるには、全國民の
努力と意氣とが大
切なのです。

この歌には、復興の
努力の大切なこと
がうたはれてあり
ます。特に小學校の
唱歌の教材として
お薦めいたします。

發行所 東京東區錦町一丁目三三九番 米本書店

過ぐ大震災の中に生れ出で吾が出版界の急先鋒をなす
 教育問題叢書の最新刊二名著名

日本大學教授 松原 寛著 教育問題叢書 第四篇 (忽四版)

藝術教育

頁百二版六四
 錢十五圓一價定
 錢八料送

目次
 第一章 藝術研究の方法
 第二章 藝術の科學的研究
 第三章 藝術の哲學的研究
 第四章 藝術教育論

野口雨情著 教育問題叢書 第五篇 (忽四版)

童謡と兒童の教育

頁廿百二版六四
 錢十五圓一價定
 錢八料送

目次
 第一章 童謡の使命
 第二章 童謡は郷土に生れたもの
 第三章 童謡とは如何なるものか
 第四章 童謡は子供のための
 第五章 童謡作法の指導
 第六章 童謡の正風と自然詩とは何か
 第七章 童謡の正風とは何か
 第八章 童謡の正風とは何か
 第九章 童謡の正風とは何か
 第十章 童謡の正風とは何か

◆ 版出院書アデイ ◆

特選小曲詩篇に落谷虹兒先生が特に入念の挿畫を描かれたる一名小畫集
 とも云ふ事を得べき小曲集であります。作者は八十雨情先生外各詩人の
 傑作のみを選びたる上用紙はフランス製特ラフ紙を使ひ表紙は又極め
 て美しき三色刷の高雅なる装頓である。(小曲、又は畫を描かんとする人に薦む良書)

小曲 画集 夢の跡

大震火中不思議にも只一
 書焼失を免れたる本書は、
 神が諸君に預けたるもの
 とも思はれて心好し。
 定價 金四十五
 送料 金六
 (郵券の切手増上料候)

▽吾等は九死の中に一命を得て再生の歡嬉と意氣を本二書に傾注す……

散文 詩集 噫東京

火事泥的のキワ物と同一視
 せず如何に内容の傑れたる
 と價格の廉なるを見られたる
 四六判フランズ本
 送料 金九十二
 實價 金五十五
 綴頁 五

野口雨情 生田春月
 西條八十 水谷まさる
 吉屋信子 下田惟直
 落谷虹兒 人見東明
 竹久夢二 横山青蛾
 川路柳虹 濱名東一郎
 共著

あゝ東京の凄絶悲極は語るも聞くも涙の種ならざるは有りませぬ
 が、本書は有名なる各詩人が吾が帝都の慘禍を長く後世に傳へん
 が爲に涙をふるひつ筆を取られたる實に求め得ざる空前絶後
 の好著書であります。本書一冊の價値は正に百億の富と幾十萬の
 生靈とを失ひて得たる、血と涙の結晶とも云ふ可く、心ある男女
 學生間に忽ち好評を博せるも當前である。是非一書を机上に備へ
 朝夕の清く美しき胸に抱かれんことを乞ふ。

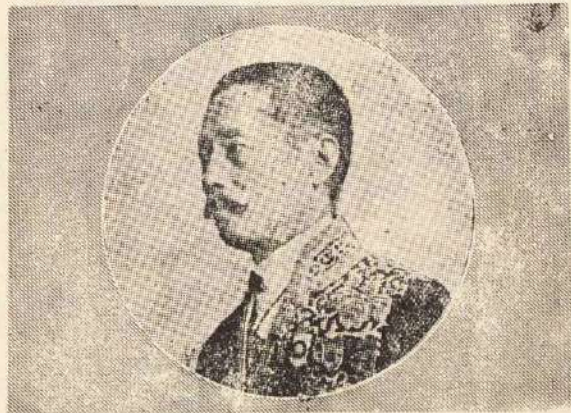
東京神京區南區保町六十番地 交蘭社發行 口替東京 振座
 二〇四七 番九七

天下の少年は大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導がよいから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が憺だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 山内繁隆
 新學博士 三宅博士
 顧問 井上博士 厚田博士
 岡田前文部大臣



新學期 講入會の絶好機

講録見本つき
 印刷書無の進呈

一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の努力のない者はどうしても生存競争の勝利者たることは六々しい。併し家庭の事情で中學に入れない者が、決して失望するに及ばない。中學に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンスと出来てある。創立以來二十二年の古い経験のある講録で有名な大日本國民中學會の通信教授法がそれだ。

◎大震火災の爲め本會事務部・總務部の一部を直に復興に着手し講録健全部完成せり。

東京駿河臺(お茶の水電車通り)
大日本國民中學會
 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三
 神田三〇〇四
 振替名古屋四二八〇番、
 東京振替貯金課焼失に付當分名古屋
 四二八〇番を使用す

童謡 大家 萬原 幽先生選歌
 東京音樂學校教授 弘田龍太郎先生選曲

最新刊

白鳩童謡集

小さい方自らの作歌作曲、音楽の好きな方の作曲作歌、此等の歌曲には又他に見られない新鮮な純真な感じが、ありま
 作。よし技巧には多少拙い所があつても、そこに尊い無垢な實秘められて居ります。本書に收むる歌曲二十有餘中
 經たるもの、従つて悉く世の音楽家若くは音楽教育家の推奨を受け愛唱禁する能はざるものと思はれます。

野口雨情先生序 篠崎徳太郎原登兩先生著

最新刊

童謡詠劇

兒童教育に必要の唱導されて来たのは時代の要求である教育界の進歩であります。それと同時に童謡詠劇が兒童
 教育の性質を曲解して居るからであります。當然の要求である唱導法と指導法とを誤つて居るからであります。往々に異論のあるのは童
 著者の空論や想像上の指導法と全く同日の比ではない。本書の選擇と指導法とを誤つて居るからであります。それと同時に童謡詠劇が兒童
 上の現はれると思ひます。従つて「童謡詠劇と教育」といふやうな新しい問題も自然解決されることと思ひます。

(第一集) 美麗菊版 一冊
 作曲 二十一種
 正價 金四拾錢
 送料 金四錢

(第一冊) 美麗四六版一冊
 紙數百五十二頁
 作曲 三十五種
 正價 金六拾錢
 送料 金六錢

發行所 東京市牛込區三共出版社 電話 牛込一七二番
 東京市牛込區小町二番 電話 五三三番

◇物讀の月正おとスマスリク◇



蔭谷虹兒先生作「繪ハガキ」

麗 災 畫 報!! 第三第四輯出版さる!!!

美しい彩色版を利用した虹兒氏獨特の畫風は、夢の如く、幻の如く、見る人々の胸に迫つて、あの恐怖の日を、美しい一場の想ひ出としてしまふ。

内) 第三輯 ○建設 ○寒夜にさゆる復興の聲 ○
 ○災地 さまよふ ○小鳥もれぐらを驚かされたか ○
 (容) 第四輯 ○魔神の呪ひ ○天使の救ひ ○
 ○傷は癒ゆ ○微笑みて立つ ○

原 原 版 特 價 四 枚 一 組 金 二 十 錢

○第一輯○第二輯○

世に出ずるや、大好評のうちに賣れゆき飛ぶが如く、またたくうちに、再版、三版、四版と刷を重ね、繪業書出版界の新記録をつくりたり。今もなほ賣れ行き急流の如し。

銅凸版二色刷 特價 四枚一組 金 二十 錢

新年用繪業書「トランプ」新春のよろこび 出版す!!

ト ラ ン プ 虹兒氏獨特の少女畫を、四枚の繪ハガキへ、それぞれに、トランプの形式で現代化するもの……

新春のよろこび は、「お神樂」「万才」「鳳」「道子」の四枚を、可愛いらしい少女の姿をかりて、表現せるもの……

原色版四度刷 定價 四枚一組 金 二十五 錢

二一五七京東替振 區田神京東
三四〇三田神話電 堂和平屋方上 六町保神通

赤阪清七先生著

コドモ讀物 第一卷

星の國

最新刊

待ちにお待ちしてゐました赤阪先生の童話が出ました。たのしいクリスマスのために。

頁百三判六四
圓貳價定
錢八十料送

小川未明先生著

コドモ讀物 第二卷

アメチコの天使

最新刊

未明先生の童話ば皆様もたがたがお読み下さつたことと思ひます。お正月の讀物として新らしくお書き下さいました

頁百三判六四
圓貳價定
錢八十料送

吉田助治先生著

コドモ讀物 第三卷

童弓張月

最新刊

弓張月ばあの有名な鎮西八郎ミナモトノメトモのお話です。それは、ユカイな英雄物語です。

頁百三判六四
圓貳價定
錢八十料送

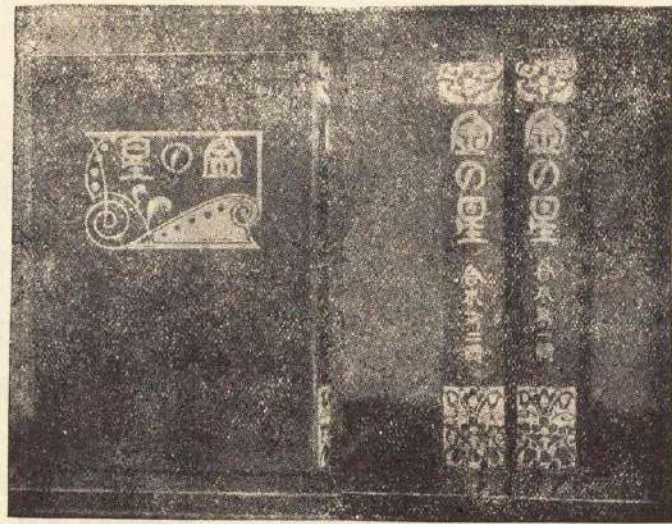
座口替振 院書アデイ 區込牛市京東 所行發
二九一六臺仙 四一町伏山

傳説童話號



星の金

號年新



美しい「金の星」の合本
第二輯が出来ました!!

▽水島爾保布先生装幀△

總クロースへ麗しい金箔を置いたそれは、美しい装幀ですから皆様の書棚にお飾りになつたら、どんなに見事でせう。そしてこれが幾冊にもなつたら、一段と皆様のお書齋を美しくする事です。賣切れません内、至急に御申込み下さい。

- 第一輯 (再版中) 定價金一圓八十錢 送料十圓四十錢
- 第二輯 (第五卷一號) 定價金一圓八十錢 送料十圓四十錢

東京市外 東田三五一 星の金社 振替東京五九五六番 電話小石川三五八七番

鼠ねずみの母はさん

中山晋平作曲

(♩ = 64)

1 1 0 5 5 1 2 3 | 5 5 3 3 2 0
 こもんのねずみかちよこはた
 こもんはなつたかうもりさん

3 3 3 3 2 2 5 5 | 2 3 2 1 0 0
 ねずみのおはさんかうもりさん
 ねずみもちよこよんでちよこあそぼ

1 2 1 6. 5 | 0 1 2 3 6 | 5. 5 3 2 1 2 | 3- 0 |
 こもんのねずみをやいせ

2 1 2 3 0 | 5. 5 5 2 | 3. 3 2 1 0 5 | 0- 0 ||
 おつきさんがちよこでてちよこあそべた

鼠の嫁入り

野口雨情

鼠の嫁入り

紙の袋に

お米をいれてもつてつた

鼠の嫁さん

ちよろちよろ歩き

お耳にかんざし

ちよこらとさしてゐた



お耳のかんざし

お目はポチポチ

鼠の嫁さん

お髻が生えてゐた

鼠の嫁入り

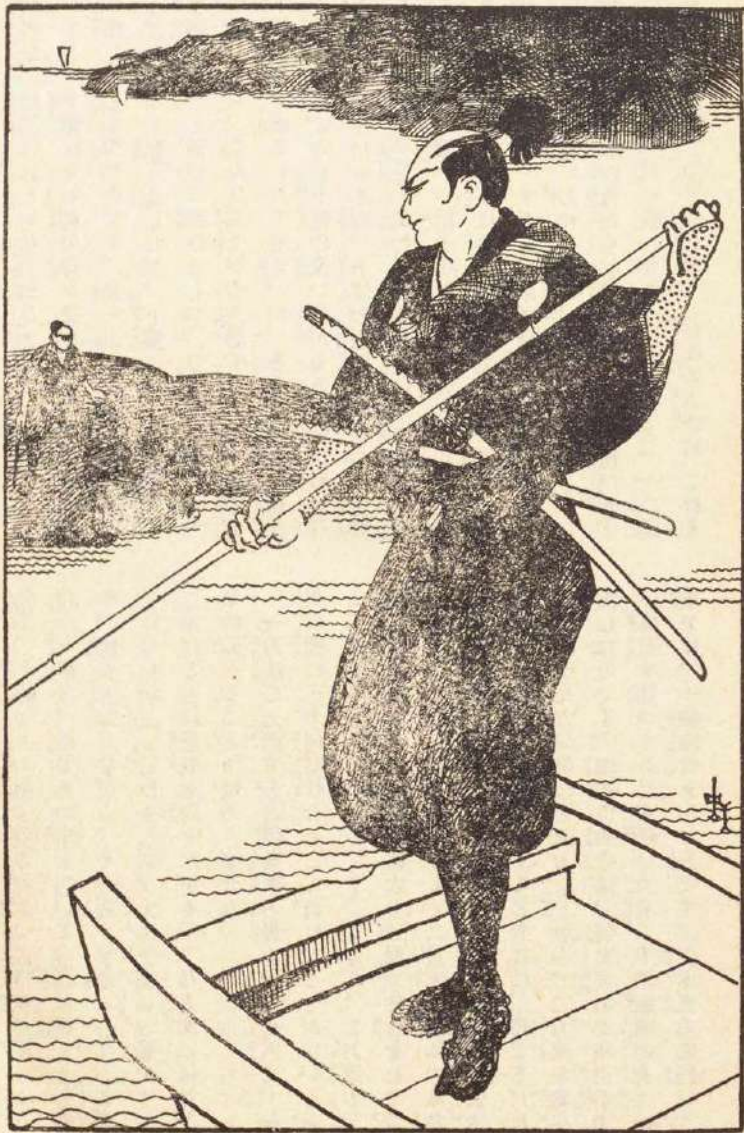
お供の皆さん

お米のはひつた

紙の袋を

ひつぱりひつぱりもつてつた





(一)

少年劍客鬼歡

菊池寛

昔は、武士が皆大小の刀を腰にさしておりました。そして、いざと云ふと刀を抜いて戦つたものです。だから、刀を使ふ術を知らないものは、武士として威張れませんので、昔の武士は少年時代から一生懸命に、劍術のけいこをしたものです。今は、誰でも學校へ行つて、學問をするやうに、昔の武士の子供は、みんな劍術のけいこに行つたものです。それにつれて、劍術の先生にも偉い人があつました。

また劍術の流儀にも、いろ／＼澤山在りました。劍術の名人で名高いのは、塚原卜傳、伊東軍刀齋、宮本武藏、柳生但馬守、荒木又右衛門などです。塚原卜傳の無手勝流と云ふのを皆さん御存知ですか。卜傳が、あるとき琵琶湖を舟で渡つてゐると、亂暴な武士から、喧嘩を吹つかげられました。餘儀なく、湖の中の近くに見えてゐる無人島へ上つて、決闘をすることになりました。無人島へ着くと、その武士は最先にひらりと島へ飛び上りました。すると、卜傳はついでに上るやうに見えましたが、何と思つ

たのか、船頭に棹をかせと云ひました。船頭が棹をかすと、卜傳はその棹で岸を突いて、ついと舟を沖へ出してしまつたのです。島へ上つた武士は、ぢだんだを踏んで怒りましたが、卜傳は「これが俺の無手勝流だ」と云つて笑ひました。むろん、島へ上つて戦つたら、こんな武士が十人居ても二十人居ても卜傳に斬り殺されたでせう。が、そんな無益な殺生を避けたところに卜傳の偉い所があると云はねばなりません。またある時、卜傳の近所の人々が、卜傳とその弟子の早業を試して見るために、卜傳達の通る道に荒馬を繋いで置きました。すると、弟子が先きに來ましたが、馬は弟子の姿を見ると、烈しく後足で蹴りました。すると、弟子はひらりと身體をかはしました。見てゐた人達は、やんやと賞めました。すると、その後から、何も知らない卜傳が來ました。卜傳は、馬が繋いでゐるのを見ると、一二間も、離れて無事に通りました。近所の人達は、これを

見て、卜傳よりも弟子の方が偉いと口々に云ひました。卜傳は、後でその事を聞いて、「馬は跳るものぢや。跳ると知りながら、その近くを通るのは、馬鹿ではないか。」と云ひました。尤も至極な理窟ですがこんなことは勇氣を誇りたがるやうな人間にはなかなか云へることはありません。

一刀流の元祖である伊東軍刀齋も、強い人で、一生の裡に三十何回仕合をして負けたことがないと云ふのです。ところが、それよりも上手は、二刀流の元祖宮本武藏で、一生の裡に六十三回、仕合をして負けたことがないと云ふのです。二刀流と云ふのは左右兩方の手に刀をもつて戦ふと云ふ流儀です。宮本武藏は、命の取り遣りをするときには、持てるだけ刀を持つた方が得たと云ふ考から、二刀流を考へ出したのです。柳生但馬守は、將軍家の御指南番で一萬石を貰つてゐた立派な大名です。劍術の先生の

伊賀越と云ふ所で、義弟の敵打の助太刀をして、三十六人斬つたと云ふ人です。三十六人斬つたと云ふのは間違で、本當は五六人だと云ひますが、三十六人位は相手にして戦ひ、その中の五六人斬つたと云ふのでせう。

(二)

が、かうした劍術の名人は、皆幕府時代の初頃の人で、今から二百五十年も前の人です。が、明治近くになつて、偉い人が居なかつたかと云ふと、居ない譯でもありません。幕末の三劍客と云つて、有名な三人の劍客がゐます。幕末と云ふのは、幕府時代の末と云ふことですから、今から百年位前に居た人々です。三人と云ふと誰かと云ひますと、神田お玉ヶ池に道場を開いてゐた千葉周作、高橋綱河岸にゐた桃井春藏、麴町三番丁、丁度、今の靖國神社の所に道場を開いてゐた齋藤彌九郎の三人です。三人

とも、勇名を江戸はおろか日本中に鳴りひびかしてゐた劍客です。が、その中でも、齋藤彌九郎は、劍術の外にも、學問があり、勤王の志があり人物がしつかりしてゐましたので、門下に偉い人が澤山出てゐます。維新の三傑の一人である木戸孝允なども、その門人です。その外維新の時に働いた偉い人達が澤山出ました。私がお話ししようとするのは、この彌九郎の三男で、歡之介と云ふ少年劍客のことです。

(三)

彌九郎の長男に新太郎と云ふのがありました。此の人も父の子丈あつて、若い時から、劍術の達者でありました。二十歳から、二十一にかけて腕利の門弟三四人をつれて、日本全國を武者修行に歩きました。武者修行と云ふのは、皆さんも御存じの通り、諸國を廻つて劍術の修行をするのです。新太郎と門弟達も、國々の城下を廻つて、劍術の道場があれば

押しかけて行つて、劍術の仕合をするのです。今でも、東京が何事につけても秀れてゐるやうに、昔の東京、即ち江戸で、修行をした新太郎達は、何處の道場へ行つても、こればと思ふ相手はありませんでした。嘉永二年の三月十一日のことです。この一行が、長州萩の城下へ行つたとき、宿屋へ着いて御飯を喰べてゐるとバン／＼急イ！バン／＼と云ふ勇ましい竹刀の音がします。『おや道場が近くにあるな。』と云つてゐるときに、宿屋の主人が挨拶に來ました。

『御亭主、御當地は武術は盛んだらうな。』と、新太郎が訊きました。亭主はもちろんお國自慢ですから、『何しろ、三十六萬石毛利大膳太夫様の御城下ですから、盛んだどころではございません。あれ／＼今聞えてゐるのが、明倫館の竹刀の音です。あれは、殿様がお建てになつたそれはそれは立／＼な道場で、ついこの間出來上つたばかりで、五十間に百間の

廣い道場で劍士が二三百人も居られます。』

『なるほど、それは面白い。今から腕がなる！』

新太郎は門人達と顔を見合はして微笑しました。あくる日は、朝早くから、一行は明倫館へ押しかけて行きましたが、新太郎達の鋭い太刀先には明倫館の連中も一たまりもありませんでした。悠々と勝ちほこつて宿屋へ歸つて來ました。すると出て來たのは昨夜の亭主です。

『いかゞでした。今日の御勝負は！』

お國自慢の亭主は、いくら江戸の劍士が威張つても明倫館の先生達に叶ふものかと云ふ顔をして居ました。

『なるほど御亭主の云ふ通り明倫館は立派だな。劍士も澤山ある。だが、本當の劍士は一人だつてゐないぞ。道場丈は立派だが、中はダメだ。あれちや、黄金の鳥籠に雀を飼つて置くやうなものだ。は、は、は、』



若い新太郎は、愉快さうに笑ひました。

それを聞いて、宿屋の亭主は、ムツとしました。「黄金の鳥籠に雀を飼ふ。」何と云ふするどい悪口でせう。新太郎の持つ竹刀が鋭いやうに、悪口もなかなかするどいものでした。お國自慢土地びろきの亭主は、その悪口にがまんが出来なかつたと見え、直ぐその足で明倫館へ行つて、新太郎の云つた悪口を云ひ付けました。明倫館にゐた血氣の若武士は火のやうに怒りました。たゞでさへ、負けて口惜しい所へそんな悪口を開かされたのだから、堪りません。「おのれ！ にくい江戸の劍術使ひ奴、悪口にも程がある！ そんな生意氣なことを云ふのなら、押しかけて行つて叩き斬つてしまふ。」と云ふ騒ぎになりました。

所が、この騒ぎを知つた家老達が心配しました。若武士達が江戸の劍術使ひを殺したなどと云ふことになる、それこそどんな大事件になるかも知れま

せん。これは手を廻して、大騒ぎにならないやうにするのが一番だと思つたので、そつと新太郎一行の所へ使ひを寄越しました。實は家中の若武士が、貴君方を狙つてゐる。萬一切り合などになると、どんな大騒動になるかも知れないから、早速當城下を立ち退いていただきたい」と云ふのでした。

新太郎も、旅先でそんな騒ぎを惹き起すことは好まないことですから、家老達の頼みを聞いてその夜直ぐ萩の城下を立ち退いて、九州の方へ渡りました。

(四)

が、一方新太郎が立ち退いたのを知つた明倫館の連中の怒りは収りません。中には新太郎を追ひかけようと云ふ人も居ましたが、他の大名の領地で切り合などをすると何んな騒ぎになるかも知れませんので、それには誰も賛成するものはありませんでした。それよりも、いつその事、敵の本城たる江戸の



齋藤の道場を襲つてやらう。正々堂々と仕合を申し込んで、新太郎の父の齋藤彌九郎を初め、道場の連中を思ひ存分叩きつけてやらう、それが何よりも立派な復讐ではないとか云ふ人がゐました。それにみんな賛成しました。そして、明倫館の劍士の中から、十五人丈強い人を撰んで江戸へはる／＼とやること

になりました。撰ばれた十五人は、竹刀や面や胴などの道具を釣臺に積んで、山陽道東海道をはる／＼と擔ぎながら、道中して一月半もかゝつて、江戸は麹町三番町の齋藤の道場へやつて來ました。十五人の面々は、どんな鬼神なりとも叩き潰してやらうと云ふやうな勇ましい息でした。(つゞく)

牢破り (長篇童話)

西條八十



前號までの裡帳。佛國騎兵中尉ゲエラールは敵軍の捕虜になつて牢獄に投じられたが、ある嵐の夜、間にまぎれ牢を逃げ出しました。大雨の中が夢中で駆けましたが、途中で方向を間違へ、一晩中逃げた揚句が、またもとの牢屋の近くに来てしまつたのです。中尉は驚いて藪の中にかくれました。

九 妙な小男

諸君！ 僕がさうやつて藪の中に寝そべつてゐるうちに、あたたかい太陽がすつかり濡れた服を乾かしてくれた。そこで日が暮れきつたのを見はからつ

て、またノコノコ出發することになつた。今度は二度とへまをやらないやう、星によつて方向を見定めることにした。このやりかたは昔から軍隊で習つてゐるのだ。さうしてせつせと歩いて牢獄から八里は大丈夫離れた地點まで來た。僕の計畫では何でも最初にぶつかつた人間から衣類を今度は上下ソツクリ貰ひ受けようと思ふのだつた。それから初めて北海岸へと出るつもりだつた。

と云ふのは、北海岸にはたくさん密輸入者や漁夫どもがゐて、牢破りの人間をつかまへては英國政府の懸賞金にありつかうとしてゐるからだ。僕は目につかぬやう帽子の羽根飾りをつつてしまつた。けれども昨日分捕した旅行外套の下からは軍服がチヨイチヨイ見えるので、何時かは感づかれるにきまつてゐる。だから、まづ何よりも第一着に、ソツクリ服装をとり變へることが肝要だつた。

夜が明けたころ、僕は右手に一すぢの河のながれを、また左手に小さな町を見た。：：うす青い煙が野原のうへにたなびいてゐた。どんなにか僕はその町へ入つて見たかつたらう！ どんなにか、自分の國と變つてゐる英國の風俗を見たかつたらう！ けれどもこの帽子で、この髻で、おまけにこの言葉で入つて行つたら、直ぐにフランス人だと見あらはされてしまふだらう。僕はあきらめて、ひたすら途を北へと急いだ。その間にも油断なく前後を見廻して

ゐたが、追手らしい者の影はさらに見えなかつた。ちやうどお午ころになつて、僕は人氣の無い寂しい路間へとかかつた。するとそこにボツンと一軒人家が建つてゐた。それは田舎びた門と、小さな庭とが前についた、小じんまりした家だつた。鶏やひよつこがそこらにたくさん遊んでゐた。僕はすこし離れた路ばたの羊齒の葉かげに寝そべつて、ちつとその家の様子を見てゐた。どうやらこの家なら自分の欲しがつてゐる物位ありさうだつた。僕の麵麴はもう無くなつてゐたし、さんざ歩いたあげくお腹はもうペコペコだつた。で僕はしばらく偵察を試みた上、この家を攻撃して降参を勧め、入用品を分捕つて來ようと思つた。何が無くとも難はゐるのだから、オムレツ位には有りつけるに相違ない。さう想つただけで僕の口の中には、はや涎かいつばい溜つて來た。

だが一體こんな淋しい處にどんな人間が住んでゐ

るのだらう。と訝りながら、なほもしばらく眺めてゐると、やがて一人の活潑さうな年の若い小男が門の外へ出て来た。とそれに續いてもう一人、年嵩な男が両手に二本の大きな、體操に使ふ棍棒をぶら下げて出て来た。

年嵩の男は若い伴れにその棍棒を渡した。すると小男は受取るが早いかそれを上下左右にくるくると目にも止まらぬ速さでふり廻し始めた。年嵩の男は傍に立つて、その様子を眼も放さず熱心に見物してゐた。さうして折々何か忠告を與へるらしかつた。それが済むと、今度は小男は繩を持つて、女の子のやうに繩飛びを始めた。それをまた年嵩の男は相變らず熱心に眺めてゐるのだ。

諸君！ 諸君に於ても同様だらうが、その時僕は何か何やらこの兩人の様子がサツパリ分らず、呆氣にとられてしまつた。事によると、これは年嵩の方が醫者で、若い方は病人で、何か特別な治療でも受け

かう考へたわけは、この場合オムレツや雞の肉はたしかに、喰べたいには違ひないが、この家の中にはとにかく太の男が二人まで居るのだから、外套だけ取上げてサツサと逃げた方が結局面倒が無いと考へたからだ。さう料簡をきめて、僕はなほもヂツと羊齒の蔭にかくれてゐた。やがて小男のトットツ駆ける足音が近づいて来た。見ると重さうに大外套を着た彼の額には汗の玉が流れてゐた。

彼はかなり頑丈な體格をしてゐた。が、いかにも小柄で、その外套を奪つたところで果して自分の役に立つかと僕が疑つたほどであつた。やがて彼がちやうど自分の寢てゐる前のところへ来た時、僕は急に躍り出して、そこに立ちふさがつた。彼はひどくびつくりした體で黙つてちつと僕をみつめた。

一〇 拳闘の選手

「何ですな。君は？」

一六
てゐるのかも知れないとも僕は心の中で想つた。だが、なほもヂツと様子を見てゐると、やがて年嵩の男は家の中から大外套を持つて来た。さうしてそれを小男にさせて、額のところまでボタンを締めさせた。なにしろその日は陽氣がごく暖かだつたので、この事は今までもよりもなほ一倍僕をビツクリさせた。

「とにかくあれで運動の方はおしまいになつたんだらう。」僕はさう考へた。

ところが愈々驚いたことには、おしまいどころか小男は、その大外套を着たなり今度は急に駆けはじめた。しかも、僕の寢てゐる方へと草原の上をドンドン駆けて来るぢやないか！ 見るともう一人の年嵩の男は、いつか家の中へ入つてしまつた。そこで僕の胸にはふと一つの考が浮んだ。

「よし！ これからあの小男の着てる外套を分捕つてしまはう。そして食物はどこぞ先の村へ行つて買ふことにしよう。」

彼はしばらくしてから、やつとかう訊いた。

「いやどうも失禮、實は少々入用があつて、あなたのその外套を頂戴したいのですが……」

僕はブツキラ棒に云つた。

「何を頂戴したいつて？」

と、彼が叫んだ。

「その外套をです。」

「え、これは面白い。」

と、彼は向き直つて、

「何のために僕がこれを君にあげるのですな？」

「僕が入るからです。」

「ハ、ア、して若し僕があげないと云つたら？」

「お氣の毒ながら腕力で頂くまでです。」

小男は両手を大外套の底匣に突込んだなり、その角ばつた、きれいに髭を剃つた顔に、さもさも面白さうな笑ひをうかべた。

「なるほど、では取れるものなら取つて見たまへ。」

と、彼は云つて、
「君は見たところ抜目の無い顔付をしてゐる。だが今度はやりそくなつたよ。僕は君がどんな人間だか知つてゐる。君は牢破りの佛蘭西人だらう。どう隠



したつて一目見りや分るさ。だがお氣の毒なことに君には僕が何者だか分るまい。分つてりやこんな大それた真似はしない筈だ。いいかい、僕は拳闘の選手で音にひびいたギリスル、パッスラアだよ。そしてあそこに在るのが僕の道場だ。」

かう云つて彼は「どうだ恐れ入つたらう」と云ふやうな風で、僕を睨めつけた。だが僕はそんなおどかしには一向無頓着な體で、髭をひねりながら、彼の頭から足の爪先までジロ／＼眺めて、ニヤリとして答へた。

「フム、さう聞きや君も多少腕に覺えのある男だらう。だが君の眼の前にゐるのはナポレオン大帝の麾下で「鬼」と綽名をとつたヂエラル中尉だぜ。さあ、悪いことは云はない、文句を云はずにサツサとその外套を抜いで渡したらよからう。」

「なに糞ッ！ 誰が貴様なぞに渡すものか！」
小男は赤くなつて叫んだ。



「よし！ おやアおれが奪つて見せる！」

かう云つて僕は一足前へ進んだ。

小男はさつそくにその重い大外套を抜き棄てた。

さうして片々の腕をつきだし、片々の腕を横ざまに

胸に、變な身構へをして、異様な笑をうかべながらヂツと僕の方を見た。

僕はと云ふと、今までついぞこんな商買の男と闘かつた経験が無いのだ。

だが馬上だらうが、平地だらうが、また獲物を持たうが持つまいが、闘ひかたはただ一つだ。諸君も知つての通り、千變萬化の戦場で働く軍人はどんな風にしても敵と闘ふ途を心得てなければならぬのだ。

そこで僕は突貫の聲をあげて、矢庭に相手に飛掛り兩足でしたたか蹴りつけた。

と同時に、僕の兩の踵は宙に浮いて、幾百千の花が眼の前に散つた。

それから僕は仰向けざまに後方へドスンと倒れたまでは覺えてゐるが、後は黒暗々、何もかもわからなくなつてしまつた。



十二人の兄弟

中島 孤島

むかし／＼あるところに王と妃があつて、仲よく暮してをりました。二人のなかには十二人の子供があつて、みんな男の子ばかりでした。ある日王は妃に向つていひました。「こんど生れて来る十三人目の子が、もし女だったら、十二人の男の子はみんな殺して、わしの手持つてゐる寶も國も、残らずその子にゆづることになしよう。」

で、王は十二の棺を造らせ、その中へ鉋屑を詰め、一つづつ枕を入れて、一つの部屋の中へ並べて、鉋屑をおろしておきました。そしてその鍵を妃に渡して、この事は決してだれにも言ふなといひつけました。けれども妃は、悲しくて、悲しくて一日中泣いてゐました。

一番末の子は、聖書から名をとつて、ペンヤミ

ンと呼んでゐましたが、まだお母さんのそばをはなれないほどの年頃でしたから、お母さんの泣くのを見て、かういつてたづねました。

「お母さんはなぜそんなに泣くの？」

「坊やにはいはいれないわけがあるの。」とお母さんが言ひました。

それでも子どもは、そのわけをきくまでは、どうしても安心しないので、お母さんはどうとう部屋の鉋屑をあけて、鉋屑の一ぱいつまつた十二の棺を見せました。その時お母さんはかういつてきかせました。「ペンジャミンや、この棺はお父さんが、お前や兄さんたちを入れるやうに、かうして用意しておきになつたのです。わたしがもし女の子を生めば、お前たちはみんな殺されて、これへ入れて埋められるのです。」

かういつて話すうちも、お母さんは悲しさに泣いてゐるので、子どもはかういつて慰めました。

「お母さん、もう泣かないで。僕たちは自分で逃げてくからね。」

「あゝ、さうなさい。」とお母さんが言ひました。「兄さんたちと一しよに林へ逃げておいで、そしてだれかひとり一番高い木の上で見張をして、お城の塔の方を見ておいでなさい。生れた子が男なら白い旗を立てるから、みんなしてすぐ歸つておいでなさい。けれども女の子だったら、赤い旗を立てるから、それを見たら、大急ぎで、どこかへ逃げておいで、助かるかも知れないから。わたしは毎晩起きて、お前たちのために神さまにお祈りをませう。冬になれば暖かい火を下さるやうに。夏になれば、涼しい日蔭を下さるやうに。」

そこでお母さんは、子どもたちの幸福を神に祈つて、みんなをそつと林の方へ逃してやりました。

十二人の兄弟は林へ入ると、代る代る見張番にな

つて、一番高い榊の木のでつべんへのぼつては塔の方をながめてゐました。

十一日たつて、ペンヤミンの番が来た時に、塔の上へ旗が上がりました。けれどもそれは白いのではなくて、みんなが殺されるといふ知らせの血のやうな赤旗でした。

それを聞くと、兄弟はみんな腹を立つて、口々にかう誓ひました。

「女が生れたつて、僕らが何で殺されるんだ？ この誓はきつと打つてやるぞ。女の子と見たらどこで會つても、きつと血を流さすにはおかない！」

かう誓つて、十二人の兄弟は、だんくと林の奥へ



はひつて行きました。するとそのまん中の一番木のこもつたところに、一軒の大變にきれいな小屋があつて、中には誰も住んでゐないので、兄弟は口々にかういひました。

「ここにゐることにしよう、ペンヤミン、お前は一番ちひさいし、一番弱いから、僕らが食ふ物を見つげに出てゐる間は、家にゐていろくゝな用をしておいで。」

かういつて兄たちは毎日林を駆けまはつて、兎だの、鹿だの、鳥だの、鳩だのを、見つけ次第とつて来ると、ペンヤミンは家にゐて、それを料理して、みんなに食べさせるのでした。

こんな風にして、兄弟はこ

の小屋に住んでゐるうちに、いつの間にか十年の月日がたちました。

妃が生んだ女の子も、今ではもう大きくなりました。顔の美しい通り、心も優しくつて、額にはいつも金の星が現れてゐました。

ある時大掃除があつて、澤山の洗濯物を干した中に男の子の着るシャツが十二枚あるのを見て、女の子はかういつてお母さんに尋ねました。

「あの十二枚のシャツはたれが着たんでせう？ お父さまのシャツにしては、少し小さいやうだわ。」それを聞くと、お母さんは深い溜息をついて、か



う言ひました。

「あれはね、お前の十二人の兄さんたちが着たのです。」十二人の兄さん？」と少女が言ひました。「あたしはどうして今まで知らなかつたんでせう？ その十二人の兄さんは、どこにゐらつしやるの。」「誰にも分らないの。」と妃が答へました。「みんな出て行つたきりなんですもの。」

かういつて妃は女の子を錠をかけた部屋へ連れて行つて、錠をあけて、錠屑と枕を詰めた十二の棺を見せました。

「この棺は」と妃が言ひました。「お前、兄さんたちを入れるつもりだつたのですが、みんなお前の生れないさきに、こつそり逃げて行つてしまつたのよ。」

かういつて、妃はくはしくその譯を話してきかせました。

それを聞いて少女はかういひました。

「お母さん、泣かないで下さい。わたくしが行つて、兄さんたちを捜して來ますから。」

かういつて、少女は十二枚のシャツを持って、すぐに林の方へ出かけて行きました。

少女は一日中林の中を歩きつゞけて、日のはひる時分に、あの不思議な小屋へ着いたので、ずん／＼と中へはひつて行きました。すると小屋の中にはひとりの若者がゐて、少女を見て、かうたづねました。「お前はどこから來たのです。そしてどこへ行きますか？」

かういつて、若者は少女の美しい姿と立派な着物と額の星へ目をつけて、目を丸くして立つてゐました。

さう聞くと、少女はかう答へました。

「わたしは死んでもかまひません、十二人の兄さんのお命が助かることなら。」

「いや／＼。」とベンヤミンがいひました。「お前は死なせない。さア、十一人の兄さんたちが歸るまで、この桶の下へかくれておいで、みんなが歸つたら、うまく話をきめるから。」

少女はいはれた通りにしました。

日が暮れると、みんなが狩からかへつて來ました。食事の支度が出來て、みんなが食卓の前へ坐りました。食事の間に兄たちはベンヤミンに向つてかういひました。

「なにか變つたことはないかね？」

「なにかおき／＼になりませんでしたか？」とベンヤミンがき／＼かへしました。

「きかなかつたね。」とみんながいひました。するとベンヤミンはまたかう言ひました。

すると少女はかう答へました。

「わたしは王の女ですが、十二人の兄さんたちをたづねて歩いてゐるのです。兄さんたちを捜しあてるまでは、青い空のはてまでも行くつもりです。」

かういつて十二人の兄弟の着た十二枚のシャツを出して見せました。

ベンヤミンはすぐに、この少女は妹だと分つたのでかういひました。

「僕はお前のすぐの兄のベンヤミンだよ。」

かう聞いて、少女が、嬉し泣きに泣き出すと、ベンヤミンも同じやうに泣きました。そして二人は互ひに抱きあつたり、キスしたりしました。

そのうちにベンヤミンがかう言ひました。

「妹よ、一つ困つたことがあるんだよ。僕らは女の子のために自分が國にゐられないやうなことになるのだから、女の子を見たら、どこであつても殺してやるといふ誓を立てゝゐるのだ。」

「兄さんたちは林へ行つてゐらつしやるし、僕は一日中うちに引込んでゐるんですが、これでも僕の方がなんでもよく知つてますよ。」

「早く聞かしてくれ。」とみんなが言ひました。

「その前に一つ約束して下さい。」とベンヤミンが言ひました。「最初に會つた女の子は殺さないといふことを。」

「よし／＼。」とみんながすぐに同意しました。「最初に會つた女の子は助けてやる。さア話しな。」

これを聞いて、ベンヤミンが言ひました。

「妹が來てゐるんです。」

かういつて、桶をもちやげると、その下から、お姫さまのやうな着物を着た、額に金の星のある、きれいな、上品な、しとやかな王女が出來ました。それを見ると、みんなが大喜びで、抱いたり、キスしたり、大騒ぎをしてかはゆがりました。

この日から、少女は家にゐて、ベンヤミンの手助

けをしました。十一人の兄たちは、相變らず林へ行つて、獸物や鳥をとつて來ると、ベンヤミンは妹と二人でそれを料理して、みんなに食べさせるのでした。

少女はまた薪をひろつたり野菜をとつたり、鍋を火へかけたりして、十一人の兄弟が歸つてさへ來れば、いつでも食事が出来るやうにしておきました。

それからまた家の中をきちんと片づけて、寢床には、新しい、白い、きれいな敷布をかけておくやうにしたので、みんなが満足して、いつも仲よく日を送つてゐました。

ある日兄と妹は、特別な御馳走をこしらへてみんなの歸るのを待つてゐましたので、みんなが食卓に坐つた時には、いつもよりも一層愉快に飲んだり食べたりしました。この不思議の小屋には、小さな花園があつて、そこに十二本の背の高い百合が咲いてゐました。少女はこの花を見さんたちの胸へさし

二六
たら、さぞきれいだらうと思つたので、その晩の御馳走の皿へ、めいめい一本づゝ添へるつもりで、十二の花を摘み取りました。けれども少女が十二の花を摘むと同時に、十二人の兄弟は、十二羽の鴉になつて、林から飛んで行つてしまひました。同時に、小屋も、花園も一時に消えてしまひました。

かあいさうな少女は、ひとりぼちで、淋しい林の中へ取残されてしまひましたが、しばらくしてあたりを見まはすと、ちきそばにひとりのおばあさんが立つてゐて、少女を見てかう言ひました。

「お前さんはなんでこんなことをしたの？ なせこの十二の白い花をそつとしておかなかつたの？ この花はお前の兄さんたちだつたのだが、今では鴉になつちまつたのだよ。」
それを聞くと、少女は涙をぼろ／＼と流しながら

かうたづねました。

「もう元へかへす道はないんでせうか？」

「それ

は一つ

ぎりあ

るんだが。」

とおばあさ

んが言ひました。

「それがまたむづ

かしくつて、誰にだつて

出來やしない。もしお前が

兄さんたちを助けようと思つた

ら、七年の間監になつてゐなく

てはならない。しやべつてもい

けなければ、笑つてもいけない。

七年のうちたゞ一時間でも、この



規則を破つたらもうそれでおしまひだ。ほんの一言でも話したら、その一言で、お前の兄さんたちは死んでしまふのだ。』

これ聞いて、少女は、心の底からかう誓ひました。

『きつと兄さんたちを助けて見せる。』

そこで少女は林の中で一本の太木をさがして、そのてつべんへ攀ちのぼつて、枝の上へ坐つて、糸を紡いでゐました。

その時から少女はもう口もきかなければ、笑ひもしませんでした。

するとある時王がこの林へ狩をしに來ましたが、王の連れた大きな獵犬が、少女の坐つてゐる木の下へ來て、まはりへ跳ね廻りながら氣ちがひのやうに吠え立てました。

そこで王が來て見ると、額に金の星のある美しい

少女が、枝の上へ坐つてゐたので、王はその美しさに見とれてしまつて、少女に向つて自分のお嫁さんにならなにかときいて見ました。

少女は一言も返事はしませんでした。たゞ頭で軽くうなづいて見せました。

王は自分で木へのぼつて、少女を抱きおろし、自分の馬へのせて、一しよに城へかへりました。

そこで盛んな結婚式が擧げられて、みんなが喜んで祝ひましたけれども、花嫁は口もきかなければ、笑ひもしませんでした。

王と妃は、しばらく、幸福な日を送つてゐましたが、二年ばかりたつと、王の繼母が意地のわるい人で、なんのかんのと、若い妃の悪口をいひはじめました。

繼母は王に向つてかういひました。

「お前が連れて來たあの女は、いやしい乞食女です。内しよでどんなわるだくみをしてゐるかも知れたも

んぢやない。本當の醜で、口がきけないとしても、笑へない筈はない。笑はない者は、腹がわるいにきまつてゐます。』

こんなことをいはれても、はじめのうちは王は耳にもかけなかつたけれども、年寄になほも根氣よく、ねら／＼と説き立て、妃についてのさま／＼なわるい噂を、絶えず王の耳へ吹きこんだので、王もとうとう説きおとされて、妃に死刑の宣告を下しました。

王宮の廣庭では、妃を火あぶりにするための火が、もうきまつけられました。王はまだ深く妃を愛してゐたので、窓のところへ立つて、涙の目で、ちつと見まもつてゐました。

妃はもう柱へばりつけられました。火は赤い舌をふるつて、もう妃の着物をなめはじめました。

その時丁度七年目の最後の瞬間が過ぎました。

すると空の方で、ザワ／＼といふ羽音が聞えて、十二羽の鴉が飛んで來ました。

見てゐるうちに鴉は低く低くおきて來て、とうとう地へおり立つたかと思ふと、そこに十二人の兄弟が立つてをりました。

兄弟は妃に助けられて、今やう／＼自由の身になつたのです。

十二人の兄弟は、大急ぎで火を蹴散らして、燃え立つた焔を消し、妹を救ひ出して、しばらくは抱いたりキスしたりしてをりました。

この時には、もう妃も口がきけるやうになつたので、王の前へ行つて、これまで醜になつてゐたわけや、どうしても笑はなかつたわけを話しました。

それを聞くと、王は妃に何の罪もなかつたのを知つて、大喜びをしたが、その後は二人と、死ぬまで幸福に暮しました。

(をばり)



赤い家 (兒童劇)

鈴木善太郎

人物
お嬢さん
姉嬢
中の嬢嬢
妹嬢
犬
猫
鶏
場面—赤い家の中

見れば小さな森の家
一夜の宿を頼まうよ

左手に出入口。右手に事務所への通ひ口。右手寄りに壁。壁は赤く塗つてある。
夜。室の真中にランプが吊してある。燈はたてお嬢さんが坐睡をしてゐる。
戸外に姉嬢の唄ふ聲が聞える。始めは遠くから、段々近くなつて来る。

山で草刈る父さんの
辨當持つて山道を
行けば山まで十二丁
只一走りと思つたに
行けどもくゝ森の中
果てない森の迷ひ道
行こか歸ろかほんのりと
山も見えずに日が暮れた
行けず歸れず眞暗の
間にチラ／＼灯が見える

唄ひながら姉嬢が左手の戸口から入る。
姉 今晩は。お嬢さん、今晩は。厭だわ、お嬢さんは坐睡を
してゐるのね。今晩は。今晩は。
右手の戸口から犬が出る。

犬 ワン／＼！ ワン／＼！
姉 犬が来た！ あたし怖いわ。喰ひ付かれやしないか知ら
右手から猫が出る。

猫 ニヤチ！ ニヤチ！
姉 あら、猫が来た！ あたし猫は大嫌ひよ。

鶏 コケコッコ！
姉 あら、今度は鶏が来た！ シツ、畜生！ シツ！

犬 ワン／＼！
猫 ニヤチ！
鶏 コケコッコ！

姉 シッ！ お、厭だ、あたし歸らうか知ら。けれど、もう日が暮れちゃつて、何處へも行けやしないわ。さうだ、ど



うしても泊めて貰はなきや。犬、猫、鶏、お前達は意地の悪い奴ね。あつちへお出で。シッ！ シッ！ お前達がそ

らね、それよりあなたは何用があつてうちへ入らしつたの。

姉 あたしは三人姉妹の中の一番上の姉ですが、草刈りに山に出てゐるお父さんの處へ、誰が一番早くお辨當を持つて行けるかつて、あたしは妹達と賭けをしましたの。あたし負けない積りであんまり夢中に馳けたものですから、路に迷つて了つたんですわ。今夜お嬢さんとこへ泊めて下さいませんか。

嬸 さうですか。それはお氣の毒ですね。待つて下さい。今これ達に聞いて見ますから。
姉 厭だわねえ、そんな畜生に相談するなんて。
嬸 でもわたしは何事でもこれ達に相談してゐますの。
姉 お嬢さんは少しおいほれてゐるのね。相談するならば、どうか早くして下さいな。あたしいつまでもこんな處に立つてゐると、寒くて仕様がないわ。

嬸 すぐ相談しますから、爐のそばへいらつしやい。
姉 爐のそばに駆け寄り、いきなり猫と鶏を押し除けてあた

こにゐると、あたし怖くつて仕方がないわ。

嬸 (目を夢まして) 喧しいね、お前達はどうしたの。
姉 お嬢さん、今晚は。

嬸 お、嬢さん、今晚は。あたしはあんまりお腹が空いてゐたものだから、遂うとくして、お前さんの來た事を少しも知りませんでしたよ。

姉 お嬢さん、後生ですからこの犬や猫や鶏を追つてやつて下さいませんか。

嬸 これ達は何もしやしませんよ。
姉 でもあたし怖いんですもの。

嬸 犬、猫、鶏、お前達はこつちへ來てお出で。嬢さんが怖いとおつしやるから。

犬、猫、鶏 爐ばたに退く。

姉 早く戶外へ追ひ出して下さいな。頼みますわ。
嬸 でも今夜は戶外は寒うございませうからな。

姉 寒くたつて構やしないわ。畜生ですもの。
嬸 いゝえ、あなたが寒ければ、これ達だつて寒いんですか

嬸 一しと啼く。
姉 まアお前さんは随分亂暴ね。

嬸 でもこれ達があるると、あたれやしませんもの。あゝ、これで漸く暖かになつたわ。相談はまだなの。

嬸 犬や、猫や、鶏や、この嬢さんを泊めて上げませうか。
犬と猫と鶏が啼く。

嬸 あゝ、さう。ねえ、嬢さん、これ達はあなたがお辨當を持つてゐるなら、お泊めしてもいゝと云つてゐますがね。

姉 あたしお辨當を持つてゐるわ。
嬸 そんならお泊めしませうよ、

姉 ありがたう。あゝ、あたし随分お腹が空いちやつたわ。
(辨當を聞いて食へ始める。)

嬸 犬と猫と鶏啼く。
姉 お前達は喧しいねえ。おとなしくしないと、あたし打つわ。

嬸 ニヤチノ、！
姉 お黙りつてば。(猫を打つ。)
嬸 コケコツコー (嬢の辨當を取つて逃げる。)

姉 あら、あたしのお辨當を、ひどいわ。ひどいわ。(鶏を追ひ驅けて辨當を取返へす。そのはづみに落す。)あら、お辨當を落しちやつたわ。(泣く)

犬と猫と鶏は一緒になつて啼きながら姉嬢の家の中から退ひ出す。

猫 ハッハッハ、可哀さうにたうとう追ひ出されたか。

犬と猫と鶏右手に去る。お嬢さん一人残り、又坐睡を始める。戸外に中の娘の唄が聞える。歌は前と同じ。始めは遠く園かに、段々近くハツキリする。唄ひながら中の娘は左手の月口から這入る。

嬢 今晩は。お嬢さん 今晩は。厭たわ、お嬢さんは坐睡をしてゐるのね。今晩は。今晩は。

犬 (右手から出て来て) ワン／＼！ ワン／＼！

嬢 犬が来た！ 吠えないでお呉れ、あたし泥棒ぢやないのよ。

猫 (右手から出て来て) ニヤチ、ニヤチ！

嬢 あら猫が来た！ お前そんな怖い目をして、あたしを見ないでお呉れ。

お父さんの處へ、誰が一番早くお辨當を持って行けるかつて、姉さんや妹と賭けをしましたの。あたし負けない氣で、あんまり夢中に馳けたものですから、路に迷つて了つたんですわ。

嬢 さうですか。それはお氣の毒ですね。待つて下さい。今これ逢に聞いて見ますから。

嬢 お嬢さん、あたしは寒くつて、あなたが相談する間違ひなく立つてはゐられませんか。その爐ばたにあたらせて下さいませんか。

嬢 え、え、え、ようござんすとも。こちらへいらつしやい。

嬢 (爐ばたに進み、犬、猫、鶏と一緒にあたる。) あ、これで漸く暖かになつたわ。

嬢 犬や、猫や、鶏や、この娘さんを泊めて上げませうか。

嬢 あ、さう。ねえ、娘さん、これ逢はあなたがお辨當を持つてゐるなら、お泊のしてもいいと云つてゐますがね。

嬢 あたしお辨當を持つてゐるわ。

鳥 (右手から出て来て) コケッコッコー！

嬢 あたし悪い子ぢやないのよ。お前知つてゐるだらうね。犬と猫と鶏又啼く。

嬢 お前達がいくら威かしたつて、あたしちつとも怖かないのよ。もう日が暮れちやつて、何處へも行けやしないからあたしどうしても泊めて貰はなきゃ、犬、猫、鶏、あたしをそんなに威かさなで、その寝坊なお嬢さんを起してお呉れ。

犬と猫と鶏啼く。

嬢 (目を覺まして) 喧しいね、お前達はどうしたの。

嬢 お嬢さん、今晩は。

嬢 お、娘さん、今晩は。わたしはあんまりお腹が空いてゐるものだから、遂／＼として、お前さんの來た事を少しも知りませんでしたよ。

嬢 お嬢さん、どうか今夜おうちに泊めて下さいませんか。

犬、猫、鶏爐ばたに退く。

嬢 お前さんは何處から來たのです。

嬢 あたしは三人姉妹の中の姉ですが、草刈りに山に出てる

嬢 そんならお泊めしませうよ。

嬢 ありがたう。あ、あたし随分お腹が空いちやつたわけれど、一人で食べるのは極りが悪いから、お嬢さん、あなたも一緒に食べませんか。(辨當を開いてお嬢さんに分けてやり、自分は先きに食べ始める。)

犬と猫と鶏啼く。

嬢 お前達は喧しいねえ。あたし食べて、もしか残つたらやるから、おとなしくしてお出で。

猫 ニヤチ／＼！

嬢 お黙りつてば。(猫を打つ)

鳥 コケッコッコー！ (嬢の辨當を取つて進げる。)

嬢 あら、あたしのお辨當を、ひどいわ、ひどいわ。(鶏を追ひ驅けて辨當を取り返へす。そのはづみに落す。) あら、お辨當を落しちやつたわ。(泣く。)

犬と猫と鶏は一緒になつて啼きながら中の娘の家の中から退ひ出す。

嬢 ハッハッハ、可哀さうにたうとう追ひ出されたか。

犬と猫と鶏右手に去る。お嬢さん一人残り、又坐睡を始める



戸外に妹、娘の唄が聞える。歌は前と同じ。始めは遠く咽かに、段々近くハツキりする。唄ひながら妹、娘は左手の戸口から這入る。

妹 今晚は、お嬢さん、今晚は、お嬢さんは生睡をしてる

て、聞えないのか知ら、今晚は、今晚は。

犬 (右手から出る) ワン／＼！ ワン／＼！

妹 お、可愛い犬が来た！

猫 (右手から出る) ニャ／＼！

妹 あら、あたしの大好きな猫が来たわ！

鶏 (右手から出る) コケコッコー！

妹 お出で！ お前も何て可愛いんだらう。

犬と猫と鶏はお嬢さんの耳元で啼く。

妹 (目を覺まして) 喧しいね、お前達はどしした。

妹 今晚は、お嬢さんが折角い、心持で睡つてゐるのに、起

して濟みませんでしたね。

妹 お、嬢さん、今晚は、わたしはあんまりお腹が空いて

るものだから、逢うとくして、お前さんの来た事を少しも知りませんでしたよ。

妹 お嬢さん、どうか今夜おうちに泊めて下さいませんか。

犬、猫、鶏、爐ばたに退く。

妹 お前さんは何處から来たのです。

妹 あたしは三人姉妹の中の末の娘ですが、草刈りに山に出てるお父さんの處へ、誰が一番早くお辨當を持つて行くかつて、姉さん達と遊けをしましたの。あたし負けない氣であんまり夢中に馳けたものですから、路に迷つて了つたんですよ。

妹 さうですか。それはお氣の毒ですね。今これ達に聞いて

見ますから、こちらへ来て火におあたんなさい。

妹 ありがたう。(爐ばたに来て、犬、猫、鶏等のうしろに坐る。)

妹 もつと前にお出なさいな。

妹 これで澤山ですわ。でもあたしが前に出ると、

よくあれないで寒いでせう。

犬、猫、鶏等の側を離れて啼く。

妹 嬢さん、これ達はあなたによくおあたんなさいと云つて

心ます。

妹 まア何て親切なんでせう。ありがたうよ、犬さん、猫さ

ん、鶏さん、

妹 犬や、猫や、鶏や、この嬢さんを泊めて上げませうか。

犬、猫、鶏啼く。

妹 あ、さう。ねえ、嬢さん、これ達はあなたがお辨當を

持つてゐるなら、お泊めしてもいと云つてゐますがね。

妹 あたしお辨當を持つてゐるわ。

妹 そんならお泊めしませうよ。

妹 ありがたう。あたしがお腹が空いてゐるやうに、お嬢さ

んもお腹が空いてゐるでせうね。

妹 え、うちには今朝から何も食べる物がなかつたもので

すから。

妹 ではこのお辨當をみんなで分けませう。さアお嬢さん、

召上れ。(辨當を分けてやる。)

妹 どうもありがたうございます。

妹 犬や、猫や、鶏や、あたしがお腹が空いてゐるやうに、

お前達もお腹が空いてゐるだらうね。さアお上りの辨當を

分けてやる。)

犬と猫と鶏食べる。お嬢さんも食べる。

妹 あたしも一緒に食べますわ。(自分も食べる。)

犬 ワン／＼！
妹 お、さう。娘さん、夜が明けたら、おうちまで犬が送
つて行つて上げると云つてゐます。

猫 ニヤ／＼！

妹 お、さう。今夜は心配しないで、ゆつくりお寝みなさ
いと猫が云つてゐます。

鶏 コケコッコー！

妹 お、さう。これからみんなで踊をお眼にかけたいと、
鶏が云つてゐます。

妹 ありがたう。みんなは何て親切なんぞせう。

妹 あなたが親切だから、これ達も親切なのです。それでは
わたしが唄ひませう。

山で赤いのはつゝじと椿

里で赤いのは徳に燃える

焚火をかこむ犬の鼻

鶏の烏冠と猫の舌



赤い心で暮らす気で
娘さん自慢の足袋の甲
立つて歩けばチラ／＼と
赤い花咲く赤い家

赤い夕陽が野に落ちて
赤いランプがついた時
赤い帯した親切な
妹娘がやつて来た

林檎のやうな赤い頬に
ニコと笑へば花が咲く
妹娘はやさしくて
赤い家での赤い花

お嬢さんの歌につれて犬、猫、鶏が踊る。踊りの中に

(静かに暮)

細い竹笛

水谷まさる

(一)

佐吉はたった一人の母さんと、森の家に住んで
ました。落葉を集めたり、粗朶を拾つたり、栗を落
したり、炭を焼いたりして、それを町で賣つて、貧
しい生活をしてゐました。けれど、たつた一度に
て、この生活をつまらないと思つたことはありませ
んでした。佐吉は幸福なものでした。

ところが、ある晩、急に母さんが病氣になつて、
苦しみはじめました。買ひ薬を飲んで、苦しみは
なほりませんでした。母さんは顔をしかめて、あら
い息をついて、胸を両手でかきむしるやうにして、

苦しがりました。

佐吉はどうしていいか、おろ／＼してしまひました。何といふこともなしに、抱きあげてみたらいかしらと思つたので、佐吉は母さんの肩に手をかけて、自分の膝のうへに抱きあげました。

「かうして貰ふと、大そう楽だよ」

しばらくすると、母さんはかすれ聲で、さう云ひました。佐吉はいゝ思ひつきだつたと思つて、大そう喜びました。けれど、何しろ小さな佐吉としては母さんを抱きあげてゐるのは大變でした。母さんはお尻を佐吉の膝に乗せて、兩足を懸け出してゐましたので、ともすればすりこげ一、どさりと落ちさうになりました。佐吉はさう落すまいと思つて、夢中で抱きあげましたが、やつぱり落ちさうになるので今度は母さんの手を取つて、自分の頸筋に巻きつけるやうにしました。

どうやら、これでいゝあんばいになりました。

らでした。森のなかを吹いて過ぎる風からでした。

今、佐吉は母さんを慰めるために、うら／＼かな春の日に、かあいゝ嘴を開いて、ちちちと啼いて戯れる、小鳥の唄をわざとゑらびました。母さんは、嬉しさに聞き惚れました。

「もう苦しくはないよ。お前の笛を聞いてゐると、心が軽くなつて行くね。」と、母さんは、佐吉がひとくさり吹いて、乾いた唇を舌で甜めるやうにして濡した時に云ひました。

「それはよござんした。ちや佐吉は母さんがぐつすり寝ておしまひになるまで吹きませう。」

かう云つて佐吉は、また笛を吹いたのでした。青白い曉の光が、森の家の破れた戸の間から射し込んで來ました。夜がたうとう明けたのです。佐吉は夢中になつて笛を吹きつゞけてゐましたが、その青白い光に氣がついて、笛を吹くのをやめました。そして、すつと前から、靜かに寢入つてしまつたら

「佐吉や、おかげで大そう楽だよ。」と母さんは眼をつぶつたまゝ云ひました。「かうしてゐれば、お前はもう兩手を母さんの身體にかけてゐなくていい、から、あの竹笛ね、あれを聞かせてお呉れな。」

佐吉は竹笛を一つ持つてゐました。これは佐吉が何本も竹を無駄にして、やつと作つたものでした。細くて手の脂でよれてゐて、見かけは粗末なものでしたが、佐吉がこれを吹くと、すばらしい音が出ました。佐吉はいつもこれを放さずに持つて、母さんといつしよに働いて、一休みする時にはきつと吹きました。母さんも喜んで、その音に、耳を傾けました。

「ようござんすとも、吹きませうよ。」

佐吉はそばにあつた笛を取りあげて、りゆうりゆうと吹きました。佐吉は誰からも、笛を習ひはしませんでした。強ひて習つたと云へば、それは森の小鳥からでした。風が渡ると響きをたてゐる川邊の草か

しい母さんを、そつと下へ寝かして、何かお粥でも作つてあげようと思ひました。

ところがふと、氣がついてみますと、頸筋が妙にひいやりするのでした。おやと思つて母さんを調べてみますと、すつかり息が絶えて、身體も冷たくなつてゐました。

佐吉はびつくりして泣き出しました。急いで母さんを下において、水を取つて来て飲ませましたが、水はたら／＼と母さんの唇からこぼれてしまひました。

「母さん！ 母さん！」と、泣きながら呼びました。けれど返事はありませんでした。

だが、佐吉が戸を開けて、明るい、曉の光で母さんの顔を見ると、今までの暗いランプの灯影では見えなかつたものが見えました。

それは、美しい微笑でした。頬から唇元にかけて花のやうな微笑が、ほんのりと匂つてゐました。

かたばかりのお葬式を、山のお寺で済ましてから佐吉は後仕末に來た町の大工の家に引き取られるために、森の家を出ました。この大工といふのは、たつた一人の遠い親類なのでした。森の家にあつた名ばかりの、がらくた道具は、町の屑屋に賣られてしまひました。佐吉の手に残つたのは、細い竹笛だけでした。

佐吉は大工なんかには、なりたくなかつたのでしたが、引き取られてみれば、大工のことをするよりはかに、仕方はありませんでした。心が進まないせいか、覚えも悪うございました。大工は、二言目には佐吉のことを、荒つばい言葉で叱りました。我儘がならないといふやうに、「間抜け野郎」とか「馬鹿野郎」とか云つて叱りました。そんなことが毎日つゞくので、佐吉は情なくなりました。けれど、自分が覺えが惡くて仕事もろくに出來ないで、へまな

「馬鹿野郎、まだ笛を吹いてやがる。」

親方はよくさう云つて怒りました。佐吉は夢から覺めた人のやうに、ぼんやりと親方の顔を見あげながら、笛をふところへしまひました。

「笛なんぞ吹いてどうする氣だ。いくらな、仕事休みだつてのんべんと遊んでる奴があるか。道具箱の曲つた釘でも叩いて、まつすぐにするがいいや。」

佐吉はなるほどと思ひました。やつぱり自分が馬鹿なのだ、馬鹿だから笛を吹くと、母さんの顔が見えたり、聲が聞えたりするのだと思ひました。だから、親方にはそんな事を隠して云はずにおきました。

けれど、一日二日たつと、佐吉はどうしても笛が吹きたくて、堪らなくなるのでした。それで、佐吉は夜寝てから、親方に知れないやうにそつと起きて裏へ出て行つて吹きました。これは、長いこと、親方に氣づかれませんでした。

しんとした、真夜中、佐吉の吹く笛の音は、りゆう

ことばかりしてゐることを考へると、叱られるのは無理ではないと思ひました。なるほど親方の云ふやうに、自分は馬鹿で間抜けなんだと思ひました。

だが、佐吉は馬鹿だつたでせうか。それは、神さまだけが承知の筈です。佐吉は仕事休みのわづかな時間にも、いつでも笛を吹いてゐました。笛だけは森の家にゐた頃よりも、もつと上手になつたやうでした。だが佐吉は、自分では上手だとは、一度だつて思つたことはありませんでした。

さうして佐吉が笛を吹いてゐたのには、わけがありました。そのわけといふのは、笛を吹くといつても、微笑むで死んで行つた母さんの顔が、はつきり眼に見えたからです。それから、笛の音に交つて、母さんのやさしい聲が聞えて來たからです。佐吉にはそれが何よりの楽しみでした。たつた一人で、靜かに笛を吹いてゐると、心がほの／＼として來ました。自分が大工の弟子であることも忘れしました。

りゆうと響き渡りました。遠く遠く響いて、空までも傳つて行くやうでした。佐吉の指は、しなやかな踊り子のやうに、竹笛の七つの穴のうへで、軽く踊つてゐました。月があつてもなくても、星が出てゐてもなくても、譜といふものを必要としない佐吉には、てんでかゝはりのないことでした。佐吉はただ頭のなかへ、泉のやうに湧いて來る調べのまゝに指を動かさへすればいいのでした。

(11)

だん／＼日がたつにつれ、町では真夜中に聞える笛の音のことが、人々の噂にのほりました。人々は、みんな怪しみました。

「どうも、あの笛を聞いてゐると、何とも云はれないほど氣持がよくなるよ。磁石に吸ひつけられるやうに、あの笛の方へ行きたくなるね。それを考へると、あれはきつと狐か狸の仕業だね。」

「たしかにさうだ。めつたに戸を開けたりしないが



いゝよ。ふら／＼と誘はれると、いやはや飛んだことなるからな。」
人々はそんなふう云つてゐました。ですから、佐吉が吹いてゐるのだといふとは、いゝあんなに知られないで済みました。おかげで、佐吉は毎晩なつかしい母さんの顔を見ることが、聲を聞くことも出来ました。

そのうちに、あんまり噂が高くなつて來ましたので、たうとう佐吉の耳にも入る時が來ました。その時、佐吉はほんとにびつくりしてしまひました。町の人々を騒がした事をひどく濟まないと思ひました。「やつぱり、俺は馬鹿なのだ。もう今夜から笛を吹くのは止めよう。もしかしたら、俺こそ狐が狸にかされてゐるのかも知れぬ。笛を吹くと、母さんの顔が見えたり、聲が聞えたりするなんて、あたりまへの人にはあるまい。さうだ、たしかに俺は馬鹿にちがひない。」佐吉はさう思つたのでした。

だが、その晩、やつぱり笛が吹きたくなつて、寢床を匂ひ出してしまひました。そして、裏へ行つて、笛を吹いたのでした。

心ゆくばかり笛を吹いてから、寢床へ入つた時、佐吉は自分の弱い心に、恥かしくなりました。書間あれほど決心したのに、それを破つてしまつた自分を考へると、やつぱり馬鹿なのだ、つく／＼思はずにはゐられませんでした。

だが、佐吉は馬鹿でせうか？ それは、誰にも云ひ切れません。親方だけは、はじめつから、馬鹿だとは云ひ切つてゐましたけれど。

ちやうどその晩、佐吉がまだ笛を吹いてゐる時に、すつかり寢靜つたこの町へ、一人の男があたりを氣を配りながら、やつて來ました。そしてある大きな呉服屋の裏へ廻つて、兩戸をこじ開けようとしてしまひました。その時、この男の耳をうつつたのが、佐吉の笛の音でした。男はぎよつとして、兩戸から手を放

して、その笛の音をちつと聞きました。聞かすにはゐられないやうな氣がしたためでした。
聞いてゐるうちに、男の眼には涙が溜りはじめました。そして、空に光つてゐた星が、涙ににじんで、ぼんやりと眼にうつりました。

その時、ついぞ思ひ出したこともない母親のことが、ふつと胸に浮んで來ました。ついで、かうした淺ましい姿で、盗みに入らうとしてゐる自分を考へて、妙に悲しくなつて來るのです。

「母親は今もたつしやでゐるかしら。まつたくこれちや、母親に濟まねえな。」

この男はさう心に思つたのでした。そして、手に持つてゐた鐵の道具と、ふところのなかの短刀とを、足元の溝のなかに投げ込んで、うなだれながら歩いて行きました。涙に濡れてゐる顔を、男は拭かうともしませんでした。涙がぼた／＼と頸のさきから落ちました。(次號につゞく)



漁夫と悪魔

秋庭俊彦

前回の梗概。黒鳥の若い王妃は、悪いお妃から毎日眼り薬をのまされておましたが、それと氣づいたので、わざと薬を呑まされた風をして、お妃の出で行つた後をつけて行きますと、不思議な男と話をしてゐますので、王様はいきなりその男を斬殺しました。

三 涙の宮殿

私はその男をうまく切殺したと思ひましたので、王妃に知れないやうに、すばやく逃げ出しました。王妃はわたしの血筋のもので、王様を殺さうとはしなかつたのです。

「わたしの切りつけた傷口は、とても命のたすからないほど深かつたのですが、王妃は、魔法の力でその男の命をとりとめました。でも、死んでゐるのか生きてゐるのかわからないやうなありさまになつてしまひました。花園をぬけて宮殿へ歸つて來るときわたしは王妃が悲さうに泣いてゐる聲をききました。」「わたしは部屋へ歸つてから、悪者を罰してやつたことを嬉しく思ひながら、ぐつすり眠りました。次の朝、目をさまして見ると、王妃も部屋にをりました。王妃は眠つてゐたのか、目をさましてゐたのか

わたしは知りません。わたしは起きあがつて、そつと部屋を出ました。それから國事のお勤めをして、部屋へ歸つてゆきますと、王妃は朝着のまゝ、まだ髪も梳かずに、わたしの前に來て、
「わたしがこんなとり亂した風をしてゐますのを、びつくりなさらないで下さい。わたしは、いま、悲しい三つの知らせを、きいたばかりなんです。」と云ひました。

「それは、どんな知らせなのだ。」とわたしはききました。
「わたしのお母様の王妃がお亡くなりになつたことと、お父様の王様が戦死をなさつたことと、わたしの兄弟のひとり、崖から落ちて死んだと云ふ、この三つの知らせが來たのです。」
「王妃は、自分のほんたうの悲しみのわけをかくすために、こんな口實をつかつたのです。わたしは、をかしくてなりませんでした。」

「それでは、お前がそんなに悲しがつてゐるのも無理はない。お前がそれほど歎くのは、お前の心のやさしい證據なのだ。だが、ながい間には、お前の悲しみも薄らぐだらう。」とわたしは云ひました。

「王妃は自分の部屋へゆきました。それから一年間と云ふもの、王妃は毎日々々、泣き暮らしてをりました。一年の末に、王妃は、お城の園内に、自分の隠れ家をこしらへて、そこに一人で暮らしたいとわたしにたのみました。わたしは承知しました。王妃はこゝから見えますあの圓屋根をもつた、立派な宮殿を建てました。王妃は、それに「涙の宮殿」と云ふ名前をつけました。それが出來あがると、王妃はその晩すぐに、家來のものに云ひつけて、深い傷を負はされたあの曲者を、宮殿の一つの部屋へはこんで行かせました。その男は、王妃の飲ませる薬のおかげで生きてゐたのです。「涙の宮殿」へ行つてからは毎日、自分でその男に薬をはこんでやつてをりま

した

「王妃はいろ／＼な魔法を知つてをりましたが、それでも、この男の傷を癒すことが出来、かつたのです。その男はからだを動かすことも、歩くことも出来なればかりでなく、一言も口をきくことが出来ませんでした。たゞ目付や顔付で、やつと生きてゐることがわかるのでした。一日に二度、王妃はその男のそばへ長いことつき添つてをりました。わたしは家來のものから、何もかもすつかり様子をきいてをりましたが、すこしも知らないやうな風をしてをりました。

「或る日、わたしは、王妃がどんな振るまひをしてゐるか見たいものだと思ひまして『涙の宮殿』へゆきました。そして王妃に見つからない場所へかくれて、王妃が曲者と話してゐるのをききました。

「わたしは、お前のこんなになつてゐるのが、悲しくつてならない。それにわたしは、かうして、始終、て腹をたてたのを見ると、わたしはそれぎり黙つてそこを出てしまひました。王妃は、それからまた二年間、泣き暮らしてをりました。

「わたしは、その後また、王妃の行つてゐる時に、『涙の宮殿』へ様子をうかがひにゆきました。わたしは、やつぱり姿を隠して、そつと立聞きしました。『お前が口をきかなくなつてから、もう三年になるわ。お前はそれを何とも思はないの。それとも、わたしを馬鹿にしてゐるの。まさか、そんなことはないだらう。あゝ、神様、奇蹟のおかげで、この男が口をきいてくれますように。』と王妃は魔法の神にお祈りしました。

「わたしはこの言葉に、ますます／＼びつくりしました。と云ふのは、王妃からこんなにも大切にされてゐるその男が、わたしの思つてゐたとはまるでちがつた人間だったことを知つたからです。その男は魔法の國の奴隷の黒ン坊だったのです。わたしはあつげに

お前に話をしてゐるのに、お前は一言も答へてくれないのだから。いつまでお前は黙つてゐるの。たつた一言でもいゝから、ものを云つておくれ。』と王妃は云つてゐました。

「ため息をついたり、すゝり泣きたりしながら、王妃がこんなことを云つてゐるのを聞きますと、わたしはもう我慢が出来なくなつて、つか／＼と王妃の前へ出てゆきました。

「お前は何をそんなに泣いてゐるのだ。もういゝ加減に止めてほしい。こんなことはわたし達の不名譽だ。自分の身分をわすれるのもほどがあるではないか。』とわたしは云ひました。

「あなたに深切と云ふものがあるなら、どうぞ、わたしを放つておいてください。わたしを勝手に泣かしておいて下さい。わたしは、あなたのお小言をきいてはゐられません。』と王妃は云ひました。

「わたしの言葉に改心しようとししないで、かへつとられながら、いきなりそこへ飛び出して行つて、

「えゝ、この二人の悪魔奴、貴様たちは、さう云ふ魔法の神に吞まれてしまふがいゝ。』とわたしは云ひました。

わたしの言葉が終るか終らないうちに、黒ン坊のそばに坐つてゐた王妃は、火のやうに怒りだしました。

「情知らず！ わたしの悲みはあなたがもとなのです。あなたの亂暴な手が、この男にこんな惨めな傷を負はせたからです。それなのに、こゝへ来て、わたしを恥かしめるなんて、あなたは何て情知らずなんでせう。』と王妃は云ひました。

「さうだ、この男に罰をあたへてやつたのはわたしだ。わたしは、お前にもおんなじ罰をあたへてやらなければならぬ。今までお前を許しておいたのが残念だ。お前は、長い間、よくもわたしの親切を馬鹿にしてゐたな。』



「わたしはかう云ひながら、劍をひきぬいて、王妃に切りつけるために、片手をふりあげました。ところが、王妃は顔色もかへずに、さも嘲るやうな笑ひをうかべながら、

「まあ、さう怒るのはおよしなさい」と云つたかと思ふと、何やらわたしにわからない呪文を唱へて、「わたしの魔法の力で、あなたのからだを、半分大理石になるやうに。」と云ひました。

すると、忽ち、わたしは、この通り生きながら死に、死にながら生きてゐるやうな姿にされてしまひました。

「王妃と云ふ名前に似合はない、こんな魔法をつかつて、わたしの姿を變らせ、この部屋へ閉ぢこめてから、今度は別の魔法で、王妃は、人民の一倍に住んでゐた立派な都を滅ぼしてしまひました。家や、公園や、市場をこはしてしまつて、あなたがご覽になつたあの野原と池にしてしまつたのです。池にゐ

る四色の魚は、宗旨のちがつた四つの人種なのです。白はマホメツト教徒、赤は火を拜むベルシヤ教徒、青はキリスト教徒、黄色はユダヤ教の人たちなのです。池のまはりにある四つの小さい丘はこの國の名前にした四つの島なのです。この話は、王妃が腹だらまぎれに、わたしに苦みを増させるために、自分の口からわたしに聞かせたのです。ところが、まだこれだけでは、王妃の怒りはおさまらないのです。王妃はそれから毎日こゝへ来て、わたしを苦しめるために、わたしの肩をむき出しにして、牛の鞭で百だけびし／＼打ち、それがすむと、わたしを馬鹿にするために、わたしの錦の王衣のうへに、汚らしい山羊の毛の織物をかぶせてゆくのです。」

こんな話をしてしまふと、「黒島」の王様は、涙をほろ／＼こぼしました。

話をきいた王様は、何と云つていゝかわからないほど、この話を痛々しく思ひました。(つゞく)



工 筆 年 少

勉 川 西

ギユリオは尋常四年級でした。髪の毛の黒い、顔色の白い、上品な、十二歳の少年で、鐵道會社の雇人の總領息子でした。お父様は家族が大勢あるのに、給料が少ないものですから、切り詰めた暮しを立てて居りました。お父様はギユリオを可愛がつて、かなり優しくもして呉れたし、あまやかしても呉れました。——そして、學校のことの外は、何事でも氣儘にさせて呉れました。學校のことと云つたら、そりや喧しくつて、嚴格でした。といふのは、自分の息子が、早く地位を得て、家族の暮し向きを助けることの出来るやうな身分になつて貰はなくてはならなかつたからです。それで、いろ／＼なことを早く仕遂げるために、ギユリオは極く短い時間にどつさ

(上)

り勉強させられるのでした。彼は勉強しました。けれど、お父様はもつと／＼勉強しろと勸めるのでした。

お父様はかなり年を老つてゐました。それにこれまで餘り苦勞し過ぎたので、年よりもぐつとふけてゐました。それなのに、家族を困らせてはならないものだから、毎日の務めの外に、あつちこつちから書き物などを受合つて来て、夜晩くまで机に向つて居りました。近頃は、雑誌や書物などをばつぽつ出版する家から、包み紙の上に購讀者の宛名を書くことを引受けて来て、その包み紙に大きな四角い字で五百枚書く毎に、三リイラ（約一圓二十錢）づつ儲けて居りました。けれども、この仕事はかなり辛かつたと見えて、幾度も、食事の時に、家族を顧みてこぼしてゐました。

「俺の眼はだんだん薄くなるやうだ。」と、お父様は云ひました。「この夜仕事に命を取られるわい。」

或る日、息子は、急にかう云ひました。

「お父さん！ 僕、代りに書きませうか。乾度、お父様の字を真似て、割合うまく書きますよ。」

けれど、お父様はかう教へました。「いや、ギユリオ、お前は勉強しなくてはならない。お前の學校のことが俺の包み紙よりは大切だ。たつた一時間でもお前の時間を割いては俺の氣が濟ない。さう云つて呉れるだけでも難有いが、まあ手傳つては貰ふまい。二度とそんなことを云つて呉れるな。」

かういふことをお父様に對して云ひ張つて見ても仕方がないことは判つてゐましたので、彼は強つてとも申しませんでした。然し、彼はそれを實際に行つたのです。丁度、真夜中になると、お父様が書くことを止めて、仕事部屋を去つて、寢床へ行くことを彼はよく知つてゐました。幾度もその聲音を聞いたことがあります。時計が十二時を打つや否や、椅

子を背後へずらかす音がして、静かに歩いて行く父の窺音が聞えるのでした。或る晩、ギユリオは、お父様が寢床へ行くのを待つてゐて、それから、極く物静かに着物を着て、暗がりを探りして窺りと小さな仕事部屋へ這入つて行つて、お父様が消して行つた石油ランプにも一度火を點し、書物机の前に腰掛けました。机の上には、積み重ねた白い包み紙と、宛名の名簿がありましたが、彼はお父様の書體にちつとも違はないやうに真似をしながら、書き始めました。そして、嬉しい



やうな、それでゐて、幾らか怖いやうな氣もし乍ら、彼は熱心に書きました。それで、書いた包紙はだんだんたまつて行きました。時々、ペンを置いて手を摩つては、それからまた、前よりも一そうせつせと書き出しました。その間にも、耳を澄したり、につこり笑つて見たりしました。百六十枚——一リイラ（約四十錢）分だけ書いて、それで止めて、ペンを元の處へ置くと、點火を消して、そして足を爪立てて歩いて、寢床へ歸つて來ました。

明くる日のお晝に、お父様

は機嫌よく食卓に向つて坐りました。お父様は何にも氣が付かなかつたのでした。お父様は機械的に仕事をして、それを時間ではかつて、何か外のことを考へてゐて、さうして翌日、自分の書いた包み紙を數へて見るだけでした。彼は上機嫌で食卓に就いて、ギユリオの肩を叩き乍ら、かう云ひました。

「おい、ギユリオ！ お父様はお前が思つてゐるよりはすつと傑い働き者だぞ。昨夜は二時間で、いつもの三分の一だけ餘計仕事をしたぞ。俺の手はまだまだ達者なものだ。眼だつてまだなか／＼役に立つわじ。」

ギユリオは黙つてゐましたけれど、嬉しくつてひとり心の中であう云ひました。

「お氣の毒なお父様、僕はお父様に、も一度若返つた積りで喜んで頂けるのだ。よし、しつかりやらう！」

かうした好い結果に勵まされて、夜が來て十二時

を打つと、ギユリオはまたむつくり起きて、そして仕事に懸りました。彼は幾晩かこれを續けました。お父様は何にも氣が付きませんでした。たつた一度、晩御飯の時に、かう云はれました。「どうも不思議だ。家ちや近頃、馬鹿に澤山石油を使ふじ。」

ギユリオはぎくりとしました。けれど、話はそれつきり止んで、夜仕事が始まりました。

然し乍ら、かうして毎晩中途半端に眠りを妨げるために、ギユリオは十分休息を得ることが出來ませんでした。朝、起きる時も疲れてゐるし、夕方學校の復習をしてゐる時など、眼を開けてゐるのも辛い位でした。或る晩、生れて初めて、彼は自分の習字帳の上に眠りこけてしまひました。

「しつかりしろ！ しつかりしろ！」と、お父様は、手を拍き乍ら、叫び立てました。

「勉強せい！」



ギュリオは身震ひしてまた勉強に懸りました。けれど、翌晩も、その次の晩も、同じ事が起つて、だんだん悪くなつて行きました。書物の上にもどろんだり、いつもより朝寝をしたり、學課の下調べも退屈さうであつたり、勉強があき／＼したやうに見えました。

「ギュリオ。」と、或る朝、お父様が云ひました。「俺は氣が氣でないぞ。お前の様子が變つてゐる。どうも面白くない。氣を付けなさい。この家族の希望は萬事お前の上に懸つてゐるんだ。俺はお前のこの頃の様子が氣に入らない。判つたか？」

このお叱り、本當に、これまで受けたこともないやうな殿しいお叱りを受けて、ギュリオは困つてしまひました。

「さうだ。」と、彼は心の中で云ひました。

一本當だ。かういふ風でいつまでも續ける譯には行かない。こんなごまかしは止めなくてはならない。」



然し、その同じ日の夕方、食事の時に、お父様は大そう愉快さうにかう云ひました。

「どうだい、今月は前の月より、包み紙の書き賃を三十二リイラ餘計に儲けたぞ！」

さう云ひ乍ら、この特別な儲けを子供たちと一緒に祝ふ積りで買つて來たお菓子の包みを食卓の下から出しました。すると、みんな手を拍いて喜びました。その時、ギュリオは氣を取り直して、元氣を回復して、心の中にかう云ひました。

「いや、お氣の毒なお父様。僕はあなたをごまかすことを止めますまい。晝の内も一生懸命に勉強します。けれど、夜になつたら、あなたや、外の家族の者のために、やはり仕事を續けませう。」

お父様は言葉を次いで云ひました。
「三十二リイラ餘計なんだ！ 愉快だ。が、この子供がね。」と、ギュリオを指示し乍ら「どうも面白くない。」

ギュリオは、黙つてお叱りを受けてゐたが、危く流れ出さうとする二つの涙を無理に押へてゐたのだつた。とはいへ、その時、心の中では大變嬉しかつたのです。

それから、ギュリオは一生懸命に働くことを止めませんでした。けれど、疲れた上に疲れが加つて、どうもかうも我慢が出来なくなりました。かうし、二ヶ月経ちました。お父様はギュリオを叱り續けて、絶えず見詰める眼付にさへ、だんだん憤り

が増して来ました。或る日、お父さんは先生に訊ねに行きました。

「はい、進むには進みます、利巧なお子供ですから。然し、この頃では、初めに持つてゐたやうな好いお心懸けがなくなつたやうです。うたたねもするし、欠伸もするし、氣も散るやうです。作文なども急いで、亂暴な字で書きなぐつた短いものを出します。もつともつと出来る筈ですがね、もつともつと。」と、先生がいひました。

その晩、お父様は、ギユリオを傍へ呼んで、これまで聞いたこともないやうな、すつと厳格な言葉で、かう云ひました。

「ギユリオ、お前には、俺がどれ程苦勞してゐるか、どれ程生命をすり減らしてゐるか判るだらう。みんな家族のためだ。お前は俺の骨折の手助けもしないし、俺のことなど何とも思つてゐないのか。いや、お前の兄弟や、お母様のこと何とも思つてゐ

ないのだらう。」

「いゝえ、お父様、そんなことはございません。」息子は涙に暮れて叫んだ。そして、口を開いて、總てのことを白状しようと思つた。けれど、お父様はそれを遮つて云ひました。

「お前は家の暮し向きのことも知つてゐよう。みんな本氣になつて盡し合はなくてはならないのだよ。俺自身だつて、知つての通り、二倍の仕事をしてゐるのだ。俺は今月はな、鐵道會社から百リイラの賞與が出るだらうと思つて當てにしてゐたのだ。すると、今朝になつて、出ないことが判つたのだ。」

この知らせを聞いて、ギユリオは、白状しようとして口許まで出懸けてゐた言葉を押へて、きつと決心して、心の中で繰返して云ひました。

「いゝえ、お父様、僕は何にも申し上げますまい。僕はあなたの爲めに働くことが出来なくならないやうに自分の秘密を守りませう。偶々あなたにお嘆き

を懸けたことは、別の方法で償ふ積りでゐます。僕は學校でも十分勉強して、もつともつと出来るやうになります。何より大事なことは、あなたのお手傳をして、家の暮し向きのお錢を儲けて、そして、あなたの生命をすり減してゐるお疲れを少しでも軽くして上げることです。」

其處でギユリオはまた仕事を續けました。そしてまた二ヶ月経ちました。夜は働き、晝は眠つて、息子の方では一生懸命にやつてゐたのでしたが、お父様の方ではきびしく叱つてばかり居りました。ところが、一番悪いことは、お父様がだん／＼息子に冷淡になつてしまつて、恰も、不孝な腰扶息子で、とても見込がないとも思つてゐるかのやうに、滅多に口も利かないし、ちらりと眼がぶつかるのをさへ避けるやうになつたことでした。ギユリオはそれに氣付いて心を痛めました。そして、お父様が脊中を向けた時など、悲しげな、孝行深い心持の表れた

顔を伸して、窃つと接吻を投げるのでした。悲しさで疲れの爲めに、瘦せて、色蒼白めて、もう餘義なく、勉強の方も怠けずにはゐられなくなりました。

「今夜はもう起きるまい。」

けれど、時計が十二時を打つても、一度固く自分の決心を固め直さなくてはならない時が來ると、氣が氣でなくなつて、寢床に止まつてゐては、義務を怠けて、お父様や家族の者から一リイラのお錢を盗んでゐるやうに思はれて仕方がないのでした。其處で、いつかはお父様が眼を醒まして見付かるか、または包み紙を二度計へて見るこゝによつて、自分のごまかしがばれてしまふであらうと考へ乍ら、起き上るのでした。さういふ風になつてばれてしまつたら、總て自然に止まるだらう、幾ら止さうと思つても、さうする勇氣のないことを、何も自分からしないでもよからうと思つて、彼は、また、仕事を續けました。(つゞく)



幽霊船

森川 一朗

上

大きな砂漠を横切つてゆく商人の群がありました。商人達は長い砂漠の旅に疲れたり飽きたりした時に、何處かに休み場所を見つけては其處で各々が種々なお話しをして退屈をしのぐことにしました。「アハメットさん、今度はあなたの番ですぜ。あな



たのことだから長い間に出合つた冒険談でも、随分話の種類はありさうなものです。をなければ可愛いお伽噺でもいゝんですよ。」

アハメットと呼ばれた人は、さう云はれて心の中であれを話さうか、これを話さうかと暫らくは迷つてゐましたが、

「皆さん、私はふだん誰にも話すのが厭な話ですが今日は思ひ切つて幽霊船のお話をいたしませう。なアに、これは私の生涯の中の一寸した出来事に過ぎないんですがね。」

さういつて、アハメットといふ男が次のやうな話をいたしました。

私の父はアラビヤのバルゾーラと云ふ所に一寸した店を持つてゐましたが、父は金持でも貧乏人でもないといふ位で、自分の持つてゐる財産は僅かばかりを失くすといけないと云つて、思ひ切つた仕事も

出来ずに平々凡々と暮してゐました。

父は私を正直なやうにと育て、やがて私は父の手助けが出来るやうになりました。私が十八の時、父はこれまで一遍も企てたことのないやうな大きい仕事に手を出しました。然しそれが海の上の仕事でしたから、父は心配の餘り病氣となつて、とうとう死んでしまひました。

それから間もなく、父の荷物を澤山積んだ船が沈没したと云ふ評判が立ちました。私はこの二つの大きな災難に一時はがっかりいたしました。然しまだ私の氣は挫けませんでした。私は父が残して行つた物をすっかりお金にして、一番外國へ行つて、乗るか反るか運試しをやつて見ようと心を決めました。

それで、私はずつと前から働いてゐて呉れる老僕のイブラヒムを、供につれてある港から船に乗りました。いゝ工合の追風が吹きましたので、私の船は

印度へ向けてすん／＼と走つてゆきました。

十五日ばかりは無事の航海でした。十六日目に、船長は暗い顔をしてどうも暴風になりさうだと云ひました。その船の船長はこの邊の海は餘りよく知りませんでしたが、暴風になつてはこまると思つたのでせう、船長は帆といふ帆をみんな下させました。何んとなき氣にかゝる思ひをしながら船はゆるゆると走つてゆきました。

夜になりましたが暴風になる模様も見えませんでしたので、船長までも先刻のは自分の感違ひであつたかと思つた位でした。所がこの時ふと私達の船の前を一艘の船が通り過ぎました。その船の甲板からは、荒々しい叫び聲や人のどよめきなどが聞えたやうです。恰度私は暴風になると聞いてびく／＼してゐた時でしたから、その聲を如何にも不思議に思ひました。それよりもつと私を吃驚させたのは、私のそばに立つてゐた船長が、その時死んだやうに青

となないうちに、ガリ／＼と音を立て、暗礁に乗り上げてしまひました。

すぐ様ボートは下されました。私達がそれに乗り移つて、水夫達がすつかり乗り切り切らないのに、船は眼の前で沈没してしまひました。私達は漕ぎ出しましたが、暴風はいよ／＼ひどくなつて、遂にボートを漕ぐことも出来なくなりました。私と老僕とは互にしつかりと抱き合つて、決して離れまいと約束をしました。

夜が明けましたが、その時私達のボートはひつくり返つてしまひました。私はそれと同時に氣を失つてしまつたのです。

私が正氣にかへつた時は、私はひつくり返つたボートのの上に乗つてゐて、忠義な老僕の腕に抱かれてゐるのでした。その時は、もう私達の外には、船乗の一人も見出すことが出来ませんでした。

やがて暴風は静まりました。私達の乗つて来た船

なくなつてしまつたことです。

「この船は助からない。」と船長は叫びました。

「死んだ人があそこを航海してゐる。」と船長はまた云ひました。

「一體それはどういふ譯なんです。」と私が船長に訊ねようとして、またその聲の出ない内に、水夫達はあちこちから唸り聲や悲しうな叫び聲を上げて驅けて來ました。

「あなた方はあれを見ましたか。」

「私達はもう助かりません。」

水夫等はこんな風に叫びました。

けれども船長は、皆の前でコーラン（回々敷の網）の中から魁めのお網を讀み上げさせて、自分で舵を取りにかゝりました。しかし何の役にもたなかつたのです。空は急に怪しくなり、とてもひどい暴風がやつて來ました。そして船はそれから一時間

の委はどこにも見當りませんでしたけれども、その代りに私達は程遠くない處に一艘の船の委を見ました。浪は工合よくも私達をその船の方へ押し流してゆくやうです。だんだん近づいて來ましたのでよく見ると、私はその船が昨晚私達の船の脇を通り過ぎて船長を大變驚かしたものだと思ふことを知りました。そして私はぎよつとしました。

あの時船長の云つた言葉が間違ひなく事實となつたことや、私達が船に近づいていくら大きな聲を出して呼んで見ても、返事一つしないこの船が何んだか氣味悪くなつて來たのです。

見るとその船の船の方に一本の網が下つてゐましたから、私達はそれを掴まうと思つて、そつちの方で手や足で漕いで行きました。そしてやつとの事を網を握ることが出来たので、私は大聲を上げて呼びましたが、相變らず船の中はひつそりとしてゐて答へる聲もありません。思ひ切つて若い私は、

眞先になつてその綱を傳つて甲板にあがつてゆきま
した。

所が、驚いたの何のつて、私が甲板に足をかける
と同時に、一體どんな有様が私の眼に見えたと思ひ
ます。甲板の上に土耳其らしい服装をした人が二



六四
三十人死んでゐて、その真中の帆柱の所には立派
な着物を着て、サーベルを待った一人の男が立つて
ゐましたが、顔は眞青になつてゐて、身體は鐵の鎖
で帆柱にかたく縛つけられてゐました。勿論此人も
また死んでゐたのです。

私は吃驚してしまつて、足は甲板の床の上に縫ひ
つけられたやうに凍んで、やつとの事呼吸をするこ
とが出来た位でした。その時老僕も上つて來ました
が、この有様を見て矢張り膽をつぶしてしまひまし
た。私達は心配の餘りマホメツト様にお祈りをした
後、思ひ切つてなほ先へ進んで行つて見ました。
私達は一步進めば一步だけでもつと恐ろしい事にぶつ
かるやうな氣がして、びく／＼と周囲を見廻しまし
た。然し見渡した處、生きものは一つもなく、たゞ私
達二人とそして絶えず動いてゐる海とだけでした。
私達は帆柱にはかれたまゝ死んでゐる船長が、
あのどんよりした眼をこつちに向けはしないかと思

てゐることを口に出せない程、恐ろしさに胸が塞がつ
てゐたからです。

『おゝ、旦那様。』と老僕は申しました。

『此處では何か怖ろしい出来事があつたのですな。
然し、若しこの下の船室に人殺しがいつばい隠けれ
てゐるとしても、私はいつ迄もこんな死人を眼
の前にして立つてゐることは出来ませんから、いつ
その事彼等に降参した方がましだと思ひま。どん
なひどい目に遭されたつて仕方がありません。』
私も同じやうに考へてゐた所ですから、私達は度
胸をきめて屹度何か變つたことが起るだらうと思ひ
ながら下に降りてゆきました。所が下も亦死んだや
うに静かで、私達の足音ばかりが音高く響きました。
私は船室の戸の所へ立つて聞き耳を立てましたが、
矢つ張り何の物音もしませんでした。

扉を開けて中へはひつて見ますと、室の中はふし
だらで、着物や、武器や、その外の道具が、重なり



つたり、殺されて床の上に倒れてゐる一人が急に頭
をこつちにねぢ曲げやしないかと思つたりして、大
きな聲を出して話をするこゝも出来ないのです。
私達は船室の方へ通つてゐる梯子段のところまでゆ
きました。がその時、何とはなしに二人とも立ち止
つて顔を見合せました。と云ふのは互に自分の思つ

合つて散らばつてゐました。一つとしてきちんとなつてゐる物はありませんでした。私達はこの部屋を出て、更に大きなや小さい部屋を覗いて歩きましたが、何處も此處もふしだらな事は同じで、そしてどの部屋にも立派な絹物や、真球貝や、砂糖や、其他いろ／＼のものが散らばつてゐるのを見ました。私は船には誰もゐないことを知つて、この船を私の物としてよいと思ひましたので、今度は飛び立つばかりに喜びました。

然し老僕の云ふには、

「この船はまだ陸から餘程離れてゐる様ですから、私達二人切りでは、とても陸まで船をやることは出来さうありません。」

然し、命拾ひをした私達はそんなことは二の次の問題なので、何にしてもこの船を見つけたことを喜ぶには居られなかつたのです。私達は澤山のお酒と食物とを見つけたので、

それで元氣をつけて、また甲板に上つてゆきました。然し、此處へ來ると恐ろしい死人の姿を見て私達は慄え通してした。私達は何よりもまづ、こんな恐ろしい思ひから逃れたいと思つて、船からこれらの骸骨を海へ投げ込まうと相談をきめました。ところがどの死骸もビツタリと床の上にくつついてゐて、いくら力を出しても動きません。その時の氣味の惡さつたらありませんでした。死骸は餘程固く板にこびりついてゐましたから、これを取りのけるにはどうしても板からはがして掛らなければならぬ位でした。それで何か道具を欲しいと思つて、帆柱にはかれてゐる船長の手からサーベルを取らうとしましたが、是も亦如何にも固く握つてゐて離れませんでした。

やがて夜になりましたので私は老僕に寝るやうに云ひつけて、自分だけは助けを求める爲に甲板で見張りをしようと思ひました。しかし、月が出て、私

が星を數へて見て多分十一時頃だらうと思はれる時分になると、とても我慢がし切れない程睡氣がやつてきました。そして知らず／＼甲板に立つてゐた桶の後へ仰向けに倒れてしまひました。それは眠ると云ふよりは何かしら氣が呆となつてしまつたと云つた方がいゝのです。何故かと云ふに私は船の横ッ腹に當る浪音も、帆が風に鳴る音もはつきりと聞いてゐたからであります。

その時、急に私は甲板の上を歩く人の足音とその話し聲とを聞いたやうに思ひました。私は立つてそれを見たいと思ひましたが、どうしたものか立つことが出来ません。そして不思議な力に抑へつけられたやうに眼を開くことが出来なかつたのであります。然し、その人聲はだん／＼はつきりと聞えて來て、まるで元氣な船乗が甲板を歩き廻つてゐるやうです。

時々は一人の何か命令けをしてゐるやうな力強い

聲も聞えたやうです。また私は、綱や帆の上げ下しの音も聞きました。その中に私に眠りにおちたやうでしたが、それでも何やら双物のカナ合ふやうな騒がしい音が聞えたやうに思はれました。

翌る朝になつて、太陽が昇つてその光で私の顔を照りつけるやうになつてから私はやつと眼が覺めました。驚いて見ますと、甲板の上は昨日と少しも變つた所がありませんでした。そして前の晩聞えた種々な人聲や物音はまるで夢の様に思はれたのでした。私はすぐに老僕を探しに船室の方へ行きました。

老僕は船室の中に如何にも思ひに沈んだ様子をしておりました。

「お、旦那様。私はこの恐ろしい船の中でもう一晩過すよりは、海の底に沈んでしまつた方がましで御座います。」

と彼は私を見るなり云ひました。(つづく)

お、寒小寒

若山牧水

お羽織 著ました

お單笥の 匂ひが

お羽織に 附いてゐる

菊の花 咲きました

菊の花の 匂ひが



風に流れて 匂つてる

学校の御門のペンキ塗

さわればペンキが

つきますよ

お、寒小寒

山から子猿がとんで来た





赤萬膏

沖野岩三郎

これは紀州の山奥にある傳説です。

樞林の中に草葺の家が一軒ありました。其所の主人は年中川へ筏を流しに行く甚藏といふ、もう五十近い温順しい人で、村の人達は其の主人の事を「筏乗りの甚さん」と呼んでゐました。

甚さんの家には樞丸といふ男の子があつて、三町ばかり離れた所に住んでゐる、百姓家のお樞といふ女の子を、毎朝一緒に伴れ立つて、村の寺子屋へ讀み書きを習ひに行きました。

或年の夏の事でした。二人はいつものやうに寺子屋へ行きますと、お寺の庭には村の人達が多勢集つ

て、鐘をたゝいたり、太鼓をたゝいたりして、歌を唄ひながら面白さうに踊つてゐました。

「何ちやらう？今頃唄つたり踊つたりするのは？」と云つて、樞丸は不思議さうに群集の方を眺めますと、お樞は賢さうな腫を輝かしながら、

「ありやア、雨乞踊りぢやア。そうれ、音頭取りの唄ふ歌をきいて御らん。」と云つて耳を傾けました。樞丸も耳を澄して聞いてゐると、赤い布で鉢巻をした男が、踊りての真中に立つて、

小町さんえ……こうまちさんえ……
あーめー、お呉えんけ……

てーんに 汗けが無アえんけ……

天にー汗けが無アえんけ……

と歌ひました。すると踊りては、一齊に聲を揃えて、

はアーい、よい、
やさのさ、

はりわの、さッさ、
れわのさッさ、

よーい、よーい、よや
さのさ、

と嘶しました。

「小町さんて、小野の小町の事かい？」と樞丸は訊きました。するとお樞は、

「さうぢやよ。花の色はうつりにけりな、いたづら



にわがみ世にふる、ながめせしまにちふ歌があるぢやらう。小町さんがあの歌を詠んだら、直ぐ天から大雨が降つたんぢやて。」と説明しました。

「さうかい、小野の小町て、そんなに偉い人かい。」

二人は枝垂櫻の下で、そんな話をしながら雨乞踊を見てゐると、いつも黒い衣を着て自分達に物を教へて呉れる和尚様が、今日は真紅な衣を着

縁側の所まで出て来て、お樞、樞丸、今日は雨乞祭りぢやよつて。手習ひはお休みぢやぞ。」と云ひ置いて本堂の方へ入つて行きました。

稽古がお休みだと聞いた二人は、手本と草紙とを

抱えにまゝ群集の踊つてゐる所へ走つて行きますと多勢のお友達は石垣の上から面白さうに雨乞踊りを見てゐました。

暫くすると、音頭取りは歌を唄ひやめて、

『さア、これから瀧山の瀧へ行きませう。』

と言つて、小い幟を打ふりました。すると群集は皆な聲をはりあげて、『小町さんえ……こうまちさんえ……』と口々に歌ひながら、坂を降りて瀧山の方へ練つて行きました。

『おうしい樫丸さん。行て見ようらい、一緒に瀧山へ行てみようらい！』

石垣の上にお友達が、さう云つて樫丸を誘ひましたので、樫丸はお横と一緒に友達の仲間になつて瀧山の方へ行きました。

瀧山といふのはお寺から二十町ばかり下にある村界の大きな山の名で、其の麓を流れてゐる川に、大瀧といふ瀧がありました。瀧の水は一丈ばかりも流

れ落ちて、瀧壺は底の見えない深い潭になつてゐました。そして潭の向ひ側には小い灣のやうな所があつて、其所には白い沫がくるくると廻つてゐました。灣の上には壁のやうな岩があつて、其所には水苔が青く生えてゐて、細い雨のやうな繁吹が其上に降り注いでゐました。

『あの苔の上を這うてゐるのは何ぢやい？』

樫丸は驚いたやうに、隣りに居るお友達に訊きました。それは水から苔の上に二三尺這ひ上つては、ばちやり／＼と水に落ち込む細長いものが何百となく、うよ／＼してゐたからでした。それは實は鯉の小いのでしたが、お友達は、それと知らないから、『あれかい、あれは蛇虱といふもんぢや。』と眞面目に答へました。

『蛇虱？ 蛇虱ツて何ぢやい？』

『蛇虱は蛇の虱ツ。あの下の白い沫のくるく／＼廻つてゐる所は蛇穴ぢやよ。あの中に蛇が居るんぢや。』

乗つて上るので、其時は蛇度雨が降るのぢやさうな。』と教へました。

『さうかなア、それぢや、あの蛇穴から、龍が出て來なげりやア雨は降らないんぢやネ。』

と嘆息するやうに言つた樫丸は、頻りに小い頭を傾げて考へ込んでゐました。

やがて、和尚のお經もすみ、群集の石投げもやんで、又た『小町さんえ……』と唄ひながら村人は里の方へ歸つて行きました。

樫丸は其の翌る日、お寺へ稽古に行く時、大きな傘をもつて行きました。お横も丹波傘を抱えて行きました。けれども雨は一滴も降らないで、二人はお友達から、

『こんなカン／＼日和に雨傘を抱えて來る馬鹿があるかい。』と言つて、さん／＼笑はれました。

樫丸とお横は泣き乍ら雨傘を抱えて、お家へ歸つて來ますと、途中で村の勘九郎爺さんに會ひました。

『蛇が居る？ そりやア本當かい？』

樫丸が不思議さうにお友達の顔を見た時、緋い衣を着た和尚が岩の上に出て來て、兩手を合せて、珠數を擦り乍ら大きな聲で一所懸命にお經を誦みはじめました。すると何百といふ群集は、一齊に、

『ナムマイダンボウ、ナムマイダンボウ、』

と言つて、手々に石を擲んで蛇穴の方へ投げました。

『何故、あがいに石を投げるんぢやい？』

と樫丸は右側に居たお横に小聲で尋ねました。するとお横は、

『あの蛇穴の中に、大きな龍が居て、それがもう何十日も晝寝をして眼を覺さないで、あアして石を投げ込むんです。和尚さんは、お葬式のお經を誦むし、皆なは、あアして、南無阿彌陀佛を唱へると、龍は眼を覺して、俺は死んぢやアぬないぞ！』ちう

て、天へ上るんぢやさうな。けれども天へ上るのは此のまゝでは上れないから、雲を呼び降してそれに

勘九郎爺さんは、村一番の正直者で親切な人でしたから、泣いてゐる二人の頭を撫でながら、どういふワケで泣いてゐるのかと優しく尋ねました。

お横はお友達から、虐められたワケを詳しく話しますと、勘九郎爺さんは、大變感心して、

「さうぢや、雨乞をした以上、雨が降ると思ふのは當り前ぢや。雨が降らないと思ひながら、雨乞をする奴は、不正直な奴に相違ない。此村では、お前さん達二人が一番の正直ものぢや」とほめました。

勘九郎爺さんに褒められた二人は、もう泣かないでお家へ歸りましたが、其の翌る日から、二人はお稽古に行く途中、どうかして、あの瀧壺の中にある龍を呼び出して、大雨を降らして貰ふ工夫は無からうかと、必死になつて考へました。そして、あアすれば龍が出て来るだらうか、かうすれば龍が蛇穴から出るだらうかと研究してゐましたが、村の人達が雨乞踊りをした十日目に、村の辻々へ、

やうな大雨が沛然として降つて來ました。

さア村中は大騒ぎで、皆な生き返つたやうに喜びましたが、二三日経つて、お役人が、村の辻々へ貼紙をした人を取調べてみますと、それは櫻丸とお横のした事だといふことがわかりました。そこでお役人は二人を役所へ呼び出して、

「あなた方のおかげで、大雨が降つて村中の人は大喜びです。一體あなた方はどうして此の大雨を降らせて下さいましたか」と尋ねました。するとお横は、

「それは櫻丸さんが、大瀧の蛇穴から、龍を喚び出したからです。」と答へました。

お役人はびつくりして、蛇穴の中から龍を喚び出した方法をきくと、櫻丸はこゝろ笑ひ乍ら、

赤萬膏

すべての毒を吸ひ出す
すひ出しの奇々妙々薬

こんばんのうちに、きつと雨がふります。わたしたちはこれから大瀧へいって、蛇穴の龍を呼び出します。みなさん喜んでまつてみて下さい



といふ貼紙をしたものがありました。村の人達はそれを讀みましたが、子供のいたづらだと思つて、皆な氣にもとめませんでした。ところが、其晩の夜中ごろに、俄かに車軸を流す

と書いてあるのを見ましたから、あの赤萬膏といふ膏薬を買つて來て、それを蛇穴に一番近い岩の上にべつたりと貼りつけたのです。そして、赤萬膏のおかげで、蛇穴の中の龍は、見ごとに吸ひ出されたのです。」と申し上げました。

それを聞いたお役人は、非常に感心して、

「さうだ。本當にさうだ。村の人達は、今までの蛇穴に無闇やたらと、石を投げ込んで龍を嚇しつけたから、龍は腹を立て、百姓達を餘計に苦しめたのだ。それにお前さん達は、虐めないで吸出し薬を貼つつけたとは、それは感心な智慧だ。」と言つて、お

復美に墨一挺と筆一對づゝを二人に下さいました。それ以來此村では、永く早天が続くと、村中で一番正直な男の子と女の子を一人づゝ撰んで、大瀧の岩の上に赤萬膏といふ膏薬を貼らせる習慣になりました。そしてそれが長い間續いてゐたといふ話ですが、近頃はどうなりました事やら……。(をほり)



大勇士

七六

小島政二郎

私はイギリスの勇ましい傳説を一つお話いたしました。しかし、事件の起つたのは北ドイツです。そこにビョールフといふ賢い強い王さまがいました。五十年の間、平和に國を治めて、人民からは自分のお父さまのやうに敬ひ親しまれておりました。ところが、近頃突然困つたことが起りました。と云ふのは、近くの山の洞穴へ、どこからともなく、口から火を吐く龍がやつて来たのでした。しかも、自分と一しよに、珍らしい寶物をどつさり持つて来たので、誰かに取られはしまいかともしじゆう心配になると見えて、絶えず恐ろしい目を光らして見張る

番をしておりました。しかし、或日疲れてつひうとうとした間に、ふとそこを通りかゝつた人間に、金のコップを一つ盗まれました。目がさめてそれと知つた火の龍は、大層おこつてあばれました。それが人間の世界には、地震となつて大勢を恐ろしがらせました。

火の龍は夜になるのを待つて、洞穴からスライと雲に乗つて出たかと思ふと、あちらこちらを飛びまはつて、その盗人を探し出さうとしました。おこつてゐるので、息をつく度に、それがパツ／＼と恐ろしい火と煙になつて下へ落ちて行きました。下では、そ

の毒を含んだ煙のために、田畑のものが皆枯れてしまふし、火のために家が焼けました。あつちでも、こつちでもぼう／＼火事が起つて、それが毎晩くりかへされる間に、殆んど國中が荒野になつてしまひました。

人民は困りぬいて、みんな揃つて王さまの御殿へ「昔、若い盛りの頃に、グレンデルといふ大怪物を退治した強い勇ましいビョールフ王よ。どうぞ今またわれ／＼のために火の龍を退治してわれ／＼をこの苦しみからお救ひ下さい。」と頼みに來ました。

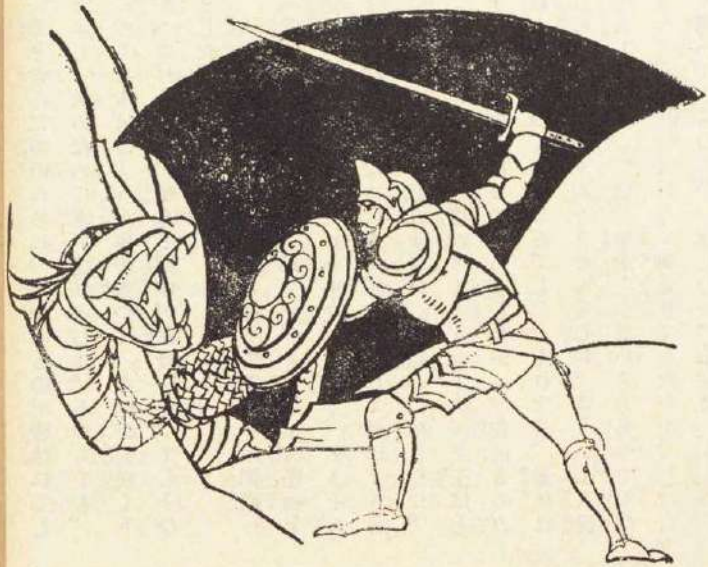
しかし、若い頃と違つてもうビョールフ王は七十に近いお年寄になつてゐましたから、昔ほどの力はずいとも持つてゐませんでした。それでも、勇氣は昔にちつとも變りありませんでした。さういふ人民の苦しみを聞いては、年をとつたからと云つて、だまつて見てはゐられない御氣性でした。で、しばらく考へて入らつしやいましたが、やがて

「よし。」と唯一言大きくお領事になりました。人民は大安心をして歸つて行きました。

ビョールフ王は早速御家來のうちから、腕前のすぐれた勇氣のある武士を十二人お呼び出しになつてお供をお命じになりました。その中に、キグラツフといふ若い勇士がまじつてゐました。

あくる日、王さまは鎧を着、相手が火を吐くと云ふので特に鐵の桶を持つてお出かけになりました。御案内には、火の龍の洞穴から金のコップを盗み出した男が立ちました。と云ふのは、自分の無考な行から、國中のすべての人に迷惑をかけたのを恥ぢて自ら進んでこの恐ろしい御案内役に立つたのでした。一行がだん／＼山深くのぼつて來ると、洞穴のある谷へはひる入口のところへ出ました。勇敢な王はこゝまで來ると立ちどまつて、

「一同は朕が合圖をすままで、こゝに待つておよし」とお命じになつたまゝ、たゞ一人谷の中へ踏み込ん



で入らつしやいました。

石を踏み草の上を行く足音に早くも火の龍は敵の近づいたことを知つて、眞暗な洞穴から恐ろしい首をぬつと突き出しました。すると、目の前にビョーウルフ王が立つてゐたので、怒つてバット口から火を吐きながら向かつて來ました。

ビョーウルフ王は、その火を鐵の楯で防ぎながら、恐れずに近づいて行くが早い、劍をぬいて切りつけました。ところが、まあ、なんとといふ手ごたへでせう、鱗でかためた體はまるで鐵を着たやうに堅くて、劍はツルリと滑つたきり、敵にかすり疵一つ負はずことが出來ませんでした。

その暇に、龍はスル／＼と全身を洞穴から這ひ出すと、前よりもすつと體の自由を得て、何倍もの力を増しました。ビョーウルフは、最初の攻撃で、劍が相手の體に突き通らないことを知つて、さてどういふ風に攻撃したものだらうかと考へながら、敵の

スキを狙つて立つてゐました。龍の方でも、フットボール程ある大きな兩眼をギラ／＼光らしながら、ぐつとこつちを睨んで動きませんでした。そのうちにあぐつと大きな口をあけたかと思ふと、フーと思を吐きました。その息が忽ち火となつてビョーウルフを襲つて來ました。焼かれまいとビョーウルフが楯の蔭に體をかくすと、そのスキを窺つて龍は尾を振つて打つてかゝりました。

當つたら一たまりもありません。ヒラリ／＼とあつちへ逃げこつちへ逃げしながら、ビョーウルフは下からお腹へ突き立てようとして劍を動かしましたが、うまく行きませんでした。そのうちに、尾のはじき食つて、劍は粉々に折れ飛んでしまひました。あつと思ふ間にビョーウルフの體は、くる／＼と龍のトグロのうちに巻かれてしまひました。

この時、お供をして來た十二人の勇士達は、遠く谷の入口から戦ひのさまを覗き見て、あまりの恐ろし

きに身動きが出來なくなつて、誰一人として王の險いところを助けに行くものもありませんでした。中にたゞ一人、キグラツフだけは、今にも王さまが締め殺されようとするのを見ると、だまつてゐることは出來ませんでした。ギラリと劍をぬくが早い、カタ／＼と駆けつけて

「王さま、しつかりなさいませ。キグラツフが御加勢にまゐりました。」

かう云ひながら、トグロに巻き込んだビョーウルフを一呑みとニユツと大きな鎌首をもちやがてゐる火の龍の胸のあたりへ、ぐさつと突き立てました。ふいを食つて、流石の火の龍も、深傷を負ひました。

疵をおふと龍は一層荒くなりました。締めつけてゐたビョーウルフを放して、新しい敵の方へ向つて來ました。おこつて牙を鳴らし盛んに火を吐きかけました。そのため、キグラツフの木の楯はメラメラと焼けてしまひました。

かういふ風に、龍がキグラツフに氣をとられてるスキに、ビョーウルフは胸鎧から懐劍を抜きはなすが早いか、いきなりうしろから龍の首ツ玉へかじり附くなり、ブツリ喉へ突き立てました。

この急所の一筋ぐりには、流石の龍も大きな體をブル／＼とふるはせたかと思ふとゴロリとそこへ打ち倒れました。それと同時に、ビョーウルフ王も立つておられずにバツタリ倒れてしまひました。それは毒氣を含んだ火の息を浴びたためでした。

キグラツフは大きに驚いて急いで、谿河から水をすくつて来て飲ませたり胸を冷したりしました。

それでやつとビョーウルフ王は氣をお取りかへしになりました。しかし、永くは生きておられないといふことは御自分でもお悟りになつたので、

『キグラツフ、急いで洞穴へはひつて行つて、どんな寶物があるか見て来ておくれ。』とお命じになりました。



なつて
「朕は人民のために、それ等の寶物を得たことを喜ぶ」と仰やつて、御自分の命の亡くなるのをお悲し

キグラツフは、急いで洞穴の中へはひつて行つてみると、初め真暗だつた洞穴が奥へ進むにつれて明るくなつて来ました。見ると、金色をした旗が一本ヒラ／＼翻つてゐて、不思議なことに、その旗からキラ／＼とした光線が流れてゐるのでした。その光線をたよりにあたりを眺めると、ある／＼、あらゆる種類の寶物が山のやうに積まれてありました。ちよつと數へてみても、ダイヤモンドとか瑪瑙とか云つたやうな寶石、金、まあ、綺麗なお椀や盃、兜に鎧に腕飾り、その他珍らしいものばかりでした。

キグラツフはもつとこまかにすつかり見て行きたかつたのですが、外の大地に倒れてゐる王さまのお身の上が氣づかされたので、まづそのくらゐにして置いて、中から小さなものだけを胸鎧の下に押し入れて、例の旗を片手に、出て来てみました。すると幸ひ、王さまはまだ生きて入つて、キグラツフが持つて来た二三の寶物を眺め、中の様子をお聞きに

みになる御様子もありませんでした。

「キグラツフよ、どうかお前が朕に代つて、公平にこれ等の寶物を人民達に分け與へてくれ。」これが悲しい御遺言になりました。

だん／＼國中のものが、この洞穴の前に集まつて来ました。さうして自分達のために命をお落しになつた王さまのために、心から首を垂れて悲しみました。洞穴の前に長々と寝そべつてゐる火の龍の一丈五尺からある體を眺めては、誰も恐ろしからぬものはありませんでした。

さて、その後、人民のすべては、賢い強いビョーウルフ王の徳をいつまでも傳へるために海に突き出た高い丘の上に、白い石で大きな記念塔を築きました。その海は名代の荒海です。

今でも船乗りどもがその沖合をとほる時には、雨の日も風の日にも、この白い記念塔を目當てにして舵をとると云ふことです。(をばり)



龍田姫

—何故楓は秋紅葉するか—

藤澤衛彦

昔、まだ、日本の神様たちが、そこそこ御自由に、神々しいお姿で、お歩きなさつてゐた頃のお話です。

或秋の日、山の神様が、自分の支配する土地をお歩きなすつて、何か變つたことはないかと、あたりに注意されながら、龍田川のほとりを下られておいでになると、里の人たちが、河の神のために建てた小さい祠の前に出ました。

ふと見ると、その祠の前に額いて、何か一生懸命に祈りをしてゐる少女があります。神様は、何を少

女が願つてゐるのだらうと、それが聞きたくてならなかつたので、その河の神の祠を訪れました。けれども、むろん、さうした事は、人間の目には見えませんでしたので、少女は、相變らず、一生懸命に、河の神様に、お願ひをしてゐるのであります。

「どうぞ、神様、お助けを願ひ上げます。私の手は、どうなつてもかまひませんから、母様のお手をお癒し下さい。母様のお手がわるいばかりに、私の家は、どんなに不幸であるか知れません。」と、涙を流しながら、まだ、そこを動かうとはしません。

それで、山の神は、河の神に聲をかけました。

「あんな可愛い少女が、あんな悲しい願ひをかけてゐるのに、あなたは、それをなせ早く適へてやらないんだね。私の見たところでは、あの少女は、もう、十日もあなたの處に祈りに來てゐるやうな様子に見えるが。」

かう言ひますと、河の神な、急に困つたやうな顔をして、

「今日が、その少女の満願の日なのだ、私には、それをどうしてやつていいか、わからないのだ。少女は、ほんたうに、美しい心掛けのものなのだ、あの少女の母奴、私の使姫の蛇どもを、一匹ならず、二匹ならず、三四ならず、殺しをるんだ。今度殺したら、只では置かぬ。再びお前に鎌の持てぬやうにしてやると、かう誓つたんだ。ところが、十日前に、この少女の母奴、又、私の大事な使姫の、それも、一等大事な使姫を二匹まで殺しをつた。それで、私

は、天と地とに誓つて、少女の母の手を呪つてやつた。それで、いくら、少女が、一心に願つても、とても少女の母の手を癒してやることは出来ないのだよ。」

と、河の神が申しました。

「だが、一體、何と言つて、あの少女の母の手を呪つたのかね。そして、何をあなたは、天と地とに誓つたのかね。」と、山の神が尋ねました。

「私の使姫を殺した女の手よ。お前の手は、今からもう、何物をも持つことが出来ないであらう。お前の手が癒るやうに代りの手を犠牲にして、私に願ふやうなことがあつても、私は、八百の手が、真紅な血の色に染るまでは、彼女を許すことをしないであらうと、かう天と地とに誓つたのです。」と、河の神が答へました。

それを聞かれた山の神様は、暫く、ちつと何かお考へのやうでしたが、やがて、河の神に向つて言ひ

ました。
「それでは、八百の手が紅く血の色に染りさへすれば、あなたは、この少女に、手の癒る、よい療法を教へてくれますね。」

「それは、かまひません。」

山の神様と河の神様が、こんな約束をなされてゐるお話を、人間であつた少女の耳には、ちつとも聞えませんでしたので、いくら経つても河の神様の神験の見えないことを悲しみながら、少女が詞を立去らうとしました時、同じやうに、河の神に別れを告げた山の神は、わざと、祠の扉をドンドンと叩かれました。

少女は、祠の方で、不思議な音がしますので、思はず立ち止つて、後を見返りましたが、だれの姿も見えませんでしたので、それでは、神様の神験があつたのではないかと、引返へして行かうとした時、不意に、自分の肩を叩く者がありました。それは、

山の神だつたのです。山の神は、その時、年老つたお爺さんの姿をして、少女の目にも、見えるやうになつて居りました。

「あらッ。」と、少女が小さい叫びの聲をあげますと、「心配する事はない。私は、お前が自分の母様の爲に、自分の手を神様に捧げるといふ事を聞いて、それを貰ひに来たのだよ。」と、山のお爺さんが申しました。

「はい、私の手は、神様に差し上げたものです。あなたがまこと神様のお使なら、どうとでもして下さいますし。」と、少女は、自分の手が母様の代りになるのだと、信じて居りますので、希望に輝いた目をして、山のお爺さんを見つめながら、可愛らしい二つの手を差出しました。

「なるほど、私は神様のお使です。ですから、どんなに痛いことでも、あなたは、堪へなければいけませんよ。」と、山の神が申しました。



「はい。」と、少女は、山の神のお爺さんのする儘に委せました。

山の神のお爺さんは、腰に下げた妙な袋の中から、小さい剣を取り出して、それで、少女の手を突つきました。少女の手からは、真紅な血が、どくどくと流れ出しました。山の神のお爺さんは、それを妙な筒の中へ入れるのでしたが、その仕事を終へてしまふと、懐しさうな目で、少女を見て言ひました。

「お前は、明日、朝早く、河の神の祠においで。その時、神様は、お前によい薬を下さるだらう。」

さういつて、山の神のお爺さんは、少女に別れて行きました。少女が、ちつとその後を見送つてをりますと、不思議ではありませんか、そのお爺さんは、翼もないのに、空の方へ、だんだん上つていつて、そこから中の楓の葉に、筒の中の血をひとたらしづつ、たらしつて行くやうです。

「神様のお使のお爺さんは、何をしていらつしやる

のだらう。」と、考へれば考へるほど、不思議に思はれましたが、少女は、明日来いといふ神様のお話を信じて、自分の家に歸つて行きました。

その後でも、山のお爺さんは、一生懸命になつて、楓の葉に、少女の血をたらしたらして歩きましました。一日の内に、山の神様は、龍田の山の楓といふ楓の葉に、少女の血を露のやうにたらし續けましたし。筒の中にある、限りある少女の血が、神様のお手によると、いくらにでも殖へたのでせう。山の神様は、龍田の山中の楓といふ楓に、筒の血をたらし終りますと、ほつと、一息して、

「これで、明日、霜が降れば、澤山な血の色に染つた手が出来るわけだ。明日は又次いでに、霧を降らして、誰が見ても、そこから中に、紅い手の見えるやうにしなければならぬ。」と、呟きました。

翌朝は、山の神様のおつしやつたやうに、霜が降りましたが、霜が下りると、不思議にも、山中の楓

の神が言ひました。

それで、河の神は、少女に、薬の葉で少女の母の手の癒ることを教へました。

少女は、夢現ともなく、その教へを受けて、喜んで、我家に戻りました。そして、薬の葉を薬にしたならば母親の手は、直きに癒りました。そして、それから、どんな手や足の病でも、薬で癒るといふことが、それから後、この里に傳へられました。それで、それも孝行な少女のお蔭だといふので、少女は死んでから、龍田の河邊に祀られました。

龍田の山の楓も、少女の血に染められてからは、毎年毎年、秋になると、紅く紅く染まるやうになりました。山の神は、それから後も、龍田の少女の血の筒を、方に持ち廻つて、方の木の葉を、紅葉に染めました。日本中の紅葉は、それから始つたのだといふ事で、秋の野山を司る神様を、それから、龍田姫と呼ぶやうになりました。(をばり)

「これはどうしたのだ。」と、河の神が驚きました。「少女の一心が通じたのだ。早く、お前は、少女の母の手の癒るやうにしてやらねばならない。」と、山

の神が、河の神の祠を訪ねた時には、もう、彼の少女も、そこにお祈りをしてをりました。山の神は、直と河の神に聲をかけて、

「河の神さん。大變な事が起つたぢやあないか。あれを御覽よ。」と言ひました。河の神が、山の神の指す方を見ますと、血のやうに真紅な、數百千の手が見られました。

「これはどうしたのだ。」と、河の神が驚きました。「少女の一心が通じたのだ。早く、お前は、少女の母の手の癒るやうにしてやらねばならない。」と、山

弟戀しい杜鵑の話

(一等當選)

中村 信郎



毎年五月頃になりますと、毎日雨が降りついで、月のある晩でも外は眞暗です。私の家の直ぐ側の谷川の水音が、いつもより烈しく聞えます。その谷川の音にまじつて、「ホー、ホー」といふ鳥の淋しい聲や、名も知れぬ鳥の啼聲が聞えて、氣の弱い私を淋しがらせました。いつも一人で寝る私も其の頃になると、お祖母さんの所へ行つて、いろいろ

ろのお話をして貰ひ乍ら眠るのでした。其の晩は、夕方から少し雲が干切れて、時々月が顔を出してゐました。寝る前に便所へ行きますと「テッペンカケタカ」と杜鵑の物悲げな聲が、二聲三聲聞えました。私は妙に怖い氣持になつて、大急ぎで、お祖母さんのお床の中へもぐり込みました。泣き出しさうになつてゐる私を笑ひ乍ら、お祖母さんは可哀さう

な杜鵑のお話をして下さいました。

昔、信濃の國の山奥、杜鵑のお母アさんが二人の小供と棲んでゐました。二人の小供の杜鵑はまだ小さいものですから、巢の中で小さくなつて、お母さんが餌を捜して持つて来て下さるのを、ちつと待つてゐるのです。お母さんが、色々おいしい蟲を取つて歸つて来ますと、弟の杜鵑が、

「チイ〜〜。」と啼きます。
兄さんの杜鵑は可哀さうにも、生れつき目が見えないものですから、弟の聲を聞くと、見えぬ目を無理に見張り乍ら、同じ様に、

「チイ〜〜。」と啼きます。
お母さんは二人に蟲を分けてやると、又直ぐ餌を捜しに出て行きます。兄弟は仲よく食べてしまふと、又ちつとお母さんの歸りを待つのです。かうして親子三人は、仲よく暮してゐました。其の中に二

人の小供は、だん〜大きくなつて来ました。大きくなればなる程、兄さんの杜鵑は、目の見えない事の不自由さを知る様になりました。弟が愉快さうに飛ぶ積古をする時も、ちつと巢の中で二人の聲を聞いて居なければなりませんでした。

「さあ今度は其の枝から此處まで来てごらん」とお母さんの聲がしますと、

「その位僕何でもないよ。」と弟の聲が聞えて、バタバタ〜と元氣のよい羽ばたきの音がします。

「お、好く出来たこと！ さあ今度はそこから此處まで。」

「今度は少しこはい様だな。バタバタ〜〜。」

「お、よし〜。今日は此位にして置ませう。」
弟の飛ぶ音に、兄さんの杜鵑はもう飛びたくて堪りません。時々自分も羽をバタバタ〜やつて見るのです。でもお母さんから、

「決して巢を出てはいけませんよ。」さうすると歸れ

なくなつてしまひますよ。』と戒められてありますので、どうする事も出来ません。たゞ淋しく弟のお稽古の音を聞いてゐるばかりでした。

弟の杜鵑は、毎日お母アさんに教へ、頂いて稽古をしましたので、だん／＼上手になりました。もう一人前飛べるやうになります。お母さんの後について自分の食べるだけの餌を捜しに行きました。兄さんの杜鵑はお母さんも弟も出て行つてしまふと、たゞ一人巢の中で留守番をしました。そして弟の話をしてくれるいろ／＼の新しい物や、事柄を考へてみるのでした。

「森つてどんな所かしら？ 木が澤山あるといふけれど、この近所と同じやうな所かしら。風が吹くと、矢つぱりザワ／＼と音がするんだらうか。よく弟が空が青いつていふが、空つてどんな形のものだらう。青いつてどんなだらう。明るいのかしら、暗いのかしら。あのおいしい蟲などはどんな所にゐるの？」

だらう。僕も一度行つて見たいな。』

など、一人で想像したり思つてみたりして、お母さんと弟の歸りを待つのでした。弟の杜鵑が歸つて来ますと、又新しい話をしてくれれます。

「兄さん今日はね、すつと向ふの野へ行つたんですよ。」

「さう野原つてどんな所？」

「野原つて廣い／＼の。そしてそこら一面秋の草が生えてゐて、其の中に赤や白の花が咲いてるしそれは美しい處ですよ。それに鳥もいゝ聲で澤山啼いてゐるんですよ。」

「廣いつてどんな事？ 緑つてどんなの、花つてどんなものなの？」

「廣いつて廣いのだ。向ふの方までよく見えるの。緑つて、此處にある木と同じ色ですよ。でも今日の色はもつと綺麗だつたなあ。僕の大好きな色なんですよ。」

「そんな事をいつても僕にはわからないよ。目が見えないんだもの。お前はいいね。」



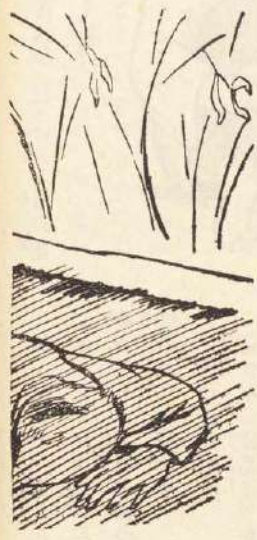
かう云つて、兄さんの杜鵑は涙ぐみました。「あゝさうだ。兄さんは目が見えないから、赤いと云つても、青いと云つても解らないんですね。あの野の美しかった事！ せめて鳥の聲だけでも聞かせて上げたいなあ。」

兄さんの杜鵑は、もう何とも云ひませんでした。弟も何だか變な氣持になつて、黙つてしまひました。弟の杜鵑は兄さんの不自由な事が分つて来ると何につけても親切にいたはりました。お母さんも可哀さうな兄さんの杜鵑には、優しくなりますし、おいしい物も出来るだけ多く食べさせました。さうして親切なお母さんや弟を持つた盲目の杜鵑は、本當に幸福でした。でも自由な弟の事を考へる時、不自由な自分が悲しくなつて心が暗くなりました。

それはもう山々の木が、紅や黄に染め出され、木の實が美しく熟する或る秋の日でした。朝から餌を捜しに出たお母さんの杜鵑は、夕方になつても歸つ

て来ません。兄弟は其の夜は眠らずに待つておました。翌る日になつて「若しや歸つて来られはせぬか。」と待ちましたがやつぱり駄目でした。弟の杜鵑は野を過ぎ山を越えて、今までお母さんと一緒に行つた事のある所は、すつかり捜して見ました。併しお母さんの姿はとう／＼見つかりません。兄弟はもうがつかりしてしまひました。特に兄さんの杜鵑は元氣を無くして、話もあまりしなくなりました。弟の杜鵑は、どうかして兄さんを元氣にさせて上げたいと思ひました。そして二人の餌を捜すのに、骨を折りました。歸つて来るとお母さんの居られた時と同じやうに、自分の聞いた事、見た事を話して慰めようと思ひました。でも兄さんは不機嫌になるばかりです。

「兄さん今日も夕陽が真



赤です、明日もよい天気ですよ。」

「僕は天気なんかどうでもいゝよ。」

「でもよい天気の方が氣持がいゝですよ。暖くはあるし、青空が美しく見えるし。」

「お前は目が見えるが、僕には何も見えないんだ。青空なんて云つても解らないよ。」

話すことが皆かうして兄さんの心にさはるのでした。併し弟の杜鵑は、兄さんを慰める爲に、せめておいしい物でも上げようと思つて、一生懸命でした。そろ／＼寒くなつて来ますと、杜鵑にとつて一番の御馳走の蟲が少なくなつて来ました。一日中捜しても兄さんの分がやつとです。弟の杜鵑は自分の食べられさうもない堅い木の實や、種子を食べて、おいしい蟲は皆兄さんに上げました。それでも時

によると、兄さんの食べる蟲だけでも、取れない事がありました。兄さんの杜鵑は、食物の少くなつてゆくのを知つて、ふと弟を疑ひました。

「近頃はどうした事だらう、弟の持つて来る蟲の減つた事。それに木々は食べられもせぬ木の實などがまじつてゐる事もある。お母さんの居られた時はこんな事は無かつたが、僕が目が見えない事をいゝ事にして、弟の奴、自分でおいしい物を食べてゐるのかも知れな



い。」

さう思ふと、弟の様子が益々をかしく思はれました。何から何まで、自分だけいゝ事をしてゐるやうに思はれました。とう／＼兄さんの杜鵑はもう堪へ切れなくなつて、飛んでもない事を考へたのでした。

「弟が歸つて来たら、うんと虐めてやらう：：」

かう思つて弟の歸りを待つてゐました。そんな事とは知らない弟の杜鵑は、今日も兄さんを喜ばせてあげようと思つて、

一生懸命捜した餌を持つて歸つて來ました。
 「兄さん只今、おそくなつて申譯ありません。」
 兄さんの杜鵑は、お歸りとも言はずに、いきなり弟の頭を嘴で、こつんとつゝきました。つゝかれました弟は、チイ／＼と云つて巢から眞逆まに地べたへ落ちました。所がまあどうした事でせう。弟の泣く聲を聞くと同時に兄さんの杜鵑の目が不思議にもパツチリと開きました。：：兄さんの杜鵑は不意に目が見えたので、今まで弟を怨んでゐた事は、すっかり忘れてしまつて、
 「おい／＼弟、弟、俺は目が見えるやうになつたぞ！」と云ひました。けれども何の返事もありません。
 何所かでチイ／＼と云ふ聲が聞えるので、其の聲のする方を見ますと、弟は木の根の所で羽をばたばたはせてゐました。驚いて其所へ飛んで行きました。が、可哀さうに高い所から落ちた弟は、もう其所で死んでゐました。兄さんの杜鵑は瘦せ衰へた

弟の姿を見ました時、初めて弟の親切な心盡しが、身に泌みてはつきりと解りました。
 「弟よ赦して呉れ。こんなに僕を大切にしてくれられたのに：：：。」
 兄さんの杜鵑は泣き伏しました。併しそれはもう遅かつたのです。兄さんの杜鵑は氣ちがひのやうになつて、
 「弟戀し！ 弟戀し！」
 と叫び續けました。それから夜も晝も「弟戀し」の聲は山の中に響きました。そして餌をさがしても捜しても捜しなれぬ爲に、餌がみつからないで、兄さんの杜鵑は日に／＼やせ衰へて行きました。でも千聲鳴くと、やつと一匹の蟲が見つかるのでした。

今でも信濃の國の山の中の杜鵑は「弟戀し！」と啼きながら餌を捜してゐるさうです。(をほり)
 (作者住所、東京市本所區横網町一ノ五)



赤牛

沼 (二等當選)

久米 舷 一

越前の國の赤牛沼といふ沼の邊りに、お蝶と云ふ娘が母親とたつた二人で暮して居りました。お蝶は十三才、たゞ姿が美しいばかりでなく、又とない舞の名人でした。

全くお蝶の舞と云つたら有名なもので、沼附近の町は申す迄もなく、遠くの郡でも、その右に出る者はあるまい、と云はれて居ました。
 ある、五月雨のシヨボ／＼、陰氣に降り續く晩の事でした。夜中に、フト眼を覺したお蝶は、剛へ行

き、さて手を洗はうとすると、其處の南天のそばに何か白いものが隔つて居るので、ギョツとしました。併し武士の子だけに落つてよく見ますと、それは十位の可愛らしい男の子で、袴を着けたまゝ、雨にぐつしより濡れて座つて居るのです。

「だれです？ 貴方は。」お蝶は聞きました。
 男の子は頭を下げたまゝ、「自分は赤牛沼の底深く寝んでゐる鱗の使ひの者であるが、今度主の鱗が、重い病氣に罹つて、明日にも命が危い。ついでに死ぬ前に一度でもいゝから、評判のお蝶の舞が見

たい。哀れな、鱗を助けると思つて、私と一緒に沼の底へ来て下さるまいか。」と云ふのです。



沼の底の鱗と云ひ、又年取つた母親の事を考へて、お蝶はどうしたものか、と惑ひました。併し男の子の如何にも忠義らしい様子を見て、是非行つて

やらねばならぬと思ひました。

「夜の明けぬ内に歸れるなら行きませう。」

お蝶がかう云ひますと、男の子は大喜びで、

「え、それはもう、夜が明ける迄にはきつとお歸し致します。ではお供致しませう。」と云つて立上りました。

お蝶は草履のまゝ縁から下りて、眞暗な雨の中をびしや／＼と沼の方へ歩いて行きました。沼の岸へ来て、さてどうして水の中へ這入るのかと思つてゐますと、男の子は、構はず歩いて御覽なさい。」と云ひます。思ひ切つて水の上へ下りて見ますと、成程何でもなく、丁度砂山でも下りるやうに難なく沼の底へ着く事が出来ました。

沼の底は思つたより明るくて、お宮のやうな立派な御殿がありました。御殿の廻りには、ぬる／＼しが大きな水藻が、まるで杉の樹立の様に立つて居りました。

二

大勢の人に迎へられて、お蝶が主人の居間だと云ふ室に這入つて見ますと、齡の頃三十位の美しい男の人が、緞子の蒲團の上に寝て居ります。

「お客様をお連れ致しました。」と男の子が申しました。お蝶は、さてはこれが、鱗の化身なのかと思つて居ますと、男は頭を上げて、如何にも嬉しげに、につこりして、

「よく来て下さいました。」と細い聲で禮を云ひました。そして早速ではあるが、どうか、舞を見せて貰ひたい、と頼みました。お蝶は承知して立上りました。誰れも笛を吹く者がありません。

「どなたか笛をお吹きになる方は御座いませんか。」お蝶はかう云つて人々を見廻しましたが、生憎御殿の中に、誰一人として心得のある者が居ませんでした。

「よし、それでは私がやる。」

突然主の鱗が、かう云つて、起き上らうとしました。おつきの者どもは驚いて、

「そんな事を遊してはお身體に障りますから……」と無理に寝せようとはしますが、主は、いつかな聞きません。齊せ細つた手で、床の間の笛を取つて「五色櫻」を吹き始めました。お蝶も、サツと扇を開いて舞ひ出しました。

梓河原の

なでしこは

晝はつばみで

夜は咲く

あ、ぎつとんとん

ぎつとん／＼

その美しさ。美事さ。次の間に居並んだ人々は瞳を凝して、息もつかずに見入つて居ります。主も、到底今死にかけた病人とは思はれぬ程、元氣になつ



て、音色美しく笛を吹きました。その青白い頬にもばつと血の氣が差して居ました。やがて一舞終りますと、人々は思ひ出したやうにやんやと拍手喝采しました。主は、少しの疲れた様子もなく、次から次へと新しい曲を吹いては、お蝶の舞を所望したのです。

「夜明も近い様子ですから、もうお暇致します。」暫くしてお蝶がかう申しますと、主は、今迄とは打つて變つた峻しい眼をして、

「いや、一度この沼の底へ来たからは、もう歸すことは出来ぬ。」と云ひます。お蝶は驚いて、

「それでは約束が違ふではありませんか。」と云ひ返しますと、

「どうあつても地上へは歸さぬ。」と頑として聞き入れません。

お蝶は、この不信念な仕打にムカツとしました。「それではこんな處に一時だつて居られませんか！」

と云つて室から出ようとし、ばら／＼二三三人の男が出て来て、お蝶の袂を押へました。そして腕き廻るのを無理に引擔いで、奥の方の室へ押込めてしまひました。

三

翌る朝、お蝶の家では大騒ぎが持上りました。たつた一人娘のお蝶の姿が見えぬと云ふので、お母様は半分氣狂ひの様になつて探し廻りました。

ところが晝頃になつて、漁師の源兵衛が、沼の上にごんな物が浮んでゐたと云つて、一つの守札を持つて來ました。それは、お蝶が肌身離さず持つてゐた静神社のお守りだつたのです。お母様が、慄へる手でそれを聞いて見ますと、お札の裏にお蝶の手蹟で「私、沼の底の鱗に捕へられて、非道い目に遭つて居るから、どうか、直ぐ助けに來て下さい。」と云ふ事が細かく認めてありました。

「や、お蝶さんは沼の主に連れて行かれたんだ。」

村の人々はかう云つて顔色を變へました。

「主に連れて行かれたんぢや、もう駄目だ。なまじ取返しなどに行つたら、どんな祟りが來るか知れやしない。」

口々にかう云ひ合つて誰れ一人として「私か助けに行かう。」と云ひ出す者はありませんでした。

この村に、藤吉と云ふ若者が居ました。何も仕事をせすに、何時も何かぼんやりと考へてばかり居ましたので、人々は、ノロ吉などと云つて馬鹿にして居りました。ところが不思議にも其のノロ吉が「それでは私が行つて、かあいさうなお蝶さんを助けてあげよう。」と云ひ出しました。けれども村の人達はフ、ンと笑つて、

「馬鹿を云ふなノロ吉。鱗に食はれてしまふぞ。」と云つて止めましたが、藤吉はどうしても行くと云つて聞かれません。

それから藤吉は方々の家へ行つて、煙草のやにを

貰つて来ました。藤吉はかねて、蛇は煙草のやにが大嫌ひだと云ふ事を聞いてゐたのです。

やがて藤吉は、太い綱を腰につけて、真逆様に沼へ飛込んで行きました。

沼の底には廣い御殿がありました。

「お蝶さんは何處に居るかしらん。」かう思ひながら群がる水藻を拂ひのけ、泳いで行きますと、書院の丸窓の所に、チラリと振袖の様な物が見えました。「べたぞ！」と思つて近寄つて行きますと、夫れはまがうかたなきお蝶でした。

所が困つた事に、丸窓には頑丈な格子がはめてあつて、とても這入る事が出来ません。藤吉はいろいろと考へた揚句、これはお蝶に頼んで、蟒にやにを吞ませるより仕方がないと思ひました。

「お蝶さん。何とか工夫して、このやにを蟒に吞ませて下さい。私は此處で待つて居ますから……」かう云つて、お蝶にやにを手渡しました。

お蝶は承知して、奥へ這入つて行きました。そして、床の間に立てかけてあつた、横笛の吹口の處にこつそりやにを塗りつけたのでした。それから、その笛を持つて、蟒の所へ行つて申しました。

「久しぶりで、舞をして見たいと思ひます。笛を吹いて下さいませんか。」

蟒は大喜びでした。

「よし、よし」と顔中、皺だらけにして、笛を取り上げ、前後の考へもなく、口にあてました。

瀏亮と響く笛の音につれて、お蝶は舞ひ出でました。もうこれが最後だと思つたので、あらん限りの力を出して舞つたのです。ところが、五分もたつたたぬうち、蟒は、ふと笛をやめて、

「何だか、氣持が悪くなつて來た、もう今日はこれでよそう。」と云ひ出しました。

と、蟒は、突然うなりながら、ばつたりと其場へ倒れてしまひました。

「それ、又御病氣が悪くなつた。」と云ふので御殿中は忍ち、上を下への大騒動になりました。

お蝶は逃げるのは今だ！と思ひました。混雑に紛れて外へ走り出て見ますと、ちやんと、藤吉が待つてゐました。

「早く、早く。」藤吉は、直ぐそばへ泳ぎ寄つてお蝶と自分の身體を、しつかり綱に縛りつけました。

沼の岸では、村の人々が藤吉はどうしたかしらと待あぐんでゐましたが、水の底からぐんぐんと、綱を引きますので、「それッ」と云つて、皆な力を合せて、綱を引上げました。



やがて、水にぐつしより濡れた、息も絶々の二人の姿が、水の上へ現れて來ました。

四

お蝶は、大きくなつて、都へ上り、遂に其處で日本でも名高い、舞の先生になりました。

併し、お蝶は、自分の舞が有名になればな程、自分が、あのやうにして無慘に謀り殺した蟒の事が氣にかゝつて、仕

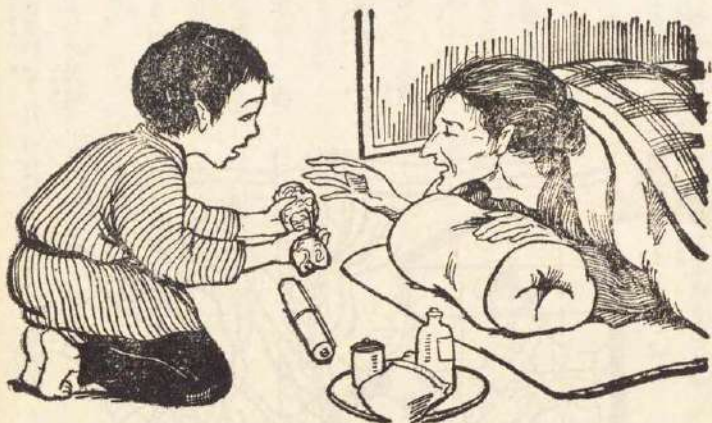
様がなくなりました。お蝶は家へ歸り、蟒の爲に立派な祠を建て、やりました。

赤手沼の畔にある浮島神社と云ふのは、この蟒を祭つたものださうです。(作者住所 水戸市上市神所)

粟 大 盡

(選 當 等 三)

力 橋 土



武田四天王、信房、昌景、昌直、昌直等は後年世を捨てて富士山の麓の、土橋、河野、渡邊などと云ふ小さい村にひっこんで住み、その村の名をとつて姓としました。信房の孫土橋大倉之縁は非常に強い人で、やがて渡邊河野本郷などの村々を皆従へて、この地頭となつて勢を振りました。併しこの人は、或冬御駒丈といふ山へ猪狩りに行つて、峻しい岩から滑り落ちて死んでしまひ、それからその子孫は次第に衰へ、殊に徳川の世となると、地頭の役目をも奪はれ、たゞの百姓となつて、終ひには随分貧乏しました。その頃の話です。

云ふ時、お母さんは甚平を枕元に呼び、一卷の系圖と守り刀を渡して、

「お前が未だこんなに小さいのに、死んでしまふのは、ほんとに心残りです。今までお前には話さなかつたけれども、實は私達の先祖は由緒ある者で、ここの地頭さへして所つたものです。どうぞ正直によく働いて、先祖の名譽を取り返して下さい。」と云つて、その儘なくなりしました。

甚平は悲しくて、系圖と守り刀を持つた儘泣き沈みました。するとその時、村の倉吉といふ男がやつて来て、泣いてゐた甚平を勵まして、

「お母さんに死なれて、困るだらう。併し何も心配する事はない。葬式でも何でも皆いいやうに取計つてやるから。そしてお前も一人きりでは淋しいだらうから、これからは私の家へ来て、一しよに暮すがよい。」といろ／＼親切に慰めて、お母さんのお葬式をしてくれました。

甚平は大層喜んで、それから倉吉の家へ行つて、おいて貰ふことにしました。

實はこの倉吉は、悪い心の人で、さも親切らしく見せかけて、未だ子供なのを幸ひ、甚平のお家や、少しばかりある畠や道具類まで、すつかり自分の物にしてしまはうと企ててゐたのです。ですから甚平が倉吉の家に行つてから二三日たつと、もう倉吉はほんとにひどく甚平にあたりました。未だこの子供もやつた事がないやうな、山や畑の大人の仕事をどし／＼云ひつけては、少しでもますますやつたり遅れたりすると、それはひどく打つたり蹴つたりしました。甚平はつく／＼悲しくなつて、もう一人でもいいからお家へ歸つて、そして小さくても、自分の畑を耕した方がいくらか知れないと思ひました。或日は／＼倉吉にその事を話すと、倉吉はもう眼をむいて、

「馬鹿め！ あの家を未だ自分の物だと思ふのか。」

あれはとうに、己の物になつてゐるんだぞ。お前は子供で分るまいがな、葬式の費用がとて澤山かゝつてゐるんだぞ。だからあんな粗家の一つや二つとつて、ほんとに何にもなりやしない。畑だつてさうだ。だからお前も、死ぬまで己の所で働くんぞぞ。歸るなんて生意氣な。さあ／＼行つて今日の仕事をしろ。」となつて、もう打ちさうな様子をしました。それで、なく／＼甚平は、又斧をかついで裏の山へ登つて行きました。

「あ、何と云ふ情ない事になつたのだ。」

甚平は考へると、悔しくてなりませんでした。しかし又怒られるので、夕方おそく迄働いて、澤山の木を切り出し、それを背負つて山を下りました。山を下りて、中河原と云ふ河原にかゝつた時、道の藪がガサ／＼となつて、何か黒い物がビヨイと道の真中へとび出しました。よく見るとそれは、狼のやゝです。甚平はほんとに驚いて逃げ出さうとし

ましたが、脊の荷は重いし、足がガタ／＼と震へて、一足も歩けません。その中にも、狼は、どし／＼甚平の方へ近づいて來ました。甚平は怖くて／＼、もう聲も出せずにそこに坐つてしまひました。所がいつ迄たつても、狼が唸りもせず、前の方にちつとして居るので少し變に思ひ、よく見ると、その狼は少しも恐しいやうな様子はなく、目の前の黒い石ころをさして、頻りに何かいつてゐるやうな風に見えました。

ます／＼變に思つて、よくその黒い物を見ますと、それはたゞの石ころではなくて、中に金の佛様が三體はひつた皮の袋でした。

すると狼は、甚平の着物の裾をくはへて、どこかへひつばつて行くやうです。甚平も、さうやたら食べられるやうな事もないと思つたので、連れて行かれるまゝについて行きました。すると、三町ばかり離れた森の中に、やはり一匹の狼が目の上に刺

を立てて苦しがつて寝てゐました。甚平はよく分つたと思ひました。そしてすぐ、その刺を抜きとつてやりました。

甚平はお母さんが死なれる時、正直にしろと云はれた事を思ひ出して、家へ歸るとすつかり倉吉に話しました。怒の深い倉吉は、もうそれが欲しくてたまらなくなつて

「どれ、出して見な。子供がそんな大切な物を持つてゐて、なくしてもはいけないから、私が預つていて上げよう」と云ひました。

甚平はこれには何か譯がありさうな氣がして、それを持つてゐたいと思ひましたが、又どんな目に合はされるかと思つたので、仕方なしに佛様を渡しました。倉吉はそれを手にとると、ひどく驚いて、「アツ！」と叫びましたが、すぐ何喰はぬ顔をして、「お前なんか、これで澤山だ。これとかへつこをしよう。」と云つて、粟を一袋甚平にくれました。

この事はすぐ村中の評判となりました。さうすると、村の人々の心に一つの大きな疑ひが起りました。それは、一月ばかり前に中河原で、村の佛具屋の主人が金の佛様三體を屈ける大切な役目で通りかゝつた時、何者かに殺されてしまつて、その佛様をとられた事でした。もし、狼の佛様が佛具屋の主人のと同じであつたなら、殺した者は果して誰であらう。とう／＼噂は役人の耳にはひりました。そして役人は佛具屋の職人を連れて、倉吉の家へ佛様を見せに來ました。倉吉はそれを見ると、大層驚いたやうな風でしたが、やはり何氣なく装つてゐました。職人は佛様の像を見ると、

「これは違ひありません。私達が下ごしらへをして、親方が仕上げた物です。悲しい事をしました。」と云ひました。

これを見た役人は、それと相圖をしましたので、手下の者が大勢とんで來て、すぐ甚平を縛り上げて



しまひました。何も知らない甚平は、ほんとにびつくり致しました。そして、狼の事を詳しく話して聞かせましたが、役人はせゝら笑つて、
『成程、子供は子供だけの嘘をつくわい。』と、どしどし役所へひつばつて行つてしまひました。
併し、それでも甚平は、何を聞かれてもたゞ狼の事を云ふばかりです。役人はそれをほんとにしたな
いで、とう／＼甚平を牢屋に入れてしまひました。
併し一月たつても、二月たつても、甚平は狼の事をいふばかりで、外の事は少しも云ひません。すると或日、倉吉が役所に出て来て、古い血の一ぱいついた斧を出し、
『家の物置きに、こんな物がありました。これは、甚平が毎日使つてゐた物ですが、丁度人殺しのあつた頃なくしたと申しまして、又新しいのを買つてやりました。』と云ひ立てました。
かうした證據が擧ると、役人は益々甚平を責めて、



毎日竹のむちで、百も二百も血の出る程打ちました。それでも甚平は狼の事の外は、

『そんな斧の事などは少しも覚えのない事です。』と言つて、何も云ひませんでした。終ひには役人も飽きて来て、

『それではこの子供の云ふ事がほんとかどうか、一寸ためて見よう。』と、甚平を縛つて先に立たせ、役人が大勢ついて、中河原に行つて見ました。すると一匹の狼が出て来て、役人の前に坐つて、

人間と同じやうに役人に向つて甚平の方を見ては、何か願ひ／＼するやうな風でした。役人は變ではあるし、餘りうるさいので、一寸刀を抜いておどかしますと、狼もたまりかねたと見え、一聲ウーと唸ると、どこからともなく、何百匹とも知ぬ狼の大群がとんで来て、一度に役人にせめかゝりました。そして、先の狼と今一匹の狼とは、靜かに繩をかみ切つて甚平を助けました。

役人もまず／＼變に思つてよく見ると、別な一匹の目の上には、成程傷の跡がついてゐました。そしてその狼達は、甚平の前へ行つて、さも懐しげに、頻りにおじぎをして甚平の手をなめました。役人も大抵分りましたが、それでもやはり甚平を牢屋に入れておきました。

或日役人が用事で中河原を通ると、一匹の狼が何かくはへて来て『これを見てくれ。』と云ふやうな風をしました。見ると、それは古い煙草入です。役

人は、これはやはり人殺しに係はりのある物だらうと思つたので、急いで役所に歸ると、すぐ村の人を皆呼び集めました。その中には倉吉もゐました。

と役人は煙草入れを出して、

『これは誰のだ。』と皆に見せますと皆一寸と首をひねつてゐましたが、その内の二三人が進み出て、

『それはきつと倉吉さんのに違ひない、半年ばかり前迄持つてゐたやうだ、ね、つげに見覚えがある。』と答へました。

用意してゐた役人達は、先から着くなつてブルブル震えてゐた倉吉を、すぐに縛つてしまひました。

そして、調べて見ますと、佛具屋を殺したのは倉吉で、倉吉は、狼に追ひかけられたので、折角とつた佛様を放つて逃げたのだと云ふことがわかりました。煙草入もその時落したのでした。

甚平は直に免されました。そして家や畑の事も、役人の爲にちやんと元に返されました。甚平は夢の

やうな心地で家に歸ると、ふと思ひ出して、あの粟を蒔いて見ました。すると知らない間に、誰か草取をしてくれたり、いろ／＼手入をしてくれたりするので、甚平の粟は人の十倍もよく實りました。それに甚平もお母さんの遺言を守つてよく働いたので三年五年とたつ中には、もう粟を山の様にとる事が出来ました。それを賣ると、甚平は見る／＼大金持になつて、その先祖の事や、甚平が賢い若者である事もよく分つたので、間もなく又地頭にとり立てられました。

その年お母さんの命日に、二匹の狼が、遠くで、甚平の家を拜んで、その儘どこかへ立去つたのを見た者があると云ひました。(をはり)

附記——土橋甚平は私達の先祖です。そしてその時代に、大倉之條が正月の四日に御胸練でなくなられたのを悲しんで、四日以後は正月をしない事にしました。だから今でも私の地方では、どこで七日迄お正月をするのに、四日にはもうお正月を遂つてしまひます。(作者住所 山梨縣西八代郡上九一色村)



笛吹川 (三等當選)

伊藤はなよ

字芹澤)

我國の三大急流の一つとして、其の名を知られてゐる富士川の上流に、名も美しい笛吹川と云ふ川があります。この川はその源を遠く秩父山中に發して、日川、重川等の支流を合せ、奔流十四里に及ぶ甲斐の國としては屈指の長流であります。今は笛吹川と云つてゐますが、その昔は子酉川と云つたのです。そして其の子酉川と云つた時分に、その上流に釜口村と云ふ小さな村がありました。(現在の三富村

それは或る年の夏のことでした。天の底が抜けたのかと思はれる様に烈しく降り出した雨が、三日降つても、五日降つても止みませんでした。村人の心は不安になつて來ました。それは子酉川の水が、一日一日とその量を増して行くからでした。村人の恐れ／＼てゐる心も知らない様に、少しも遠慮なく、とうとう一週間降り續けました。めだかや小鮒を遊ばせた清い流れ、青い空、白い雲

を寫した静かな淵は、恐ろしい勢の泥水の渦巻に變つてしまひました。ドンドンドンドンと大きな流れの音の中にも、岸にさゝやく水の優しいサラサラ……と云ふ音楽は何時も絶えなかつたのに、それさへ何處へか消えて、ドンドンドンドンと猛獸でも吠える様な、大きい音のみが天地を振はして居りました。

村人は代る／＼村上の堤防を見に來ました。そしてその度毎に、不安の色を愈々増して歸るのでした。中でも一番心配したのは、堤防が切れたら最後、第一番に押流される運命を背負つた家に往んでゐた権三郎でした。権三郎はその時十三歳の少年で、母とたつた二人きりで暮してゐました。父は権三郎が五歳の時に亡くなり、それから後は、目の不自由な（全く見えないのではないが、殆ど見えない）母によく仕へて孝行をして來ました。家は別に裕と云ふ程ではありませんでした。父が働いて買ひ求めて置いて呉れた田や畑がありましたので、別に働かなくて

も普通の暮しに不自由する様なことはありませんでした。母は天にも地にもたつた一人の我子の行末を祈り乍ら、不自由な目でも厭はずに働きました。権三郎は村でも評判の賢い少年で、學校の成績もよく、母親にも大事に／＼仕へました。

権三郎は堤防の上に立つて、今にも滾り越えて來はしないかと思はれる様な、物凄い水の勢を恨めしさうに凝視めて居りました。恰度其の時、同じ様に隣の家の小父さんが見に來ました。そして「権ちゃんお前も心配だらうな、堤防が切れたら第一番にやられるのだから……。そして私の家と云ふ順だ、どうも困つたもんだ。」と云つて首を傾げました。「小父さん！ 今夜は大丈夫でせうか。」「あゝ、まだ／＼大丈夫さ。この堤防が切れるまでには、まだ／＼間があるよ。こゝ二日位の中に歇んでくれたら有難いかな——」

も漸く眠りにつきました。

二

「ほんたうに大丈夫でせうか。」と権三郎は念を押して聞いて、小父さんの返事の案外力強かつたので、それに力を得て家に歸りました。そして夕飯の仕度をしてゐた母に、その事を話して安心する様に云ひました。

母の手に成つた美味しい夕飯を済ましてから権三郎は、何時もの様に笛を吹き、母は薄黒い壁に寄りかゝり乍ら、いつもの様に目を閉ちてそれを聞いてゐました。川水の大きい流れの音と、細い寂しい笛の音と、兩の音とが混じつて、物凄く、悲しく響き渡りました。「鳥の啼かない日はあつても、笛の聞えない夜はない」と近所の人々が噂する位に、必ず毎夜吹かすには寝ませんでした。その夜は何だか寂しかつたので、いつもより早く止めて床に就きました。けれども激しい水音に、二人共容易に眠れませんでした。一時が鳴つた時も、二人はちやんと知つてゐました。それから間もなく、二人は不安ながら

「堤防が切れるぞ——」と云ふ力の籠つた叫び聲が、半ば夢心地でゐた権三郎の耳に突き透りました。はじかれた様に飛び起きた権三郎は「お母さん大變です！ お母さん！」と呼び乍ら、母、手を取つて起しました。権三郎は愈々恐れてゐた時が來たと思ひました。母親も驚いて不自由な目乍ら、出来る丈見張つて、我子の顔を見ました。その時再び、堤防が切れるぞ——逃げろ——」

「逃げろ——」と云ふ血の出る様な叫聲が、二人の耳に入りました。

「お母さん早く、早く逃げませう、早く——」
「佛様を抱いて行くからお前に先に外へ——」
権三郎が力を入れて、勢よく兩戸を開けた瞬間、母が佛様を抱いた刹那！ 雷の様な凄じい雷と共に

恐しい泥水は、どつと一度に平和なこの小さな村を呑まうとかかりました。見る／＼うちに家は浮んでゐる様になりました。

「お母さん！早く——早く——」

権三郎は母の手を堅く握つて、腰迄とどく泥水の中を、遠く闇を透かして、ほのかに見える土堤を目あてに、一刻も早くと急ぎました。次第々々に水が深くなつて、強い力で小さい體を押し倒さうとするのを、権三郎は倒されてたまるものかと齒ざしりをし乍ら進みました。

「お母さん！も少しで——」

「そうか、早く、土堤までな——」

二人は波にもまれ乍らも、一生懸命に土堤を目がけて、半ば泳ぐ様に急



ぎました。絶間なく打鳴らされてゐる早鐘も、悲鳴も何も二人の耳には入らず、只々波と戦ふことで一杯でした。水はすん／＼増して今は権三郎の胸の邊までとどきました。それでも二人は少しもひるまず進んだので、次第に近づいて、もう一間位で上れると思ふ所まで來ました。二人がお互に心の中で「しめた！」と感じた時、その時、山の様に大きくうねつて押寄せて來た恐しい波は、無慘にも可憐な親子を呑み込んでしまひました。けれども闇の中でしたから、それを知るもの一人もありませんでした。

可哀想に権三郎とそして母とは、再び波の上に見えませんでした。何處まで波は二人を流したのせう。泥水は何事も知

らない様に、依然として狂つて居りました。

三

それから約一時間許り経つて、東の空がほのぼのと白みかけた頃、遂に川下の土堤の上に死んだ様に倒れてゐる少年がありました。見ると右手に堅く／＼笛を握つてゐました。着物は泥に汚れ、顔は青ざめて、殆ど息も絶え／＼なこの哀かな姿の少年は、云ふ迄もなく権三郎でした。九死に一生を得た夢心地の権三郎は、立上つて邊を見廻し



ました。

「お母さん！お母さん！あゝお母さんは？私は何時お母さんから離れたのだらう？」

権三郎は溢れ落ちる涙を拭、うともせず、渦巻く濁流を凝視めて、聲を限りに母を呼んで、狂はんばかりに泣きました。けれども怒濤の岸を噛む音の外、何物も答へるものはありませんでした。暫くして涙を納め、何と思つたのか、権三郎は土堤の上を川下の方へ方へと、歩いて行きました。

九。
夜中に歌んだ雨は全く晴れて、午近くには、一週間の長い間、どんなにか懐しく思つてゐたお日様が、ニコリとお顔を出しました。けれどもお日様は、一週間前の様な平和な村も、清い流れも、そこに見ることは出来ませんでした。村人は不安の中にも云ひ知れぬ心強さを感ぜ乍ら忙しく一日を働いて、赤い夕日が西の山に隠れやうとした時仰ぎ見て、「どうぞ明日もお日様が出るように」と祈りました。
かくて川も村も、野も山も、一樣に夜の帳にとざされて、東のみ空には、十日あまりの月が輝きました。狂ひ亂れてゐた川水も、その清い光に恥ぢてか、大變静かになりました。村人が皆寝静まつた頃、川下の方から賑り泣くやうな細い笛の音が、川水の音に消え消えにだん／＼近くなつて來ました。昨夜切れた呪はしい堤防の近くに黒い小さい影が止つた時、笛の音も一所に止まりました。それは、朝川下に母を

探ねに下りて行つた、可哀想な權三郎でした。
權三郎は一日母を探したけれども、とう／＼見つけることが出来なで歸つて來たのでした。泥海と變つてゐる我家のあとを眺めて、たつた一日の中にこんなまで變つてしまつた自分を泣きました。そして母さんと呼んでは又泣きました。泣いても泣いても、權三郎の悲しみはどうする事も出来ませんでした。暫くたて涙も聲もかれはてた權三郎は、「お母さん、今夜も笛を吹きます。お母さんの大好きな笛を吹きます。聞いてゐて下さい」とそこにお母さんがゐるかのやうに云つて、唇に笛をあてました。そして母の好きだつた唄を一つ／＼皆吹きました。細い淋しい笛の音は、川の底までも響きました。夜はだん／＼と更けて、月の光はいよ／＼芽えて來ました。權三郎は軽く唇をしめしては吹き／＼して、朝の様に又川下に歩いて行きました。
それから二時間許りの後權三郎の小さい影は、水



に削られて屏風を立てた様になつてゐる岩の上に現はれました。權三郎は再び、
「お母さん！ もう一度吹きます。どうぞ聞いておて下さい。」と云ひながら笛を口に當て苦しさうに息を吸ひ吸ひ吹きました。その細い音は、今にも消えそうに切れては切れては響きました。山も川も皆その哀れな音に涙を呑んでゐるやうでした。やがて笛の音が止んだ時、もう岩の上にはあの小さい影は見えませんでした。

はるか下の月に照された川の面に「ざぶん」と音して、權三郎の姿は水の中に消えてしまひました。母思ひの孝行な權三郎は川に入つて、そして母の爲に笛を吹いてゐるのでせう。それから後この川の底から、いつも波の音に混つて、細い淋しい笛の音が聞えるやうになりました。それから誰云ふともなく、笛吹川と云ふ名になつたのださうであります。

(作者住所、東京府下西葛町七二九)



長者ケ池 (佳作)

池谷 青水

それは、つと昔の事、あります。富士の麓の天間といふ所、吉野某といふ長者が住んで居りました。見渡すかぎり廣々とした富士の田んぼは、みんな此の長者のものでありました。このやうに何一つとして不足のない長者には、どういふものか一人の子供もありませんでした。

十八といふ歳をむかへました。野良で働く村人の間に手卷さんの美しいことが噂されるやうになりました。長者の娘といへば附近の村々ば、いふまでもなく遠い甲州の果までも、誰一人として知らぬ者がなく、評判のものでした。元より大切な一人娘ゆえ、長者夫婦は荒い風にも決してあてませんでした。手卷さんの大きくなるにつれて、長者夫婦の喜びは増ばかりでありました。

シト、と泣く事が、たびたびありました。心配したのは長者夫婦でありました。どうかして前のやうに、いさ／＼した姿にしたいものと醫者と薬と介抱致しましたが、そのかひもなく手卷さんの容體は日一日と弱つてゆくのでありました。さうしてなると、握野には油煙の鳴く夏が、おとづれてまゐりました。富士へ登る道者も、チラホラ見えなくなりました。もう此頃では、手卷さんの病氣もすゝぶん弱くなつて来て、娘自身にも命の危いといふことが、わかるやうになりました。或日のこと手卷さんは、自分の枕邊に長者夫婦を呼んで、『どうか私が死ぬまで、一度、あの白糸の淵の北にある大きな池、見せて下さい。』といひました。

忙しいひげらしの聲はしませんでした。手卷さんは、人々の止めるのもきかず、駕から出ました。さうしてヒヨロ／＼と池の岸に近寄りました。手卷さんは干草の上に腰を下して、メソ／＼と泣いて深く考へこんでをりました。手卷さんは急に思ひついたやうに身をふるはせて碧く澄み渡る、深い池の中へ身をなぞらせました。白いまんまるい波紋は、どす黒い森の影をくすしてしまひました。しばらく池の中には異様な鳴り音がきこえまじはらう。名も知らない鳥が身を切るやうに後の森の中で鳴きました。ただ驚いたのはついて来た村の人々でありました。しばらくして、又池の真中へ氣味の悪い大きな波紋が立ち始めました。人々はたゞその波紋を見詰めてゐました。すると池の真中から、眼もくらむやうな光りものがして、一匹の金の龍がわつと半身を浮かべました。その時の恐ろしさは、なんともたへやうがありませんでした。やがて金の龍は聲を上げて、

「昔、いろ／＼お世話になりました。私は又神様から招かれて元のからだにかへらなければなりません。私の身體は神様のものでございます。神様は私を使者として吉野の家に育てて下さいました。本當のことは、私の腰にた布團の下を見れば直ぐ分ります。どうぞお歸りになりましたら、お父さんや、お母さんに、よろしく申して下さいませ。」これだけの言葉を金龍は残して、そのまゝ池の中へ消えてしまひました。驚いて飛び歸つて来たのは村人で、この話をのこらす吉野の長者にきかせました。その話に長者夫婦は一應娘の寢床を見ました。すると、床の下から、目もくらむやうな光を發して、三つの黄金の餅が出ました。この餅がいつ傳へられてから、誰れいふとなしに此池を長者が池といふやうになりました。世の中は變つて、昔の姿はたゞ／＼消え失せてゆくけれども、此の傳説と池とは今もなほ昔のとはり、その美しい水面を富士の裾野に漂してをります。(作者住所、静岡縣富士郡大宮町握野)



猫の繪 (佳作)

本間 一郎

小金丸は小さな包を一つしよつたまゝ、淋しい田舎道をとほくとどこまで歩いて行きました。
 秋もう末なので、まだ七ツの菊(五時)だといふのに、眞赤な太陽は早くも廣い枯野原の向ふに沈みかけてゐます。
 それを見てゐるとひとりでに懐しい父母や生れた村の事が思ひ出されて、まだ十三になつたばかりの小金丸の眼にはいつしか一ぱい涙がたまつて來ました。
 小金丸はある村の百姓の子供でした。ところが生れつき大それた繪が好きで家にあつても、畑に出て、暇さへあれば直ぐ反古や板ぎれに繪をかいてゐました。で、町へ奉公に出て見ましたが、店の主人は、此の子は繪をかいたのが好きだから、いつそのこと繪かきの弟

子にしたがよからうと言つて、仲れ運しました。
 兩親も持ておりましたけれど、近所に繪の先生もありませんので、其のままにうちやつて置くより外はありませんでした。ところが、ある日其の小金丸が自分の家の白壁に大きな狐の繪をかいたのが原因になつて、村中の人達が大ききなはじめました。夫ればその晩からこの村では、一定の狐が出て、あつちでもこつちでも猫をとり始めたからです。村の人達は其の狐をとらうと思つて、諸所方方に「わな」をかけて置きましたが、どうしてもつかまりません。そこで百姓達は一日仕事を休んで、野となく山となく狐の居るなところを探して歩きました。けれども狐らしいものは何處にも居ませんでした。所が其晩もやつぱり村の鶴は二三羽とられました。そこで、村の人達は、これは乾度魔法使ひが魔法を使ふに違ひないと云つて、村中を調べますと、一人の岩者が小金丸の家の壁に狐の畫がかかれてゐるのを見つけた。そこで村中は大騒動になりました。

「小金丸のかいた此の繪が猫とるのであらう。小金丸は魔法使に違ひない、切支丹だらう。」といふので村中の人ほとう小金丸を村から追ひ拂つて了つたのでした。
 村を追ひ出された小金丸は、泣々お父さまや、お母さんに別れて、家を出て行きました。そして日のとつぷりと暮れた頃、やつとある小さな町に入りました。所が其の町の廣い往來、人つ子一人歩いてゐないので、兩側には大きな店が立ち並んでゐますけれど、中を覗きこんでも人聲もありません。小金丸はどこでもいゝから今夜一晩とめて貰はうと思ひながらあちこちを探して見ますと、町はずれの一件の家の裏口に若い女が一人で水を汲んでゐるのを見つけた。そこで小金丸は「いゝ、私は旅の者ですが宿がなく困つて居ります。どうか今夜一晩宅へとめてくださいませんか？」と頼みました。するとその女の人は、
 「貴下ほどこゝから来たか存じませんが、この町は怖しい町です。悪いことは申しませんが、早くこの町を出て他所へおいでなさい。」と申しました。小金丸は不思議に思つて、



「それはどういふわけですか。しききました。それではお話をたしませう。この三月ほど前から、どこから來るのか犬のやうな大黒が毎晩々々この町に出て來るのです。いくら戸閉りを厳重にしても相手は鼠で、から兩戸ぐらゐるすぐに食ひ破つて遣入つて來ます。猫を

飼つても見ましたが、五匹や十匹では皆あべこべに食ひ殺るされてしまひます。それで町の人達は皆な恐ろしがつて、他所へ引越して

了つて、今はこの通り淋しくなつてしまひました。女の人が申しました。
 其の話を聞いた小金丸は暫く考へてゐましたが、村の人達は私のいた狐が勤まると云つたが、若しも夫れが本當なら、私の書いた猫の繪も鼠をとるかも知れないと思ひましたので、女の人に向つて、
 『よく分りました。では私に其の鼠を退治ますから、今晚一晩だけ、ぜひ私をお家へお下下さい。そしてどうぞ私に半紙を百枚と蠟燭と木矢筈（猫の好きな木の實）それから猫百匹の食べる御飯とを下さい。さうすれば、百匹の鼠の食へる御飯とを下さい。さうすれば、きつと今夜の中に、その鼠を退治してお目にかけるやうにいたしました。』
 女の人はいふ事を信じられないやうでしたが、小金丸があまり熱心にいふやうにと、其の家に泊めて、紙と蠟燭と木矢筈と御飯とを小金丸におげました。
 小金丸は鼠を退治する持つて来た繪の具を出して、百枚の半紙に猫の繪をかき始めました。百足の鼠が出来ると、それを部屋まはりすらしりと御飯ではりつけました。そして

其の前に大きなお皿に御飯を盛つて並べ、其上に蠟燭の粉にしたのと、またよびとを載せて置きました。所が、不思議にも、見る／＼小金丸の書いた百足の猫の繪が、ニヤゴ、ニヤゴと鳴き出しました。そして、黒猫、白猫、雄子猫、三毛猫、狸猫、虎猫みんな一足残らず紙から抜け出して、ゴロ／＼咽喉ならしながら、嬉しそうに御飯を食へ始めました。それは皆丸々とふとつた、強さうな猫でした。そして御飯を食べてしまふと、皆なつれづれ表の通りへ出て行きました。
 小金丸は自分の書いた猫が動き出したので、にびくりにしてしまひましたが、何だか急に恐ろしくなつたので、女の人と二人で雨戸を閉め外の様子を見つておりました。夜が段々更けて来て、丁度子の刻（十二時）になると、今まで静だつた表の通りが急に騒がしくなりました。ゆる／＼と来る聲、何かの倒れる音、高い所から落ちて来たやうな音。それは言ふまでもなく大鼠と猫との争ひでありました。二人はたゞ部屋の隅に少しくなつてふるまへるばかりでした。

よつびてつゞいた恐ろしい戦ひは、夜明け近くになるとぱつたり絶えて、又もとの静けさに歸りました。
 翌朝夜の明けの音を待ちかねて、小金丸は表へ出て見ますと、一足の大鼠が、往來の上に仰向けになつて倒れておりました。けれども不思議なことには、身中に傷一つありません。奥の一室に入つてみますと、猫の繪は元のまゝで表から吹き込む風にはひら／＼とあつた。しかし、御飯、蠟燭も木矢筈もお皿の中にはありませんでした。
 小金丸は不思議な事もあるものだと思ひながら、京都へ出て行つて、或る名高い繪かきの先生に其の話をしますと、先生は小金丸を弟子にしました。
 小金丸は大人になつて、天子様の御殿の横に、馬の繪を描けといふ仰せを受けて、一生けんめいになつて、夫れを描きますと、其の馬は毎晩お庭へ出て、お庭に横たゑある木輪を食へたといふ事です。（なはり）
 （作事住所 下谷區谷中初音町四ノ十七）

鯉になつた坊さんの話

鈴木重正



日本一の琵琶湖で名高い近江の國の三井寺に、昔、大變繪の上手な坊さんが住んでをりました。坊さんの名は、興義と云ひました。そして、この坊さんは、山水の畫や花鳥の畫はめつたに描かず、描く繪と云へば、どれもこれも鯉の繪ばかりでありました。
 興義は、佛様へのお勤めの閑々には、お天氣さへ好ければ、そつとお寺を抜け出して、湖上に舟を浮

べて漁をしてゐる漁師から、獲れたばかりの鯉を買つて貰ふのが好きでした。と云つても別にそれをお寺に持つて歸つて、お料理をして食べようとするのではなく、漁師から買求めると、直ぐにまたふたゝび、自分の手で水中に放つてやるのでした。そして、放たれた鯉が喜んで尾を振り鱗を動かして遊び廻るのを見ながら、興義はその様子を畫にするのが、何

よりの樂しみなものでした。それで、年がたつにつれて、興義の描く鯉の繪は、紙に描いた鯉か、それとも眞物の鯉か、見別けがつかぬ程、立派な出来栄えのものになりました。興義はそれでも、相變らず鯉の繪を描くの一心不亂になつてあまり思ひを凝し過ぎて、いつの間にか知らず識らず、繪筆を持つたまま、居眠りをしてしまふやうなことが、しばしばありました。そんな場合、興義はきつと、夢の中で湖の中に入つていつ、鯉と遊ぶ夢を見、夢が覺れると、夢で見た湖水の有様を繪に描いて、壁に貼りつけてひとりで樂しみ、たとへ繪を所望する人があつても、山水や花鳥の繪を描いて興へ、鯉の繪はめつたに興へませんでした。魚を煮て食べるやうな人間に、折角丹精して育てあげた可愛い鯉がどうしてあげられるものか、と云ふのでした。

ところが、或る年の夏、興義はふとした病が因でドット床につき、七日ばかりして、とうとう息をひ

きとりました。それで、興義の亡くなつたことを歎き悲しんでゐるお弟子やお友達や、さては親類の人が、興義の枕元に寄り集つて、お葬式の相談をしてをりましたが、相談をしてゐる最中に誰かが、死んだ筈の興義の胸の邊に暖かみが残つてゐるのに気がついたので、お葬式を出すのを二三日見合はせることにしました。集つた人々はお葬式を出すことも出来ず、今にも息をふき返すかも知れないと、ちつと様子を見守つてゐました。すると、三日目の朝、ふしぎなことに今まで石のやうに動かかなかつた手足が、ピク／＼動き出したかと思ふと、床に横つてゐた興義は、うんと呻つて床の上に起きあがり、あたりをキヨロ／＼と見廻すのでした。

人々はこの意外な出来事に驚いて、しばらく口もきけず、たゞまぢ／＼と興義の顔を見守つてゐましたが、興義はいきなり、「皆さん、私は随分永く氣絶してゐたでせうね。」と

訊ねました。

お弟子達は、さう訊ねられて初めて、ホツと息をつきました。そして、興義が息を引きとつてから息をふき返すまでのことを、くわしく話して聞かせ、輕はづみにお葬式を出さなかつたことを、互ひに、よろこび合ひました。

「まあ、さうだつたか。」と興義はお弟子達の話をきき終つて、うなづきました。そして、

「お前達のうちの誰でもよいから、平の助さんの家へ行つて来い。助さんの家では、今きつとお酒盛りをして、鯉の料理をしてゐるに違ひないから、それをしばらく止めて、助さんに寺へ来てもらつてくれ。自分は世にもめづらしい不思議な話をするのだから。」と云ひました。そして猶使の者に、自分の云つたことは、少しも疑はないで、平の助さんの家で何をしてゐるか、よく見とめて来て、と命じました。使の者は、興義が見もしない家の襦子を、手に取

るやうに知つてゐるのをあやしみながらも、平の助さんの家へ行つて、興義の云つたことを述べ傳へてから、家の様子をよく／＼見ますと、案の定、興義が話した通りでした。

主人の助をはじめ、主人の弟の十郎や、さては下男の掃守などもまちつて、料理をした鯉を食べながら、お酒盛りをしてゐるところでした。それで、平の助の家の人々は、使の者の口上をきいて、三日間も氣絶してゐた興義が、見もしない自分の家の様子を、あまりよく知つてゐるので、大變不思議なことに思ひました。

平の助は、まるで狐にでもたまされてゐるのではなにかと思ひながら、急いで弟の十郎や下男の掃守を召しつれて、寺へ馳けつきました。そして、興義が蘇生つたことを祝ひました。興義も、平の助に、よく来て下さいました、さぞ御酒宴の途中で御迷惑でしたせう、と禮を述べて

から、

「どうか、私の話すことをよくお聞き下さい。貴方は、漁師の文四と云ふものから鯉をお求めになつたでせう。」と訊ねました。

「はい、おつしやる通り文四から買求めました。しかし、貴方は、まあ、それをどうして御存じなのですか。」と平の助は、驚いて興義の顔をまぢく見詰めたが云ひました。

「どうしてつて、そりや。」と興義は話つてくれました。「貴方も御存じの、あの漁師の文四が、三尺ばかりの大きな鯉を籠に入れて、貴方の家の御門に入りました。その時、あなたは、弟の十郎さんを相手に、日當りの好いお座敷で碁を打つていらつしやいましたし、下男の手守は貴方がたの傍で大きな桃を食べながら碁を見てをりました。そこへ、ちやうど漁師の文四が、大きな鯉を持つて入つて来たので、貴方は、たいそうお喜びになつて、お盆に盛つてあつた



桃を一つ、文四にお興へになり、お酒も酒杯に三杯までおやりになりましたでせう。」と興義はらよつと言葉を切つて、それから、料理人が鯉を料理するまでの、知つてゐる筈もないことを、すらくと少しの暇もなく、手に取るやうに話したので、皆はますく不思議に思ひ、内々では少しうす氣味悪くさへなつて来て、何故そんなに詳しいことを知つてゐるのかそれが聞きたくなつて来たので、興義にその譯を話して下さいと頼みました。そこで、興義はその譯を話しました。

興義が病にかゝつて床につくと、たいへんな熱が出ました。そしてまるで五臟六腑がすつかり焼けただれてしまふのではあるまいかと思ふ程苦しかったので、興義は自分が死んだのも知らず、たゞ火のやうな身體の熱を冷さうと、杖にすがつて家の外へ出て行きました。

外には、そよ／＼と涼しい風が吹いて、その風に

あたると、急に身體が清々しくなりました。興義はそれから、野を越え川を渡り村をぬけて、やがてある湖水の畔に出ました。湖には小波一つ立たず、碧碧と澄み輝いて、渚邊には、緑銀色の藻草の間を、小魚の群がスイ／＼とさも楽しさうに遊ぎ廻つてゐました。

興義は、うつとりした心持で、美しくそして清らかな湖の面を見てゐました。が、いつの間にか、水底へちり／＼と惹き込まれて行くやうな心持がして、とう／＼遊いで見たくて我慢がしきれなくなりました。興義は手早く渚邊に着物を脱ぎ棄て、まの裸になると、ザンブとばかり湖に飛びこみました。興義は、子供の時から泳ぎは上手な筈ではなかつたのですが、不思議なことには、自分の思ふまゝ、自由自在に、遊ぶことが出来ました。しかし、いくら思ふやうに泳ぐことが出来ても、自分の側を、スイ／＼と身軽るに泳いでいく魚が見ますと、自分の

不様な恰好にひき較べて、興義は魚が心から羨ましくてなりませんでした。

「俺も、せめて一度でいい、あの魚のやうに遊いで見たいものだなあ。」と興義は思はず大きな嘆息を漏しました。するといつの間にか興義の傍へ、大きな魚が泳いで来て、「お望みをかなへて差上げます。」と云つたかと思ふ間もなく、大きな渦巻きを起しながら、深々水底へ姿をかくしてしまひました。

興義は吃驚しながら、何事が起るのだらうと待つてゐました。すると、やがて今度は、神主のやうな冠や装束をつけた立派な人か、大きな魚の背にうち跨つて、幾百とも数知れないお供の魚達をひき従へて、しづ／＼と現れました。そして、興義に向つて云ひますには、

「私はこの湖の神の使ひで、湖の神様のおつしやるには、貴君は生きてゐらつしやる間にすゐぶん澤山な魚を、湖に放つておやりになつた功德があまりで

しかし、どうしてもお腹がすいてならないので、とうとうその餌を食へました。

釣をしてゐた漁師の文四は、浮子の具合で、針に魚がかゝつたのを知ると、静に糸をひき上げました。そして見ると、三尺もある大きな鯉でした。文四は、ピン／＼と跳ねる奴を、うんと壓えつけて、口から針をとつて、荒縄で腮を貫いて籠に入れ、平の助の門へ入つて行きました。その時、平の助は、弟の十郎を相手に碁を打つて居、下男の掃守はその側で碁を見ながら、桃を食つてゐたところでしたが、文四が持つて入つて来たなみ外れて大きな鯉を見て、

「何と云ふ大きな鯉だらう。」と、感心してをりました。然し鯉になつた興義は苦しくてたまらないので、「勘辨して下さい。どうか勘辨して下さい。寺へ歸へして下さい。」と夢中になつて叫びましたが、皆は知らぬ顔をしながら、もぐ／＼口を動かす鯉を見て、

す。で、その功德によつて、鯉の王様にして差上げます。しかし、香ばしい餌に迷つて漁師に獲られないやうにお氣をつけ下さい。」と云つて、金で作られた鯉の形をした衣服を、興義にくれました。

興義はあまりの不思議さに、自分の身の周囲をつく／＼眺め廻しますと、いつの間にか、身中に鱗が生え、しかもその鱗が金のやうにピカ／＼と光つて、興義は一匹の鯉になつてしまつてゐました。興義は自分の願ひが叶つたので、自分が鯉になつたことを怪しみもせず、喜び勇んで尾を振り鱗を動かして、遊びはじめました。そして、一日、二日、三日と鯉になつた興義は湖中をあらゆる所を遊び廻つてゐましたが、だん／＼お腹が空いて來ましたので、餌を探しはじめました。するうちにばつたり、漁師の文四が垂れてゐる餌に出會ひましたので、いきなり、その餌を食へようと思つたが、湖の神の戒を守つて、興義はいつたんそこを去りました。

手を打つて喜んでゐました。

やがて、平の助は鯉を文四から買求め、鯉の料理でお酒盛りをしようと思つて、家にある料理人を呼び寄せました。呼び寄せられた料理人は、白の袴をかけ、鯉を俎の上に載せ、鯉の両の目玉をギョツと左手の指で壓えつけ、右手にピカ／＼光る出刃庖丁をもつて、ぶつ／＼鯉の肉へつき刺しました。

その途端、はつとして、興義は怖い夢から覺めたのでした。平の助は、興義の話をき、終り、非常に驚いて、下男の掃守を家へ走らせ、料理した残りの肉を湖に棄てさせました。

それ以來、興義の病は段々と良くなつて、たいへん年を取るまで永生きをしたと云ふことです。そして、興義がいよ／＼今度はほんたうに死ぬと云ふ際になつて、鯉の鱗を五六枚、湖に投込みましたら、鱗に描いた鯉は皆紙から抜け出して、湖の中を遊び廻つたと云ふ話であります。(をばり)

鼠の小母さん

野口 雨情

いまここ鼠が

ちよつと通つた

鼠の小母さん

蝙蝠さん

いまここ鼠が

ちよつと通つた

鼠の小母さん



蝙蝠さん

御門の扉を

見やしやんせ

お月さんがちよつと出て

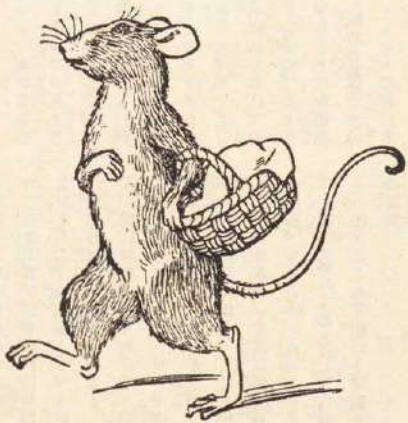
ちよつと射した

月夜になつたら

蝙蝠さん

鼠もちよつと呼んで

ちよつと遊ば



ロビンソン 漂流記梗概

昔、英國のヨークといふ町に、ロビンソンクルソーといふ少年がありました。このロビンソンといふ少年は、非常に元気な少年で、子供の時から水夫になつて、遠い國へ行つて見たいと思つてをりますたが、お父さんが許してくれないので、残念がつてあました。

で、ロビンソンは十七歳になつた時、遂に決心して家を脱け出して船に乗り込んで了りました。(双六の第一) それからロビンソンは幾度も海の上を航海して歩きましたが、ある時、アフリカから歸つたばかりの船長と知り合ひになりました。この船長がロビンソンに向つて、是非アフリカへ行かないか、大金儲けになるからとすすめたので、ロビンソンもその氣になつて、いろいろの品物を買込んで、アフリカ通ひの船に乗込みました。

ところが、不幸にも、船がアフリカに着か

ない内に海賊船に出遇つて、船に乗組んでゐた者はみな海賊の捕虜となつてしまひました。(双六の第二) ロビンソンもその中の一人となつて、海賊の家へつれて行かれました。

ロビンソンはそこで暫く暮してゐましたが、ある日小さな舟に乗つて、巧くそこを逃げ出しました。つかまつたら、どんなヒドイ目に遇ふかも知れないので、夢中で逃げました。それから幾日もの間、嵐風に帆をあけて舟を走らせたが、陸の近くを走つてゐると大きな獅子が吠えてゐますから、それを嫌で打ちとつたりしました。(双六の第三) その後、ロビンソンは、幸にもホルトガルの船に出遇つて、助けて貰ふことが出来ました。

ロビンソンはホルトガル船に乗つて、南米のブラジルに上陸しました。そこで暫く暮してゐる内に、だん／＼お金持ちになつて、土

地も廣く持つやうになりました。すると、こんどは土地を耕す黒人の奴隷が入用になりましたので、また船に乗つて、アフリカへ出かける事になりました。

その途中の出来事でした。ひどい暴風雨に出あひました。船は風のまに／＼もてあそばれてしまひましたが、その内に航路を間違へてしまひました。海圖をしらべて研究しましたが(双六の第四) 暴風はいよいよつるるばかりで、遂に暗礁に乗りあげて、船は沈没してしまつたのです。ロビンソンも危く水に溺れるところでしたが、泳ぎが上手だったので、自分一人だけは陸に泳ぎつくことが出来ました。

しかし、泳ぎついた處は無人島でした。(双六の第五) ロビンソンは／＼に寝れ切つて、海岸に倒れてゐましたが、野獸が襲つて来る心配があるので、樹の上で眠りました。(双六の第六)

翌日はかりりと空がはれて、海もおだやかになつてゐました。そこでロビンソンは沈没した船まで泳いで行きました。それから船の木を集めて筏をこしらへて、それに入用なも

のを一べい積んで、陸にはこびました。ロビンソンは幾度もかうして持つて来られるだけの物を運びましたが、中に犬と猫が一匹づつ生き残つてゐました。それも運びました。(双六の第七)

これからロビンソンの忍耐づよい生活がはじまるのでした。ロビンソンは山から樹を切つて来て、それで家を建てました。家を建てるといつても、斧の外には道具がありませんから、一枚の板を作るにも一本の大きな樹を斧でけづつてこしらへました。

また島には山羊がなりましたから、それを打とつて、その肉を食べることも出来ました。(双六の第八)

ロビンソンはかうして幾年も／＼過してしまひました。ロビンソンはだん／＼お爺さんになつて行きました。

ある日のこと、ロビンソンが室内で仕事をしてゐると、ふいに柱が動き出して、天井が土がザア／＼落ちて来ました。びつくりして見てゐる内に、大地震になつてしまひました。ロビンソンはびつくりして家から駆出し

て海の方を見ますと、海は大嵐の時のやうに大波が立つて、大きな岩がガ／＼海の中に投げ落ちてゐますので、流石のロビンソンも目がくらんで倒れてしまひました。(双六の第九)

地震はその後三時間もつづいてゐましたがそれが過ぎると、後はバツマリ静になつて、今度は大雨がザア／＼降つて来ました。この大地震でロビンソンの家は勿論めちや／＼になつてしまひましたので、テントを張つて、それに住むことになりました。

それから幾日かたつて、ロビンソンは海岸に出て見ました。すると、見たこともない大きな島がの／＼海岸を這つてゐました。たからさつそくつかまへてその肉を食べると、大層おいしく食べられました。またお腹の中から卵が出て来ましたが、それも鶏の卵よりおいしいので喜びました。(双六の第九)

それからまた二三日たしますと、ロビンソンは急に熱病にかかりました。それは大地震の時に雨にぬれた爲めでした。しかし、間もなく熱病は治りましたから、ぶら／＼島の中心

を歩いて見ますと、今迄家をつくらへて住つてゐた處とは反對側の方へ出ました。ところが、此所へ来て見ると、自然の果物が野には一べい實つてゐます。海岸には例の大島が島のやうにの／＼這つてゐるのです。ロビンソンはびつくりして、こんない處は外にないと思つて、そこへ小舎をつくつて住むことになりました。(双六の第十二)

ロビンソンはこゝにある間に一羽の鶏を見つけました。ためしにつかまへて家へ歸つて人間の言葉を教へて見ますと、鶏は人間の言葉を覚えてしまつて、「ロビンソン！ ロビンソン！」とロビンソンの名を呼ぶことが出来るやうになりました。

長い人間の言葉を聞かなかつたロビンソンには、鶏の言葉を聞いてどんなに嬉しかつたでせう。ロビンソンは鶏と、それから船から連れて来た犬と猫とで仲よく暮してゐりました。(双六の第十一)

ロビンソンは無人島へ来てから一度も着物を着更へたことがありませんので、もうキロが白になつてしまひました。帽子もこぼれて

しまひました。しかし、この島は一年中夏のやうに暑いので、帽子がなくては一歩も外へ出ることが出来ません。そこでロビンソンは、自分で工夫して、これまで鐵砲で打つてつかまつた山羊や、兎や、狐の皮などをつり合せて、帽子と着物を、それから短いズボンをこしらへました。全部毛皮なので、雨をはじいて大層工合がいいのですが、その奇妙な恰好つたありません。また、獸の皮で、洋服もこしらへました。(双六の第十三)

その後五年の間は、別段變つたこともなく過ぎましたが、ある日のこと、實に驚くべきことにぶつかったのです。それは海岸を歩いてゐた時、砂の上に、人の足跡を見つけたのです。形が違つてゐるので、それがロビンソン自身でない事は明かでした。ロビンソンは驚きのあまり、足がすくんでしまつて、一歩も前へ出られなくなつてしまひました。もしや何處かに人間がかくれてゐるのではないかしら、と思つて見廻しましたが、人影もありませんでした。(双六の第十三)

來ましたが、それからといふものは、少しも安心がなりません。もしや誰か出て來て自分の寢てゐる間に殺しに來やしないかと思つて、心のやすまる間はありませんでした。ある日、ロビンソンは、いつもよりは遠い方の海岸に行つて見ました。砂の上に立つて沖の方を見ると、何か獨木舟のやうなものが見えるやうにも思ひましたが、はつきりとはわからないので、別段氣にもめず砂山を下りて、波打際の方へ行つて見ますと、これこそ本當に胸をつぶしてしまひました。人間の頭だの、骨だの、焼けた肉などが一面にちらばつてゐたのです。そして、人間の肉を焼いた火がまだ消えずに残つてゐるので、ロビンソンは眞青になつて、そこへ立ちすくんでしまひました。

ところが、その捕虜がいきなり逃げ出したのです。さア大騒ぎになりました。野蠻人たちは驚いて後から捕虜を追ひかけて行きましたが、捕虜の方が早いので、とうとう二人しか最後まで追ひかけて行くことが出来ませんでした。ロビンソンは捕虜を救つてやるのはこの時だと思ひました。そこで、いきなり腹

出して行つて、一人の野蠻人を鐵砲の薬尻でなぐり倒しました。この有様を見たらもう一人の野蠻人は驚いて弓に矢をつがへて、今にもロビンソンに向つて放たうとしましたので、ロビンソンは鐵砲を肩にあて、ドンと一發打ちました。野蠻人はそこへ倒れてしまひました。捕虜の喜びはどんなだつたでせう。いきなりロビンソンの前にひざまづいて、自分の頭を砂におつつけて、ロビンソンの足をとつて自分の頭にいたゞきました。(双六の第十五)

この野蠻人は心のやさしい、よく働く男でした。ロビンソンは、この男をフライデー(金曜日)といふ名をつけました。それは救けた日が丁度金曜日であつたからです。フライデーはいろ／＼の言葉を覚え、ロビンソンのいひつけは何でもよく守つて、まめ／＼と働きました。ロビンソンは家來が出来たので、いよいよ本國に歸る支度にかゝりました。フライデーに手傳はせて大きな獨木舟をこしらへて、それに乘つて海に出ようかと思ひました。しかし、それから暫くたつた或る日のこと

船から出て、英國の土を踏んだ時、ロビンソンは嬉しさのあまり子供のやうにおい／＼泣きました。無事に歸つて來たロビンソンを見た時、故郷のお父さんお母さんの喜びは、どんなだつたでせう。(をばり)

◆二月號は特別號で◆

『日本歴史童話號』です。

「金の星」の二月號は特別號として歴史の中でも特に親しみの深い日本歴史を題材にとつた面白いお話を掲げます。さぞ皆様から大歓迎を受ける事とせう。賣切れません内に



童謡

野口雨情選

(大人篇)

トロトロ坂

三重縣 佐藤 椋彦

寒椿

トロトロ坂の

ボツツリ

咲いてたよ

トロトロ坂の

寒椿

ボツツリ

日が暮れた。

どつちが紅い

神戸市 安田とし昌

夕焼小焼

おべしをお見せ

どつちが紅い

一寸見てあげよ

赤赤蜻蛉

洋服お見せ

どつちが紅い

一寸みてあげよ。

三日月様

福岡縣 大場 繪津

ほそい

三日月さん

小牛の角より

まだ細い。

海蟹夜蟹

徳島縣 村井 樫葉

ねいしてな

お月様まだ

まつ赤だよ

大波小波の

子守うた

お月様出るまで

ねいしてな。

踊り

新潟縣 青木 羊村

をどれ

月の夜にや

青いじよつこ(草履)が

きたなら

赤いカンコ(下駄)はいて

おどりませう。

鼻

東京府 木村 政吉

ほう

五郎助奉公、無駄奉公

そんなに鳴かずに

おやすみよ

ほう

ほう

五郎助奉公、無駄奉公。

越後の海

長野市 特田 清志

海だ海だよ

越後の海だよ

海ちあ海鳥

ボンボと飛ぶよ

浪だ浪だよ

越後の浪だよ

浪にあ小貝が

サラサラ飛ぶよ

海だ海だよ

越後の海だよ。

親ゆづり

東京府 吉田 政造

春戸でないてる

こほろぎの

淋しい聲も

おやゆづり

夜おそくまでとんくと

薬を打つのも

おやゆづり。

雀

京都市 三須 英三

土踏んで

土踏んで

なく雀

お藪の傘

借りて来い

笹の葉ちぎって

さしてこい。

かに

無本縣 田尻ゆきをを

川上村

なぎさの 子かに

横向いてかける

なぎさの 小波

かへの足とつた

ころんだ かにには

白い白いお腹

なぎさの 小波

子かにを起した

なぎさの 子かに

横向いてかける。

夕立雲

東京市 柳 曠

空が曇つた

夕立雲だ

脊戸の雀は

みんな

飛んで逃げた

山の畑の

お百姓さんは

鎌をかついで

黒い雲みてる。

手まり

てんでん手毬の

耳なし兎

一二三で

追ひ出して

四五六で

追ひかけて

七八九で

追ひついで

十でとうとう

つかまへた。

お月様

長野縣 糊澤 粹花

月が出た出た

まんまるな

親のある子が

手をたゝきや

親のない子は

手を合せ

まんまるまるの

お月様。

田舎の道

田舎の道は

淋しいな

お空でとんびが

舞ふてるに

朝から誰も

通らない

夕焼まつ赤に

燃えてるに

朝から誰も

通らない

田舎の道は

淋しいな。

谷の丸木橋

東京府 寺島貞次郎

谷の丸木橋

誰が渡つた

晝間渡つたは

きこりに小鳥

夜に渡つたは

風ばかり。



てらしてる。

きつね

茨城県 菅沼 文哉
岩井校

きつねよよめいり

はやくしな

十五夜さまが

まちかくだ

よるのかぜ

東京都 伊藤登良男
市ヶ谷

暗い所を

吹いてくる

夜の風は

暗さうだ

あぢさいの花も

暗さうだ

お月さま

千葉県 小笠原三郎
佐原校

一三六

風よ

東京都 神藏 徳男
保谷村

風よ風よ

悪い雲を吹きとばせ

黒い雲を吹きとばせ

あしたは

天気になりれ

あめ

香川県 榊田 綾雄
十河校

雨がやんだ

日がてつた。

馬車が通つた。

星

茨城県 大山徳次郎
小笠校

ピカピカ星が

ピカツテル

カハラノヤネデ

(子供篇)

かぜ

滋賀縣 村田 くめ
市邊校

今日あさからかぜふきだ

かれ葉の中の

ふえがなる

お月さん

神奈川県 石塚 俊夫
浦賀校

お月さん山から

顔出して、

一本道を

ヒカツテル

ちどろうさん

熊本縣 澤本 シト
海東校

お目めつぶつた

ちどろうさん

耳をすまして

なにをさく

くもさんのすう

香川県 平石 太一
三溪校

松の木の上に

くもさんの

すうがある

雲

馬山朝 關地 禮子
鮮高女

空をこぎ廻る

大雲小雲

雨が降ると

空の上にもお月様

川の上にもお月様

池の上にもお月様

どれがほんとお月様

かぜ

東京都 糸井 美宣
三重校

さわりノと

風が吹く

とんぼは風に

ついて行く

僕も風に

ついて行く

もりのなか

新潟縣 渡邊 鶴吉
寺社校

さびしい夕方

森の中をとほ

つたとき誰か一人

ひるやうだ。

雨の子供の

雲がひくい

雲が走る

雲が走る

雨の子供の

雲が走る

雲が泣いた

雲が泣いた

雨の子供の

雲が泣いた

三日月

東京都 土井 ふく
待乳山校

半かけ顔の

三日月さん

ひと晩どつちを

向いてるの

お星さん

鳥取縣 木村 白
城取校

ちひさいときには

お星さんを

天の穴だと

ゆびさした

あまど

東京都 龜田 豊
千駄ヶ谷

ほそみち通る

あまどさん

わきはがけだぞ

あぶないぞ

猫の玉ちゃん

静岡県 坂井 賀平
金谷校

家の小猫は

玉ちゃんよ

あの山こえて

向ふの里の

どこかのをばさん

くれました

一三七



幼年詩
若山牧水選

蟲 (賞)

山梨縣泉校
四

小池 光二

箱がくさるくくと
箱の下で
蟲がなく。

許、さう心配しなさんな、蟲よ。(牧水)

魚 や (賞)

愛知縣知多郡
武豊校尋五

岡田 菊松

ととや〜。
ととはなんだ。
いわし〜。

またあちからからやつてきた。
しほさはいかが。
サチ、いそがしや〜。(牧水)

綴方

齋藤佐次郎選

夜逃げした村岡君 (賞)

東京市牛込區東横町

南須原 静也

(十四才)

村岡君が學校へ初めて入つて来たのは僕の四年の秋だつた。村岡君と僕とはいつの間にかお友達になつてしまつた。お父さんは會社の職工で、家は富士見町だといふ事も聞いた。

ある日、いつも僕が行く前に學校に来てゐる村岡君が、鐘がなつて皆が教室へ入つてもまだ來なかつた。その内に先生が來て、出席を取つてから「村岡はどうした。誰か知らんか」とおつしやつた。

するとやつぱり富士見町から來てゐる池谷といふ子が「村岡君の家はゆふべ夜逃げをしました」といつた。僕は初めの内は、何だか、うその様な氣がしてならなかつた。一時間中、僕は村岡君の事を考へ續けてゐた。鐘がなつてから、二の側の村岡君の机の中を見ると、硯や茶わんや箸箱などがキチンと入つてゐた。可哀そうなあの人は、今何處でどうしてゐるだらう。

みがいた時計 (賞)

愛媛縣越智郡波方校尋六

森 チズエ

「こーん〜」いかにもたいぎさうに時計がなつてゐる。「たいがいくるうわい」と私は思つて居たら、そのあくる日からとまつてし

きじ (賞)

愛知縣知多郡
武豊校尋五

石川 源平

けん〜と
きじのなくこゑ
いつもさびしいおく山で
いつも一匹。

評、ホントに、いつも一疋で雉子は啼きます。そのさびしい聲がこの歌に出てゐます。(牧水)

製糖會社の煙突

臺北旭校
尋五

武藤 珍子

製糖會社の煙突は
此頃一つも煙出さない
十一月頃まで居眠りさ
此頃ボンヤリ居眠りさ。

評、あなたごとく時々眠るでせう、と煙突が云ひました。(牧水)

むしば

山梨縣泉校
尋四

小宮山秀則

いたい〜むしば
今朝のけた
ぬけたあとが



ちやん

まつた。私が學校から歸つて何時かと思つて時計を見ると、とまつて居たので、お母さんに聞くと、「兄さんが何ばねじをかけても、ふりをはづしても、少しの間だけかつ〜と言ふきりですぐにとまつてしまふので、町へなほしに行かにならん」と言つた。そのあくる日お父さんが町へ行くのだ

つたので、序に時計も持つて行つた。あくる日からは朝起きると、何時かしらんと時計のかゝつて居る間へ行つては「おツないのよ」と思ひだして「早よ直つてくりやよいに、もう直らんのかしらん。時計屋さんは商賣ぢやけん、兄さんよりはましじやわい」とも思つて直つて來るのを待つて居た。四

五日して近所の
おちさんが町へ
行く支度をして
居たので、お母
さんは「氣の毒
じやが頼んで見
よう」と言つた。
私が學校から歸
つて見るときれ
いなのがかゝつ
て居たので「時

さむしいな。
評、さういふ顔が見える様だ。(牧水)

道

山梨縣郡 今泉 仁藏
山町堂后

小鈴が鳴れば
お馬が通る
お馬が通れば
鈴が鳴る
私のお内の
前の道。

評、「私のお内の前の道」が誠にきいてゐる。(牧水)

小さな雀

東京市外院橋町 富岡たかし
柏木一八九

鳥おとしの前で
小さな雀の内証話
この米食べよか食べまいか
一人の雀が首ふつた。
評、少し大人じみてますけれど面白い。

鳥打ち

大阪集英校 井口 兼子
専三

さつき出合つた
鳥打ちが
ころがる様に下りてゆく。
お山のとつべんで
見てゐたら。
評、よくかうさつぱりと歌へました。(牧水)

ボチ

山梨縣東山梨郡 山下 亮
平等村正徳寺

わたしがあるげばついてくる
私がかければかけてくる
ボチはちさいな かあいいな。
評、歌もかわい。(牧水)

か

香川縣木田郡 高重 花榮
氷上校専五

こくばんをふいてる
先生のかけが
がらすのまどにうつてゐた。

早起き

山梨縣泉校 浅川 彌生
専四

此の頃は
早起きになつた

計を買ふたのかな」とお母さんに
たづねると、お母さんは笑ひながら
「買ふて来たのよ、きれいなあ
らうが」といつた。私はよく見て
居ると新しいやうではあるが、前
のと同じ大きさぐらゐで、同じ型
のだったから「それでも前のとつ
いのやうじや」と言ふと、「直して
来たのぢやが、きれいになつてき
たらうが」と笑つた。ほんとに見
ちがへる程きれいになつたので
「これで二三年はかまわんわい」
と思ひた。

うれしかった日

愛媛縣越智郡 瀬野トキヨ
波方校専六

裏で弟と二人で西瓜を切りかけたお母さん
の方で「おはさんトキヤんおるかな」といつ
てイツさんがきた。「え、おる」とすぐに言ふ
のであるが、あんまり来た事のないイツさん
が来たので「何ぢやるかな」とふしぎに思つ

てみると、お母さんが「おる／＼うらに」と
こたへた。イツさんはすぐに私のとこへきて
「どうしたの」といつたから「今朝が西
瓜をとつてきたので味を見よんのぢやがな。
うちのほうまいんぞん、一つたべとん」と切
つて上げたら、イツさんはそれをたべながら
「トキヤんおまるこびな／＼」と笑つたの
で「どうしたんぞん」と問ふと又「おまるこ
びな／＼」といふきりでわけをいはいない。私が
いら／＼して「何がどうしたん」とおこつた
やうにきくと、イツさんは「今日なあ先生か
らハカギがきたのぞん。そしてみんなよろ
しゆうに言つてくれとかいてあつたんよ」と
いつた。私は又先生からのおハカギといつた
だけだったので氣ぬけがしたやうな氣がした
ので「それがどうしておまるこびなぞん」と
いふと、イツさんは「まだあるんぢやがなよ
うにおきよな。そして二十日に宿題をもつ
てこいと言へとおつたんよ。私はイツさんの
言葉聞きなばらん内から「まだ宿題は出来
たらんの」と思つて「それがどうならい」と
いふとイツさんは笑ひながら「まだあるん
ぢやがな。そして九月號の金の星に、あんな
の死んだつばめが賞に入つておつたから、知
らしてやれとかいてあつたんよ……；そ
らん／＼うれしかるがな」と私が賞に入つた
いふのをきくと、今の心配は忘れて知らん間
ににこ／＼してゐたのでイツさんは言つた。

「そしてな松美さんのもの、ヨソコさんのもの、
佳作ぢやといふ。みんなえいことよ」と急に
さびしやうにして歸つて行つた。私はうれし
くてたまらなかつた。「死んだつばめは先生
も大さうほめてくれたが、まさか金の星の賞
に入るとは思つてゐなかつたものだから。し
かしよくできる副校長のイツさんが、口やし



くつ (賞) 酒井 亮

神奈川縣 奈川師範
神奈川縣 師範

さうに「あんならえいことよ」といつた夢が
目の前にてきて、イツさんの前であつた
うにしたのがすまんやうに思ひ出した。
人參草
岐阜市佐久 柴田 美緒
間町川端
七日の日曜の大變い、天氣であつ
た。貞さんと二人で公園へおそびに
行つた。ぶらんこやすべりをして
ゐるうちにどがかわいたので、牛
若丸の祠つてある山手の清水の所へ
水を飲みに行つた。
かへりにそこに生へてゐた人參草
を摘んで貞さんに持たせて、だんだ
ら坂を下つた。三重塔の下まで来る
と、バラツルを手に上げた三十位の
よそのをばさんにあつた。をばさん
は「まあきれいな、どこにありました
の」と目を丸くして聞きなさいまし
た。貞さんは顔に下つて来た髪を小
指でなほしながら「え、まあそで、
ないね」と云つた。僕は「うん」と
云つた。「さうですか」とをばさんは
惜しさうな顔をした。貞さんは「あ
げようね」と僕に目で知らせた。「う
ん」と僕はうなずいた。貞さんは

工場の笛と
いつしよに起る。

かくれんぼ

高井縣高濱校
高井縣高濱校

田中 陸子

大きな松の木の裏に
こつそりかくれて
今か〜と
待つてゐる

すみやき

千葉縣東金
校 尋六

千勝 きぬ

すみやく煙が白くけむつてゐます
叔父さんのこしらへた
すみやきがまは
小さな竹の煙突から
白い煙を出してまゐります。

とんぼ

東京市小石川區
小日向臺町尋六

神藏 徳男

つん／＼とんぼ
つん／＼とんぼでる。
そこらを飛んでる。
目玉は大きい

何んでも見える。

渡鳥

名古屋市愛知
高等小學校

近藤 眞作

大きな湖とびこえて
渡鳥たくさん
飛んで来た。
波のない湖こえてきた。

雨の夜中

茨城縣多賀郡
坂上村水木濱

菊池 信吉

このまよ中に
しかも雨の降つて居るのに
あの物打つ音は何んだらう
何處かで水を
防いで居るのだらうか。

かへる

香川縣木田郡
水上校尋五

藤堂 シゲノ

草の中でないてゐたかへるは
池の中にとびこんで
大きな波の中に
ちつとういてゐる。



ねむつてゐる先生

「これあげませう」とつぼんでゐるつぼみな
口でブーと吹いて摘んだ所をそへて出し
た。をばさんは「有難うほんたうに有難いね」
ハンクチでくるくまいていくともおじぎを
しなされた。「いゝえではさいならしと僕等は
別れて坂を降りた。「あんな花なんで欲しい
のかしら」と僕は眞さんにきいた。眞さんは
「さあ」と口をつぐんだが「たいてい押花に
するか見舞にもつて行くのやわ」「さうかな
あ、まあ何んにせいいいことをしたね」「あ、し
ょうと思ひながら坂を降りた。ふりかへつ
て見たら未だをばさんは立つていらした。

馬の傷

る。先生はどんなお夢を見てゐるのだらうか
しらんと思つてゐると、おとなりの教室から
はおろがんの音が聞え出した。出る鐘もなつ
た。先生はまたねむつてゐられる。みんなは
寝方が出来たのかさわざはじめた。



七種カネ子
長世保
立高女
佐校

(賞)

角力

大島小學校 田島 英二

何だかだるいので疲れるんで
居たら義ちゃん角力しよう
といつた。「あゝ」といつて立上
つて「だけど一回だよ」とこと
わつたら「二回さ」といつた。
その時どういふわけか身ぢな

愛媛縣感智郡波方校尋六
菊山 トク

うといけ (賞)
山田 宗樹
山田 宗樹
野六 光喜水清

暑い夏の五時間目の練習
です。先生は前に出した級
方に小言をいばれて後に、
私たちに作れと命じて先生
の机におよりになった。い
すにこれをかけられて右足
を左足の上にあけて本をよ
んでゐられたが、しばらく
ぶつて、頭をすこしたれて
ゐられた。「先生がねむつ

てゐられる。かう思つて私はちつと先生を見
てゐると、さつきの小言はどこへ行つたのか
といふやうにすやくとねむつてゐられた。
「すーちゃん先生がねてゐる」とおとなりの
澄子さんに言つてゐると、ふと先生は立ち上
つて窓の方へ行かれた。私は急に思ひ出した
やうに級方をかくまをれて先生の様子を見
つてゐると、しばらく窓から外の體操を
見てゐられたが、又机におかへりになつた。
今度はねこがねるやうに顔を机にすりつけま
した。
「又ねむるのだらう」とちつと見てゐると、
前のやうに目をちつと頭を少しづつ動かし出
した。いつもやかましい先生のお顔に似合は
ず、いかにもたのしやうにねむつてゐる

名古屋市愛知
高等小學校 近藤 眞作

アオ

ツス

チギ

ヤシ

ンヤ

ンヤ

お内儀さんが「もつてきましたよ」と薬瓶
を親方に渡した。「馬を洗つた
か」と薬瓶をうけとつて言つ
た。「へい洗ひました」とさつき
の人が手をふきながら言つた。
馬方が馬の傷した所にぬる
と、馬は傷がやめるのかしらん、
ヒリヒリヒリと筋肉をうごかし
た。

かたわらにお内儀さんが心配
さうに馬の傷を見まもつてゐる

ゆめ

岐阜縣武儀郡
關町校尋四

兼松 文平

汽車の
ゆめを見てゐたら
汽笛の音で
目がさめた。

青いハツバ

東京市牛込區
辨天町

北小路 輝

茄子の葉青い
芋の葉青い
ねぎの葉青い
畑にあるもの
みんな青い。

けやうしつ

和歌山縣東牟婁
郡田原校尋五

城源 四郎

うすぐらい
けやうしつから
すずめが一は
見えた。

人魚のゆめ

千葉縣東
金校尋五

岡本 サイ

海の夜中に人魚らが
さんぐのくしを
さしこんで
をどりをどつて
つかれて
ねむつた。

休の日

香川縣水
田校尋五

佐野 七郎

トツチンカン／＼かちやさん
毎日／＼音たてる
今日はさびしく
音がせぬ。

朝

東京市牛込區
成城校尋五

加島 逸

朝の陽をすひながら
畦道をトボ／＼と行く人影
稻の上を飛ぶ雀の聲
コト／＼と水車の音
陽は次第に上つて行く。



お達友 (賞) 千金 藤友
東京縣東六郡
なほ山横

ある日

長野縣下伊那郡
神稻校尋六女

東 一 枝

いが、こつちから「ちや二回やらう」といっ
た。そして帯を持ってやりはじめた。
一度土俵ときめた敷居のさきまでおして行
つたら、その時急に義ちゃん「もし勝つた
ら五錢やる」といつた。「よし」といつてなほ
押したら、足をかけまよふたすきに逃げら
れてしまった。又まん中へ行つて足をかけた
り、押したりして居る中に、腰車ではたんと
たゞきつつけられた。足がたゞみへつく拍子
にくるぶしをいやつといふほど打つた。
「いたッ」といつてこすりながら「もういや
だ」といつた。義ちゃん「ほん」といつた。
か。今さかさになつたらう」といつた。「う
ん。だからいやなんだよ」といつたら「でも

私と正子と井戸端でむしろを敷いて、學枚
で云ひ付けられた仕事をしっていると、蟻がむ
しろの上を往來して本の上や手帖の上を歩い
て仕方がないので、来る蟻をみんなたゞい
てしまった。丁度私は書くことを終へたので、
何んの氣なしで土の上を見ると、蟻が大きな
蟻を大勢引いて来るところだ。
今度はいやでも何んでも大きな石の上を通
らなければならぬ。私はちつと見てある
と、蟻は大勢かゝつて石の上を上つて来る。
蟻は大きな蟻なので、容易に上れまうもな
い。其のうちに正子も驚いてしまったので、
家の中へ入つて行つた。少ししたつて又来て見



トゴママ (賞) 熊野縣高野
三校尋三 加村山

勇の傷

香川縣木田郡
水田校高一

大久保定義

だと思つた。それに一しよに、さつき蟻をた
たいた事が悲しくなつて来た。
僕の方にこんど新に道路を通しはじめた。
トロツコで盛に土を運んでゐる。夕
方から仕事をしてゐる人は歸る。す
ると村の子供等はトロツコにのつて
遊ぶ。僕もふるをたきをはつて、末
の弟の勇とトロツコにのりにいつた
時には、近所の子供らは面白さうに
あそんでゐた。僕が行くと五年生の
小出君が「大久保君のり給へ」と言
つてくれたので、僕は勇と一所にの
つた。下りておしたりのつたりして
ゐる内に、僕がのる順になつた。僕
がのつてあると、向ふから一臺のト
ロツコが走つてきた。たちまち僕の
トロツコとしようとなつた。僕は勇
と共にころげ落ちた。僕は「しまつ
た」と思つた。勇は泣きだす。僕は
勇をおつて歸りかけたが、勇があま
り泣きやまないで、「勇どこかいた
い」と聞く。「てがいた」と言
つた。僕はすぐ勇をおろして右の手
を見た。丸くはれ上つてゐる。僕は
はつと思つた。



通信

自由畫選評

山本 鼎

今度は、どつきりいし繪があつて選ぶのにた... 畫には佳い繪が少いでせう。クレイソンの色... 自然の印象が出て居ません。蠶油に漬けた... 風景の印象を頭におかなければいけません。

いたやうであつたりして、おかしい處はある... が、全體として生氣のある、そして何か感じ... の出づる素描です。

幼年詩選評

若山 牧水

地震さわざで暫く見なかつた諸君の歌を久... し擬に見て嬉しかった。大人の知らないい... ない面白さを持つて居る。諸君が供らは知つ... てる持たないところを、諸君が供らは知つ...

童話の選後に

野口 雨情

童話教育について疑念をいだかれてゐると... 云ふ或る小学校の先生と、童話と教育との一... 致は不合理であると説かれてゐる。或る童話研... 究者(はんたうに、童話の研究をされてゐる... のかどうが私にはわからないが、自ら童話の... 研究者であると云つてゐるから、ここに童話... の研究者と云ふ言葉をもちひきました)に、御... 注意しておくことが一般読者の御参考にもな... らうと思はれます。

○田島英二さんの「角力」。五個も上げそくな... 見えた。つまたなうな顔した田島さんの顔が... 見えました。
○東一技さんの「ある月短い文の間に自然の... 大きな暗示を十分にあらはしてゐます。い... 作です。
○大久保定義さんの「男の傷」は少年の赤い顔... を見るやうに、元氣なおかたの文章です。無... 駄のない、いきなりとした作です。
○此の外掲載外になつてゐる作の中で、瀬野ト... キさんの「うれしな日」は息もつかずに... おしまひまで讀みました。そして、なかく... いなアと思ひました。
○それから角倉三郎さんの「自轉車」はある時... 間の心持ちと場面とが巧みにとらへてゐまし...

募集童話に就て

本月推薦童話を發表するはずでありました... が、催設童話號その他編輯上のいろいろの都... 合のために次號で一とまとめにして發表する... 事となりました。御投稿になつた皆さんのた... めに一言申添へます。(記者)

募集傳説童話に就て

かつて募集した傳説童話の當選作は本月號... で發表いたしました。尚發表外にすぐれた... 作がありますので、その諸作と作者を本號で... 發表する筈でしたが、誌面の都合で次號に廻... します。(記者)

綴方選評

齋藤 佐次郎

なぞならば、現代教育の缺陷を補ふには、... 文藝の力、藝術の力に頼らねばならない。それ... が最もよろしいと云ふところから、文藝教育... が唱道され、藝術教育が唱道されて来りました。
以上は、童話と教育の一致は當然のことと... 一點の疑念もない筈です。
そこで念のため申し添へておきたいのは、... 單に童話を教へるための童話教育ではありま... せん。童話作家に仕立てるための養成教育で... はありません。児童の心を干からびさせない... ための感情教育が童話教育なのです。童話教... 育は情操の陶冶が目的なのです。文藝教育と... 云ひ、藝術教育と云ひひなな情操の陶冶が目的... なのです。情操の陶冶をばかることがどうし... てゐるでせう。もしわるいと云ふならば、... あまりに教育の何んたるかを知らなすぎさ... る人です。不合理だと云ふならばあまりに童... 話の何んたるかを知らなすぎさる人です。ほん... たうに教育の何んたるかを知り、ほんたうに童... 話の何んたるかを知つたならば、明せずして... 童話と教育の一致を見出すことが出来る筈で... す。いや、進んでも童話教育を唱道せねばな... らない筈です。

○いろいろの都合で、しばらく綴方を出さな... が出来るにゝあつたが、新年號から漸く綴... の整理がついて、毎月出せる事が出来るやう

になりましたから、どしどし投書して下さい。
○今月の選をして見ると、しばらくお休み... にしてゐたに對して驚いた作が非常に深山あり... ました。ところが、大抵の作がそろつて同... じやうな出来合いの作で、中で特に賞に當り... 作を選ぶ事が大層困難でした。ねきんでゐ... るといふ程のものを見逃がなかつたからです... しかし、兎も角も、夜逃げした村岡君と、み... がいた時計の二作を賞に擧げて置きました。
○で、例によつて、主だつた作に就て讀後の... 感想を述べ見ますと、南原原さんの「夜逃... げした村岡君」は前半はごく平凡ですが、な... ばりへ行つて美事に光つてゐました。思はず... いふ村岡君の處へ行つて見ると、机の中に硯... や茶わんや筆箱がちゃんと置いてあるといふ... が、實に藝術味があるのです。あれだけで... 外の事は何んにも書かないで、もう十分な... です。
○森チズエさんの「みがいた時計」も面白い... 題材も變つてゐて、いと思ひました。ニコ... ニコ笑ひながら、いと気持ちに讀みました。
○瀬野トキさんの「うれしな日」も、こほ... 上手すぎる位上手です。
○柴田美緒さんの「人妻草」これも例によつ... て上手な作です。中で、人妻草がうらやま... づきみを口でフーと吹くといふ邊の描き方が... 特に目をひきました。
○湖山トクさんの「わむつてゐる先生」は上手... に皮肉に書けてゐるのでクス／＼笑ひまし... た。先生のお顔が目に見えるやうです。先... 生は「カネ」を垂してゐたでせう。
○近藤實作さんの「馬の傭」は、いゝ寫生です。

誌友並に愛讀者へ!!

振替口座は暫く休止になつて
 をりましたが、十一月廿六日よ
 り今まで通り開始される事とな
 りました。長い間御送金に御面
 倒をかけてをりましたが、今後
 は今迄通り東京五九五六番の
 本社口座へお振替へ願ひます。

講演だより

沖野 岩三郎

昨年の七月十五日に甲州鹽山の青年會へ招
 かれて童話の講演に行きました後、東京の婦
 人ホームに行つた事や、房州館山の中華民
 青年會の夏期講習に行つた事も、皆な報告す
 るのを怠りませんでした。

七月末から信州香掛の千ヶ瀬に行つて、其
 所の音楽堂で、三回の童話大會を開いて、何
 れも満員盛會でありました。

九月廿八日には輕井澤小學校へ。附近の小
 學校の先生達に百人餘り集つた席で童話に就
 いての私の意見を三時間半程話しました。夫

れから十月三日には、小諸小學校の童話會へ
 行つて、全校の生徒千數百人に對して、二回の
 講演と、先生方に對しての短い御相談とを致
 しました。

十月七日には岩村田といふ所の婦人會員百
 五十名から招かれて、童話に就いての意見を
 二回話しました。

十一月十二日には山梨縣都留郡鳥澤小學校
 で生徒に對する二回の講演と、先生方に對す
 る一時間のお話を致しました。當日六月小學
 校内の桐の花社からは「ゴセイクライカス」
 といふ祝電をいただいた、同人の方々からわ
 ざ来て下さいました。

他からも申込がありましたが、私は自分の
 著述の方の仕事が忙しいので、御氣の毒なが
 ら、皆なお断り致して置きました。本年は出
 来るだけ大勢の皆様とお目にかゝるやうに致
 したいと楽しんで居ります。

本誌の顧問本居長世先生は十二月一日、日
 本童話の宣傳のため、米國の各大都市に向つ
 て、演説旅行をなさるため御出發になりました
 た。みどりさん喜美子さんの二令嬢もお父様
 と御一緒に御出發になりました。アメリカの
 各地の演奏會で可愛いみどりさん、喜美子さ
 んのお口から、野口先生の童話がうたはれる
 時アメリカの少年少女たちはどんな喜びを以
 て迎へるでせう「青い目の人形」と唄はれる

本居先生の渡米

これは、本年の呼物の一つとなるでありませ
 う。
 ○本誌の顧問、本居長世先生は、別項でもお
 知らせいたしました通り童話の宣傳のために
 米國の各地へ演奏旅行をなさる事になりました
 たので、その間本誌の童話作曲は、作曲界の
 大家中山晋平先生と小松耕輔先生とが擔任し
 て下さいますから、これまではまた違つた
 意味で面白い作曲を皆さん、ごらんにいれる
 ことが出来そうです。

○新年號豫告の分と同様に掲載出来なかつた
 作が大分にありますが、これは次號から次第
 に掲載いたします。

事でせう「アメリカ生まれのセーロイド」の
 その唄が、アメリカでうたはれるのも面白い
 ではありませんか。
 日本童話界のために喜びに堪えません。日

編輯室より

○謹みて新年を迎へます。新年のはじめにあ
 たり、愛讀者の皆様御幸福を祈ります。
 ○社員一同無事にこの新しい年を迎へること
 が出来ましたのは何よりも嬉しいことです。
 本年は社員一同大きな覺悟を以て進む決心を
 持つてなりました。かたても申したことがあり
 ますやうに、大正十三年度「金の星」が尙一
 層の大飛躍の年でありたいとねがつてなりました。

○二月號には、實に面白い「日本歴史童話」
 をつくりました。沖野先生、小島先生、補山先
 生、窪田先生、其の他の大家の苦心の作を掲
 載いたしますから、やんやといふ喝采を博す
 ことが出来るであります。

○尙ほ沖野先生は、どつちが偉いかといふ
 題のもとに、長編の非常に面白いお話を書い
 て下さいます。二月號にはその題で特に此の
 號だけ歴史童話をお書きになります、それ
 から先きになると、これまで他の作者が書い
 たことのないやうなお話しになるのですから

講演部より

▽講演部は本年は一層の大活動をいたします
 沖野先生と野口先生と非常にお元氣です。
 講演御希望の方は本社へ御申込下さい。

お目出度うございませう

金の星社

- 齋藤 佐次郎
- 山野 虎市
- 遠崎 龍一
- 西川 儀兵衛
- 中野 守
- 野口 英吉

◆金の星誌友募集◆

「金の星」の誌友を募集いたしま
 す。誌友にはいろいろの特典と便
 宜がございますから、御希望の方
 は本社宛に誌友規則書を送れとお
 御申込み下さい。早速お送り申上
 げます。

金の星の合本

水島爾保布先生装幀

眞赤な緋クロースへ、美しい金箔を
 置いた、目もさめるばかりに美しい
 水島先生獨特の装幀です。

◎第一輯(同第四卷第七號より)(買切)

◎第二輯(同第五卷第一號より)

▽定価金壹圓八拾錢
 △送料金十四錢

◎第二輯も御注文が非常に多いので、やが
 て買切れになります。此の際御希望の方
 は至急に御申込み下さい。

出版部より

○本年中に澤山の本を出版する計畫でありま

したが、震災後は印刷力の足りないために、
 豫定の五分の一の仕事がはかどらない有様で
 閉口いたして参ります。

○で、本年中に四五種を發行いたす豫定にな
 つてをりましたが、大部分は明年にくりし
 まして、本年は新版としては三宅房子先生の
 『家なき子』だけを十二月はじめに發行する
 ことにいたしました。

○三宅先生の『家なき子』は金の星の誌上で
 發表されて、わくやうな大人氣だつた長編物
 語りです。一冊にまとまつて、寺内先生の美
 しい装幀にかざられて、十何枚かの挿畫が入
 つて出版になるので、さぞ大評判で飛
 ぶやうに賣れることとせう。この哀れなしか
 し美しい物語りは、世界の模範的讀物の一つ
 に數へられてゐるものですから、クリスマス
 の贈り物としてもごく適當なものです。

○明年は金の星社は少年少女の模範的讀物の
 ために一大計畫を實行いたします。すでに印
 刷に着手いたしてをりますが、『世界少年少女
 文庫』といふ名のもとに、厳選の上世界の代
 表的讀物を全部もつらして發行いたしますの
 で、他社では到底出版出来ない程の安價で、
 しかも内容、ていさい共にゆきんで優れた
 本を出します。第一編から四編までの書名を
 挙げますと、第一編「ロビンソン漂流記」第二
 編「ナポレオン物語」第三編「下」キホーア
 第四編「カリバ」旅行記その他まだ澤山
 のめづらしい本が續々と出ます。

自由書掲載外佳作

池田幸太郎(東京) 恒彦(香川) 森川 恒彦(香川) 村上 恒彦(神奈川) 白井 殿(香川) 上田 正富(山梨) 藍 花子(千葉) 浅野ふみ子(岐阜) 大谷喜代子(北海道) 七種ハルノ(長崎) 井上 道子(鳥取) 早川 重英(京都) 柳澤 しま(千葉) 早川 重英(京都) 内田 恭子(千葉) 廣川 一郎(山梨) 鈴木 薫(香川) 柴谷 保(茨城) 葛山新之助(横濱) 深谷 達也(福島) 真野 善治(京都) 城井 安子(東京) 勝田ふさ子(千葉) 東 文子(横濱) 関口 常男(福島) 星野 一美(石川) 渡邊子(鳥取) 浅野慎一郎(茨城) 神井 二男(長野) 市村 正(栃木) 藤本亥之助(岐阜) 町田 荷長(野) 瀧水富久子(京都) 吉田 静雄(岐阜) 野木はなの(兵庫) 鷹谷 静(秋田) 小野 園(山梨) 依田 武雄(山梨) 佐伯 清夫(山口) 吉田 富江(鳥取) 田中きく子(東京) 伊東 郁子(宮崎) 中丸鐵次郎(東京) 野口耕之輔(宮崎) 岩田 力造(名古屋) 寺西 経法(北海道) 池田 昌子(朝鮮) 渡部 勝(愛媛) 齊藤 邦一(和歌山) 稻村せつ子(東京) 竹川 久子(仙臺) 大仁田 清(大連)

増澤 勇(長野) 寒竹 進(東京)

幼年詩掲載外佳作

中道 ヲト和歌山 市川 龍次(山梨) 平井 シズ香川 新庄 憲光(山口) 池田 昌子(朝鮮) 中川 ハル(福井) 平井 由加(香川) 柿田 常英(新潟) 住文之助(東京) 白川ユキ(香川) 仲田カサ(千葉) 大前ふく(長野) 松尾 登志(千葉) 服部 保一(愛知) 大賀 常次(香川) 吉村 太郎(岐阜) 吉田 正三(福島) 藤野 武夫(山梨) 藤野 格翁(山梨) 内藤 八重子(山梨) 浅川うら(山梨) 原 八重子(山梨) 宇佐川新八(宮城) 松本 莊一(大阪)

綴方掲載外佳作

野澤 千代(新潟) 堀内 三郎(廣島) 安井 谷雄(愛知) 堀内 三郎(廣島) 武藤伸三郎(福井) 松本 君子(東京) 富岡 隆(東京) 星野 一美(福島) 藤老 すみ(千葉) 木村 カル(千葉) 藤澤 勝正(愛知) 芝田 逸野(和歌山) 村山 さと(山形) 加藤新之助(愛知) 權方 九(北海道) 土平 博人(愛知) 原田 國造(静岡) 本城 平男(京都) 武藤 珍子(臺北) 富岡たかし(東京) 市川 龍次(山梨) 竹川 久子(仙臺) 中島フシ(新潟) 小笠原三郎(千葉) 酒井 孝平(新潟) 佐野 誠一(東京) 坂井 安子(東京) 小谷 義次(姫路) 木村 カネ子(千葉) 田島 コト(千葉) 佐藤 百代(東京) 高城 義雄(東京) 深谷 達也(福島) 渡邊ひでの(山梨) 大内 憲二(福島) 關地 ひでの(山梨) 神山千代子(東京) 望月いその(山梨) 篠崎 龍之助(福岡) 竹本 政男(石川) 森 次郎(愛媛) 菊川 弘松(愛媛) 永井 大作(京都) 稻華 弘直(茨城) 石田 勳男(千葉) 伊藤 賢作(名古屋) 近藤 眞作(名古屋) 齊藤 安一(山梨) 細野陣三郎(群馬) 本田 和夫(長野)

童謡掲載外佳作

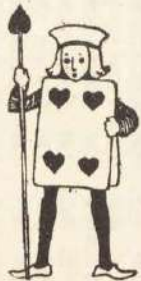
伊藤 富城(新潟) 西川右三郎(香川) 杉本 幸好(山梨) 原田カナル(宮崎) 浅野慎一郎(茨城) 長田長太郎(山梨) 山口 俊子(三重) 松田 正平(長崎) 磯ヶ岡 校模(香森) 五十嵐 優(東京) 鈴木とく(奈良) 鈴木 倫(新潟) 林田 五郎(長崎) 遠山 荷子(布哇) 早川 佐市(朝鮮) 久川 登夫(秋田) 野路 暮秋(岡山) 大倉 周子(新潟) 保田山太郎(兵庫) 物部 長春(高知) 城戸 雅二(埼玉) 伊東 剛子(岐阜) 新井 長之(山形) 白井 一男(朝鮮) 朝田 萬六(廣島) 佐川 傳一(三重) 井上 比呂(京都) 津 春一(東京) 浦川しん子(廣島) 瀧野 始(大阪)

金の星新誌友名簿

山口 克道(京都) 松田 正平(長崎) 高岡 藤米六(香川) 藤本 秀太郎(東京) 藤原 英男(長野) 武川 直子(三重) 安田 篤夫(山口) 朝岡 貞一(長野) 喜田 正義(福岡) 赤井 何次郎(京都) 山宮 星二(熊本) 龍田 偉夫(宮城) 新頭 門人(山口) 若月 弘作(北海道) 仲町 哲雄(長崎) 小川 元治(東京) 川田 彰明(東京) 小宮 彰明(東京) 林 明雄(香森) 朝田 孝子(千葉) 後藤 夢人(兵庫) 植原 花子(鳥取) 米田 水造(群馬) 野口長七郎(横濱) (以下次號)

新しく出来た本

▲童謡と兒童の教育(野口雨情先生著) 本書は童謡教育の祖述者である野口先生の著述であり、童謡教育とは何を教ゆる教育であるか、何ゆゑに童謡教育が必要であるかを一々例をあげてわかりやすく述べられてあります。童謡のわかない方でも本書を一讀すれば童謡と教育の關係が直にわかり、又、教育會や父兄會などで童謡の講演をする方にとってはこの上もない良参考書であります。序文中に「機智空想的に富む童謡は教育上危険である。正風童謡以外の童謡は教育上有害である。正風童謡以外の童謡は、教育上排斥すべきである」と説かれた獨創的卓見に至つては何人も首肯せねばなりません。四六判、二百八十八頁、ポプリン箱入、定價一圓五十錢。東京牛込區山伏町イデア書院發行) ▲藝術教育(松原文學士著) 本書は小原國芳先生と共に我が國藝術教育の先覺と云はれてゐる松原文學士の著述であります。その序文中に「藝術教育の本義を明にせずして、之を主張するのは流行を追ふ好事家かさもなくてハイカラ者流の類であらう」と痛言されてゐる通り藝術教育の本義を根本的に解説したるは本書であります。苟も教育にたづさるる以上、何人も必讀すべき良書であります。四六判、二百二頁、ポプリン表紙、箱入、定價一圓五十錢。同上イデア書院發行)



讀者だより

▼記者様、私はこんどから「金の星」の誌友になりました。私が誌友になった動機はかうなんです。今度の大地震大炎災で、私の家は本所にあつたために忽ち焼かれてしまひました。それから私は命からくす逃げ、お父さんやお母様と一緒に中野の親類の家へ行つてなりましたが、もう暇もなかりましたので、また本所の焼跡のお家へ、歸つて来ました。けれど「金の星」を讀みたいと思つても、本屋さんにも發着してしまつたので、買ふことも出来ません。でも私は、長い間「金の星」を愛讀してなりましたので、一と月でも讀ますにやうなことが出来ません。そこでお母様におねだりして今度誌友になつたわけです。どうぞこれから、毎

月雑誌を送つて下さいませ。(本所のバラックにて 竹川あや子)
▼記者様、私は熱心な愛讀者の一人です。寺内先生のお書が読一読といよいよ美しくなるのに喜んでなります。妹なども寺内先生のお書の崇拜者です。ことに、「大鷲」の足にのつて空へ上つたシンパッドは實に偉い人だと思ひます。(東京市外青山 門田道雄)
▼あ人がい早く復舊が出来てうれしく思ひます。實際たちの良くない地震でした。當時は仙臺なんかも随分殺氣立つて、毎日三四人宛組んで夜番をすると言ふ騒ぎでした。十月號の第一アラビヤン、ナイト號はたつた一と晩の中に讀み終へてしまひました。それ程金の星の發行が待たれたので、何處か淋しい影があつたとしても、災害前とちつとも變らない體裁のものに出来あがつたので、感傷的になつて居るから、アラビヤ夜話に幾度も前から繰り返して讀んでやつたので、さう強くは受け取れませんが、たけれど、大震災の日に書かれた色々なお話は最も心をひかれました。譯

からはなれた自由な描寫はかへつて親しみが加へられてよかつたと思ひます。「徳捨山」は淋しい童話でした。曲もその通り、不完全な音楽の知識を利用して歌たばうとするのですから、観合に簡単な童話の曲でもひと通りでない苦心です。十一月號が待たれます。みなさんのめざましいお働きを願ひしてペンを置くことに致します。(仙臺大とも生)
▼めつきり寒くなりましたが、「金の星」の諸先生方には、お變りはありませんか。十月號の「徳捨山」の作曲は大好きです。それから「影踏み」も好きです。童話も皆面白く拜見しました。殊に諸先生方の御遺蹟を讀んで、別にお怪我もなかつた事を、うれしく思ひました。「金の星」を、これからはもつともよいものにして下さい。出来る限りのなら童話もつと増して下さい。(大阪 菅時三郎)
▼十一月號を讀んで残り惜しいこと二つ。
一、ドン、キホテの面白い畫はなすがなはつた事。しかし、これは前篇終りで、後篇が出るらしいので、それが楽しみで

二、「鈍果山」がもうおしまひになつて了つたこと。一年間面白く讀んで来たが、もうこれでおしまひなのかと思ふと、悲しかつた。最後の「進軍令」と「大地震」といふ處は中でも一ばん面白いと思ひました。メルソんとクローンウエルが出て来て、大地震の後の救済をやる處はさすがは沖野先生だと思ひました。
一、西條先生の面白い「長篇「牢破り」が、まだ来年までも續く事。
二、秋庭先生の「漁夫と悪魔」がいよいよ佳境になつて行く事。
(京都市烏丸 寺田一雄)
▼皆さんがもう忘れようとしてゐるのに地震の見舞状を出すなんて、こゝとも思ひましたが、皆さんお變りもなささうで何より結構でした。自分の家は浅草にあつたものですから、ひとたりもなく焼けてしまひました。まあそれはそれとしても、金の星の出版部を焼いてしまつた事は本當に残念です。自分は今油袋にならなければ、近い中に又徳捨(かへらな)すればなりません。「金の星」の愛讀者の方々

にもする分損着をうけた人もあるでせうが、悲觀せず、皆な一緒になつて「金の星」の發展に努力いたしませう。(市外池袋 松井純三)
▼どうぞ「金の星」をお送り下さい。いつも本屋ばかりのせいで「金の星」の三字をさがして来ました。が、今日お湯屋のかへりに歸し「金の星」を見つけたことが出来ました。どうぞ一時も早く送つて下さい。私は鶴のやうに首を長くして待つてなります。(佐藤百代)
▼記者様、私の間にお答へ下さい。いや私の質問おさすみ下さい。
一、佳作の所に、名ばかりでなく、以前の様に題名もおのせ下さい。
二、毎月讀者の童話、童話、童話、童話、童話を二頁位づつに大きくさし入れて、お出し下さい。讀者のさすいふのがないとい何となくさびしい心持がします故、どうぞ。
童話、童話は特選だの推選だの入選等なくてもよろしいのですから、童話は掲載外佳作の内、一番いと思ふのにし、童話は佳作の上の方を三つ四つ、幼年特選方は入賞の分だけな、と云

ふ風にして頂きたいのです。是非々々。(牛込 寒竹進)
▼御希望ごもつとも存じます。今までも、是非皆さんのお作を澤山に雑誌に出したいと思つて居りましたが、十分の頁数がなくて、いつも御満足と與へることが出来ません。しかし、これからは出来るだけさうするやうに努力いたします。(記者)
▼十一月號の「金の星」もア何と美しく、そして立派なことだらう。第一表紙の藤谷先生の美しい畫に感心しました。それからお話も大空への冒険的なすごい繪に感心しました。それからのお話もすてきに面白いのに感心しました。「金の星」は雑誌界の王様です。どうか新年號に、大奮闘をやつて下さい。(九州 川上喜一)
▼今度の震災のために愛讀者諸君は如何なされました。それから諸兄姉様、今度私達は純文藝雑誌をつくりなす。皆さん詩歌、句、童話などを御覧下さい。會費十錢です。埼玉縣北埼玉郡大越村ノンドラ社内 腰塚正夫)
▼秋もだん／＼濃くなつて来ました。露もだん／＼濃くなつて来ま

した。東京から見ると信州は寒いです。田舎は静かですが退屈でもありません。この間兄さんが「週刊朝日」を買つて来てくれましたが、矢張り「金の星」が戀つた感じがします。發行したから早速御送り下さい。(長野縣 水内益壽)
▼私も藤澤先生のやうに、兄さんと一緒に傳説を集めてみます。よく書けたら、送上げたいと思つてゐます。(岐阜 柴田美穂)
▼僕は山田照輝君にすめられ、「金の星」を愛讀するやうになりました。投書もどし／＼とします。これからよろしく。童話は發行以内で御座いますか、自由畫は大体何でもよろしく御座いますか。(東京 田島誠二)
▼童話は十五行以内といふ規定になつてなります。自由畫は大げんでもかまいません。(記者)
▼……もうとくに御見舞申上げやうと思つて居りますが、交通機關の杜絶や、また京濱地方の罹災者への救済品を婦人會から送る事になりました。随分忙しい目を通しましたので、ついこんなにおかれて了ひました。かうした際、先生方の御苦勞の程、遠くから御

案じ申上げます。何の力にもならないうちも知れませんが一誌友として衷心から御發展を祈つて居ります。そしてこの様な際に、日頃の先生方の御力を充分にすべての方面に向つて、お現し下さることを望んで居ります。(土屋梅枝)
▼アラビヤン、ナイト號面白く拜見いたしました。矢張り何時までも讀まざる名作だけであつて、構へが大きく、何とも云へぬ一種の深い味があると思ひました。どうか外國のよいものをどし／＼出して下さい。(大阪 北野光一)
▼私はこれまでに「アラビヤン、ナイト」のお話を讀んだことがありませんでした。世界一の面白いお話だといはれて居りましたので、讀みたい／＼と思つてなりました。ところが、今度、「金の星」にアラビヤン、ナイト號が出ましたので、すぐに本屋へ飛んで行つて買つて来て、一と晩でみんな讀んでしまひました。全く驚きました。こんな不思議な面白いお話が世界にあるとは、思つて見なかつたからです。これも「金の星」のおかげと本當にありがたと思つてゐます。(北海道 山口妙子)

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……………山本鼎先生選
幼年詩……………若山牧水先生選
綴方……………編輯部選

〔注〕課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことが、諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ重厚紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號(切は十二月廿八日)の以後は次號(過る)發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童話……………野口雨情先生選
童謡……………齋藤佐次郎先生選

〔注〕童話は十五行以内、童謡は二十字詰二百行以内、優秀な作品は、推薦しまたは「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、「入選」の場合は金の星賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

本號に限り金五拾錢送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
一年分十二冊(送料共)參圓六十錢
但し四月號九月號新年號は特別號で四十錢です。御注文の際は、この分だけ必ず加へてお申し込み下さい。
振替口座東京五九五六番

〔送〕御注文は必ず前金で御拂込み下さい
〔送〕送金は振替が一番便利で御座います
の切手代用は(零錢切手)一割増しです
注) 第何巻第何號よりと書いてください
意) 住所姓名ははつきり書いてください
廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年十二月八日印刷納本(毎月一回)
大正十三年一月一日發行(日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
印刷所 東京市小石川文藝町八番地
印刷所 東京市小石川文藝町八番地
發行所 金の星社
振替口座東京五九五六番
電話小石川五三七八七番

世界的名作物語

◇作家いたみ讀度一うも非是も者だん讀度一◇

家なき子

三宅房子先生編

寺内萬治郎先生
裝禎並ニ挿畫

▽實價金壹圓卅錢
▽送料金十三錢

かつて『金の星』誌上に一年間にわたつて掲載され、熱狂的大歡迎を受けた名篇『家なき子』が遂に壯麗無比の美本となつて現れました。親もなく、家もなく、旅役者となつて諸國をさまよひ歩く本篇の主人公の生ひ立ちには、讀者に如何に大きな感謝を與へるでせう。讀者は必ず泣かずには讀めずまい。しかし、此の涙の中からこそ大きな人生の教訓を與へられるでせう。何人も是非一度は讀んで置かねばならぬ世界的名作です。

本篇は三宅房子先生が一ケ年間の努力になつた二百七十頁にわたる長篇物語りで、美しい裝幀と十數葉の挿畫は共に寺内萬治郎先生の苦心になり、定價は例によつて獨特の安價で發賣になりました。注文殺到してをりますから、買切れぬ内に急ぎお申込み下さい。

父戀し

▽定價金壹圓
▽送料十二錢

本居長世
先生作曲

人買船

▽定價金六十錢
▽送料四錢

同童讀本話

赤い猫

▽定價金九十錢
▽送料十二錢

一つお星さん

▽定價金六十錢
▽送料四錢

東京市外田端三百五十一番地 金の星社
東京市外田端三百五十一番地 金の星社
東京市外田端三百五十一番地 金の星社

ライオン歯磨

富士の山ほど
たかだかと、
ライオンはみがき
積みあげて、
おたから船の
初ふなで。
のぼる旭を
帆にあびて、
おたから船の
行く先は、
日本の隅々、
世界の果々。

